

岳 山

第 二 十 一 年

第 三 號



山

岳

第二十一年第三號

昭和二年九月發行

目次

開聞嶽及球磨溪	大平晟	一頁
十二ヶ岳と鬼ヶ岳	沼井鐵太郎	一八
溫泉嶽	大平晟	三六

圖版

○球磨川網場の瀬	對頁
○段和山より北に十二ヶ岳を見る	二四
○段和山より北西に鬼ヶ岳を見る	三二
○溫泉岳 其一	四〇
○溫泉岳 其二	五六

○段和山より北々東に御坂山塊の主脈を望む	七六
○故名譽會員志賀重昂氏	九六

雜 錄

自九五
至九〇

○霧ヶ峰登遊雜記(柳澤悟)○第二回修正版地形圖「山中湖」に就て(武田久吉)○赤石荒川其他に就て(前澤政雄)○「御坂山塊」に就ての補遺(沼井鐵太郎)○富士山雜記(國府精一)

雜 報

自九一
至九五

○指導標新設○登山路新設○清水越隧道に千古ノ冷水○松原湖畔から珍植物を發見

○圖書紹介

○飛騨史料 (維新前後之一)

○會員通信

會 報

自九六
至一〇二

○第三十六回小集會記事○小島烏水氏歡迎晩餐會○名譽會員志賀重昂氏の訃○新入會員紹介○會員章再交付○會務報告
○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

附 錄

山岳第十九年總目錄

山岳第二十年總目錄

開聞嶽及球磨溪

附 日 本 一 の 大 樟

大 平 晨

一、鹿兒島 二、開聞嶽 三、日本一の大樟 四、球磨溪

一 鹿 兒 島

霧島山より天降つた予は、國府八幡の稱ある、官幣大社鹿兒島神宮に詣で、鹿兒島本線により、鹿兒島驛に着いたのは、五月二十三日（大正十三年）午後四時二分である。

驛より直ちに人力車を賃し、山下町薩摩屋旅館（紳友吉）に投宿した。當驛では、人力車に乗る人達に乗車賃金を記入した、鐵道省檢印の票札を渡すので、甚だ便利である。

薩摩屋は、當市第一流株の旅館で、設備は頗る佳良である。城山の麓の稍高みに在るので、室内居ながら、櫻島山の英姿を眺めることが出来る。晚餐には、名物の薩摩汁と、鰯の刺身を味つた。茄子の鴨焼は、本年の初物で珍らしい。隣家に於ける薩摩琵琶の演奏を聴いたのも、亦此地の情調を味ふ一つであつた。

五月二十四日 風雨 朝鹿兒島七二 夕同七〇

此日は風雨の爲め旅館に籠城し朝鮮金剛山資料に關する調査に従事した。夕方風雨も止んだので、照國神社に詣で、興業館を觀、附近市街の狀況も視察した。照國神社は、

島津家二十八代の藩主齊彬公を祀り、別格官幣社である。境内老松翠滴り、閑雅を覺える。北方に島津久光、齊彬、忠義三公の銅像がある。

興業館は、縣内の物産陳列場で、著名な薩摩紉、薩摩上布、大島紬、薩摩焼を始とし、錫器、竹器。水産物には、名代の鯉節などが目に着く。館前に、花卉の販賣店もあつたが、美しいツ、ジの花が、人目を惹いてゐる。

市街は樹木が多いが、殊に公孫樹の老木が多い。庭木には、黄果累々たる枇杷を所々に見た。

名物の文旦漬は、各店に見えた。ザボンの砂糖漬である。山芋を原料とする輕羹は、冬でなければ製造せぬので、試みることは出来なかつた。市場の掲示によると、白米上一升四十錢、黑砂糖百匁十六錢、白砂糖二十九錢、地卵百六十匁三十錢、牛肉百匁一等肉五十五錢、以下遞減五等肉三十五錢、豚肉一等肉四十五錢、三等肉三十錢、バナナ百匁八錢などとあつた。一般に物價は甚だ安い。

又ラムネ鑛泉四合壺入六十錢、始良郡牧園村戸崎の産とあつた。大分縣湯ノ平溫泉のと共に、近頃大に好評を博してゐることである。

予は机上書見の際、誤つて懷中時計の表ガラスを破損したので、大坪時計店について修繕を依頼したが、立どころに辨じ、其技術も優良であつた。又番頭の手を経て名刺百枚の印刷を依頼したが、數時間を隔て、持參した。有村活版所であつた。流石は九州南部の首都と領かれた。

五月二十五日 快晴 朝鹿見島六七 夕同七四

前日來の風雨は收つて、今日は珍らしい快晴で、午前十時に於ける、日光直射の所では、百十度を示した。

午後市街を散歩し、西郷南洲翁の墓に奠した。此通路には、所々に南洲翁の墓に對する指示標を見た。又此方からの質問に對しては、「西郷様のお墓は彼方でありませす、何町程ありませす」と、此地の人

達が、非常に敬虔的態度で指示されるのは、如何にも偉大な翁の面影が偲ばれる。

墓は、淨光明寺址といふ丘陵地にあつて、展望が良い。中央に西郷隆盛墓、左に桐野利秋、右に篠原國幹、其他村田、別府、邊見等、丁丑の役に戦歿した勇士の墳墓がある。南洲翁の墓は、基石方約一丈、墓石の高約一丈位である。北方に南洲祠堂がある。大正九年の改築で、翁の遺物を藏する。域内に櫻櫛を植ゑ、ヒマラヤシダの高さ二丈程のが二株あつた。

引返し、城山公園に向つた。岩崎谷の入口路右に、「南洲翁終焉之地」と刻んだ、將棋の駒形した、高さ一丈許りの石碑がある。裏面の文に「九月一日城山ニ據ル二十四日自双年五十一桐野利秋村田新八桂久武池上貞固別府景長邊見十郎太其他悉ク之ニ倣フ。明治三十二年九月建之」とある。西南の役は、我等が小學生時代であつて、當時壯烈な戦争談を聞いたり、「新政厚德」などと記した旗押立てた、薩摩武士の錦繪など見て、印象甚だ深かつたので、今親しく茲に翁の墳墓や碑石に面し、感慨實に無量であつた。

こゝから爪先上りの坂路を進むと、右手に南洲翁が二十有餘日起臥して、軍事を議し、圍碁に親しんだといふ洞窟がある。

南に坂路を辿ると、城山公園である。老松古杉もあるが、概ね檜、椎、樟、大樟等雜多の闊葉樹相茂り、鬱々森々として天日を蔽ひ、樹幹にはマメヅタ、ノキシノブ、セキコクなど生じ、頗る閑寂を感ずる。「林間教授」と書いた標柱を建て、各種の樹木には、其名稱、科目、效用を掲示してある。燃ゆるが如き緋紅色のケラマツ、ジが、今正に満開であつた。この地は随分高い丘陵で、其展望所からは、數十丈の脚下に、縣廳、市役所、裁判所を始め、市街の大部分を瞰下し、錦江灣（鹿兒島灣）上直距約二里に、櫻島御岳（一一三四米）を仰ぎ、遠く大隅半島の山々を望むは、宛然理想的山海畫圖の感じがする。櫻島山は鹿兒島風景唯一の誇であらねばならぬ。

五時頃薩摩屋に歸つた。予が歸館に先だち、高頭仁兵衛氏は、井上專敬氏と共に來館して、予を待ち受けられた。予が今回山岳巡禮の途、薩摩入を機とし、東京の寓居から、特に來會された高頭氏の好意は、感謝に堪へぬ。井上氏は長岡の産、現に此縣の指宿中學校長で、高頭氏とは親しい關係があり、予は高頭氏の宅で面會したこともある。兩氏は予を歓迎し、共に薩南に遊ぶべく、こゝに同宿された。

予は櫻島御岳に登り、それで九州南部の打切とし、引返して、溫泉岳を探る豫定であつた。櫻島山は、城山公園からの眺望は、如何にも美しいが、大正三年の大爆發以來、面目一變、頂上に於ける景致は、殺風景であり、且つ攀登頗る危険の虞もあるさうだから、之を略して、薩南の名山、薩摩富士の稱ある開聞嶽に登るべく、兩氏の勸告があり、且つ兩氏は予と同行することであるから、早速同意したのである。

二 開聞嶽

五月二十六日 快晴 朝鹿兒島 六八

開聞岳に登るべく、高頭井上兩氏と共に自動車に乗り、鹿兒島を發したのは、午前八時三十分である。

道は概ね近く海岸に沿うので、左手には始終岸打つ白波を眺め、右手には丘陵相連り、小平地にも丘側にも、青々として莠が、既に一尺以上に伸びてゐるのを多く見た。喜入の海濱では、井上氏の指示により、内地では唯一の産地であり、珍植物である琉球筍と云ふ小灌木を、車上から一瞥した。十時四十分指宿中學校に着いた。鹿兒島から約十三里、自動車の賃金二圓といふは、非常に安い。指宿は、指宿郡衙の所在地である。

こゝで自動車に乗換へ、直ちに開聞嶽麓まで續行する豫定であつたが、我等が乗つた自動車が、途中少々時間潰しをしたので、連絡を失つたのである。それで井上氏の舍宅に休憩し、晝食の饗にあづかり、午後二時發の自動車に乗つて、指宿を發した。こゝから道は海岸を離れ、山川港で再び海を見るのであるが、此間には、温泉の湧出する所が多く、黒松の老樹茂れる間に、新設温泉浴舎を所々に見た。山川港は火口灣といはれるだけに、海水囊の如く深く灣入し、之を圍んだ岸壁松林の景致も良く、碇泊にも適する。こゝから道は復海に遠ざかり、三時四十分、開聞嶽の北麓、頼娃村大字十町着、濱田旅館に少憩し、^{ちやう}開聞神社に詣で、社務所に就いて記念印を受けた。

枚聞神社は、當國一の宮で、今は國幣小社に列してゐる。開聞嶽は舊名「ヒラキ、ダケ」であつたが、音讀して「カイモン」と呼びたるより、更に海門と命名するやうになつたとは、大日本地名辭書にある。同書に又「枚聞神社の祭神は、大日靈尊或は木花開耶媛など傳ふるが、蓋し枚聞神は即ち山岳の靈にして、神代記に牽強するは誤れり」と記してある。

境内に樟の老木が數株ある。勅使殿の傍にある大きな蘇鐵が目に着いた。

鹿兒島からの自動車が、豫定通り運轉すれば、開聞嶽麓に到着するのは、正午頃であるから、半日を以て、開聞岳を昇降するのは、樂なものであるが、我等が枚聞神社の參拜を終つたときには、既に午後四時であつた。井上氏はまだ本山には經驗が無いので、指宿中學からは、博物擔任の教諭嶺定二氏が、特に案内の爲に同行された。嶺氏は既に四回の經驗があるので、「時間が不足であるから、明朝にしては」と提議された。然るに山麓から見上ぐる開聞岳は、綠氈を着た様な、如何にも優しい美しい整然たる傾斜側線を引いた圓錐體を呈し、且つ約三千尺といふ標高であるので、歸途の少々位は、夜に入つても差支ない。今日は非常な快晴ではあるが、若しも明日天候の變動にも逢つたなら、遺憾であるからと、高頭氏と予は、これから直ちに攀登決行を主張した。井上氏は我等が主張を重んじて、

同意されたので、年若い嶺氏は、抗議の申立もならず、出發することゝなつた。歸りの夜路は、覺悟のことで、唯幾分の便利にと、宿屋からは提灯一張を携帶したのだが、これさへ邪魔だとして、郊外路傍の松の枝に預けて登つた。

十町部落の郊外は、既に開聞岳の裾野に屬するので、緩斜の勾配を呈し、ぼつ／＼杉や赤松もあるが、餘り大木は見えぬ。ス、キも餘り伸びては居らぬ。概して芝生である。路傍にキイチゴ、ホウロクイチゴが黄熟してゐるので、屢々口にした。後者は、葉形ブドウに似た大形で厚く、裏面に褐毛密生し、葉は刺を有して、稍々蔓狀をなしてゐる。予は九州に入つて、始めて見參に入つたのである。果實の味は、前者が優つてゐる。キイチゴは、我郷國にも多いが、此地方のが、味餘程優れるやうに感じた。

登るに従ひ、傾斜は漸次急となり、往々豆粒大の輕石を見る所もあるが、概ね代赭色した粘土の露出が多いので、雨後には随分滑りに惱まされることゝ想はれた。而も徑は行潦侵蝕の作用を受けて、深く抉られ、恰も藥研式急坂を呈し、所々崩壞して、所謂空瀧カラダヤを作る所が多い。殊に左右から蔽ひかれるウラジロシダ、コシダが頗る蔓延して、我等が腹や胸を撫でたり、寧ろ抽んで、頭上を掠めるのは、まだよいが、概ね面部を見舞つて來るので、眼鏡を掛けた高頭氏と予は、少なからず惱まされた。

三四合邊までは、低い雜木林に、松も混じてあつたが、登るに従ひ、松は姿を消し、落葉樹に混じて、カシ、シヒ、クロキ、ユヅリハ、ヤツデ、サカキ、ヒサカキ、ツゲなどの闊葉常綠樹が多く相茂り、樹下にはツハブキ、クロクモサウ、シヤウジヤウバカマ、アスヒカヅラ、イタドリなど見た。五合邊以上は、コシダも殆ど絶えた。

八合目邊は、外輪壁上に當り、環狀の淺き窪地を呈し、灌木叢中に小瀦水があつたが、殆ど飲用に

は堪へぬのである。

こゝから以上は、頗る急峻となり、ツ、ジ、ヒサカキ、ツゲ、ハコネウツギなどの密生した中、安山岩塊點在の間を縫ひつゝ登ると、眼界始めて開けるのである。

六時三十分頂上に達した。

陸測五萬分一圖には、標高九百二十四米突と註さる。高頭氏の日本山嶽志に「別稱、枚聞嶽、海門嶽、薩摩富士、筑紫富士、小富士、金疊山、蓮花山、長王山、空穗島。薩摩國揖宿郡の南方にあり、潁娃村大字十町なる枚聞神社より一里八町餘にして、其頂上に達す、標高三千四十九尺」とある。正に右の米突と合致する。

又同書に「枚聞神社より西の方六七町許、山中に窟あり、木花開耶媛誕生の跡なりと傳へられ、此所より頂上まで一里一町餘、嶽の根の周圍三里十六町餘、三代實錄に、開聞神山とあり、俗に空穗島といふは、貞觀十六年、山上大に燃えて空洞となれり、故に名く」とある。

開聞神社縁起に「景行天皇二十年十月三日一夜に涌出す」と書いてある。

頂上の小石祠は、伊弉諾尊、伊弉冊尊、大日靈貴尊、瓊々杵尊、木花開耶姫命、彥火々出見尊、豐玉姫命、葦不合尊、玉依姫命を祭るといつてゐる。

頂上に立つて、眸子を南西に放てば、黒島、硫黃島、竹島など、近く波靜かなる海上に點々として假山の如く、南東に當り、巨鯨の身を横たへたやうなのは、鐵砲傳來の嚆矢地として、其名も著き種子ヶ島である。其右に當つて、屹然天を衝く九州第一の高峯八重岳を載するものは、巨幹良材として本邦無比の杉を産する屋久島である。

北東には、一碧鏡のやうな池田湖を近く脚下に瞰下し、遠く鹿兒島灣上、香爐を置いたのは、櫻島である。其右に當つて、一段の高さを示すのは、大隅半島の霸王高隈山（一二三一米）である。二山

の間、遙かに天雲縹渺の際、雄大崇高な連峰を望むは、皇祖發祥の靈域霧島山である。

開開嶽は、薩摩半島の南端に崛起し、四邊に殆ど山岳といふやうなものが無いので、海に島に陸に灣に、其展望の壯觀大觀に於ては、多く其比を見ざる所である。殊に此日は、非常に穩かな快晴であつたので、深紫深紅の極致を現じた日輪は、金波紅波の漂ふ西海に沒するとき其光景の美觀麗觀は、眞に譬ふるに物なき印象を與へた。

本山の昇降には、約四時半を要するのだから、單に山に登り山を降るだけの目的ならば、半日の行程としては樂過ぎる。本山は攀登の途上、概ね灌木に鎖され、特殊の興味も無く、眺矚も無いが、唯頂上展望の大觀が、其全價值であらねばならぬ。殊に海上に點在する、麗しい島山の景致と併せ得た、日の出、入日の美觀が、唯一の價值であらねばならぬ。予は野營の準備で登らなかつたことを、深く遺憾とするのであつた。

頂上には、累々たる岩塊を縫うて、身長以下のヒサカキ、ツゲ、ユヅリハなどに伍して、紫花のツツジが見えた。此ツ、ジは、樹幹割合に伸び揚がり、葉も大きく、霧島山や阿蘇山、温泉岳頂上に於ける、その幹枝極めて矮縮し、光澤ある小花を密生するのとは、餘程違つてゐる、アケボノツ、ジの一品らしい。ツハブキが甚だ多い。

日本山嶽志によれば「頂上は方七町許りありて寛平なり、泉水ありて四時増減なし、土人神泉と稱す」とあれど、展望の美觀に、無我の境に入つた我等は、暮色既に蒼然として、足元の薄暗くなつたのに、始めて氣付いた程であれば、所謂神泉には、敬意を表するの遑も無く、七時十分急遽下山の途に就いた。

麓からは、嫩草山式に優しく見えた本山は、實際徑路は、それほど優しくも無く、攀登に豫算以上の時間を費した我等は、更に又頂上に於ける展望に耽つたので、二三合邊以下に降つて、夜路に入る

の豫定が、頂上既に夜の帳に入る有様となつたから、嶺氏は提灯とようを持つて迎へに來るとて、急速力で駆け降られた。

我等三人が、八合目邊に降つた頃は、既に人の顔も辨じ得ぬ暗さとなつた。試みに嶺氏が降路の程度如何を探るべく、時々高聲を放つて呼んでみるに、始めは應ずる聲も明瞭で、漸次微かとなつたはよいが、方面が稍々怪しいやうなので、或は徑を踏み迷ふたものではあるまいかと、井上氏は心配し、我等には緩歩を求め、自ら追ひ懸けて降られた。

天は飽くまでも澄み渡り、星は爛々として我等を見舞へど、闇路を照らすべき皓々たる月は無い。手探り足探りで、歩一步と運んだ時、予は誤つて金剛杖を手放した。急坂であるので、杖は音を立てながら、忽ち落下した。アツとばかり思つたが、暫くにして音は止んだ。其止點は約十數間の先きであらうと推察された。木曾御嶽よりの記念杖で、予には頗る忠實なる山友であるから、棄てゝは置けぬ。手探りながら十數間も降ると、幸にも手に觸れたので、非常に嬉しかつた。若しも暗中摸索效なくば、手巾を路傍の枝に結び置いて、翌日に於ける懸賞搜索の目標となさんかなどと、高頭氏と語り合つたのであつたが、早速手に入つたのは、天佑の一つであらねばならぬ。

藥研の底を下るやうな徑路は、往々空瀧式の缺壞所があるので、晝とは違つて危険である。「若しも墜落負傷でもしたならば、前途尙遠なる貴下の山岳巡禮に對し、遺憾千萬であるから、進行を中止して、迎への人達が登り來るまで、休憩しませう」との高頭氏の動議に賛成した。

待てども待てども、仲々迎への灯が見えぬ。時刻は随分過ぎたやうだが、時計を照らすべき明りが無い。二人とも煙草は吸はぬので、マッチの持合せが無い。懷中電燈を入れた荷物は、鹿兒島薩摩屋旅館に置いて來たのであつた。心の時計では、既に十時と過ぎ、十一時と過ぎたであらうと思はれるが、更に消息が無い。溫暖な薩南に位置し、標高一千米突以下の山でもあり、且つ風も無い穏かな夜

であるから、このまゝ一夜を凌ぐも、凍死などいふ心配は無いと、落ち着き拂つては居れど、腹は頗る空渴を訴へ始めたので、予がポケットには、嚴島神社で邂逅した郷里の安達寅松氏夫人から贈られた、キャラメルが在るのに氣付き、之を食へた。屢山行を共にした愛酒博士の高頭氏も、登山に際しては、決して盃を手にはせぬ嚴格な方であつたが、實は今日の開聞岳登りを、若草山散歩式と見たので、指宿の井上校長氏宅に於ける晝飯には、殆ど食事も取らず、唯數本の銚子を平げたばかりであつたから、尙更空腹を感じるも無理は無い。氏は此時勉めてキャラメルを二片を口にされたが、生れ落ちてから、キャラメルを味つた第二回目であると笑はれた。瓢兮博士の本色も窺はれて面白い。

待つこと多時、漸く麓の方から、チラ／＼提灯の光が見え、やがて呼應の聲も聞えた。井上、嶺兩氏が二人の工夫と共に、登り着かれたのは、十二時過ぎであつた。聞けば降り路に、兩氏とも心は彌猛に逸れども、足は仲々はかどらず、且つ屢々路を迷はれたさうである。

午前一時三十分濱田旅館に歸着した。宿の人達の心盡しの親切で、風呂にも入り、食事すまし、就寢したのは、三時であつた。

五月廿七日 快晴 朝十町七〇 夕鹿兒島七〇

旭光が障子戸を照らしてゐるので、早速起き出で、樓上に於ける客室から、朝日に匂ふ優美な開聞嶽の姿を眺めつゝ、頻りに語り會ふ高頭氏と予との様子を、寢床から見て、「能くも揃ふた山好きの人達だ、昨夜の疲れも打忘れて、早々跳ね起き、又々山を鑑賞するとは」と、井上氏は、讃辭やら批評やら呈された。「昨日は時刻既に遅いので、甚だ無理とは思つたが、登山の大家御兩人が主張されるのに、敬意を表して登り、随分酷い目に逢ひました」と、井上氏は頻りに笑はれた。嶺氏は「我が言を採用せぬから」とも言はれず、唯苦笑するばかりであつた。

開聞登山は、意外な珍事を惹き起したのであつたが、平々凡々の旅行では、印象が薄い。予は今回

の山岳巡禮中に於て、一異彩を有する印象として、終生思ひ出の快事とする。予は例によつて、旅館の記念捺印を求めたのであるが、濱田館主は、世間に普通な宿屋判などは無いとて、實印を持ち出して、恭しく押されたのは、頗る異例であると共に、昨夜來に於ける、家人一同が、純真な親切を、永遠に記念するのである。

麓から見上ぐる開聞嶽は、實に整然たる二重式火山の典型であつて、八合目邊に當る外輪山上、更に中央火口丘を突起せる山容は、恰も伏せた摺鉢の底上に、鏡餅を極めて丁寧に載せたやうである。

日本山嶽志に「此嶽一方は蒼海に根ざし、一方は平地より屹立して、更に層岡複峯の相接する無く、四面遠近より望めど、其形狀異なることなし」とある通り、五萬分一圖を一見しても、其水平曲線が、整然たる圓形を呈するので頷かれる。此點に於ては、正に日本全國無比であらう。

本山の登路は、我等が取つた外に、東麓川尻と、西麓脇浦からするのがある。前者は、明治四十年二月十日登られたといふ、岩佐定一氏の紀行が、『山岳』第六年第二號に載せてある。

岳北一里許りに、九州第一の大湖池田湖がある。大日本地名辭書によれば、「周回四里二十九町、枚聞の御池といふ、開聞岳湧出の跡なりと傳ふ。水清澄甘美、近湖の民皆飲用とす、湖水川尻浦に注ぐ」とあり。地理學小品によれば「周回四里二十町、深百二十尋、神の御池といふ。俗説に、此池奇異多く、風無きに波立つ、又水上神燈を點ず。古より舟を浮ぶるを禁ず。湖上佳景なり。東岸に池王明神を祭る、六月十八日の祭日には、人々酒に酔を盡し横臥す、池神なる龍の臥すに象れるなり」とある。本湖と共に、開聞岳噴出のとき、震搖作用によつて生じたといふ鰻池は、本湖の東半里許りに在る。急崖を呈する丘陵にて圍み、池畔に溫泉あり、風光絶佳なりといはれてゐる。

此日は快晴であるので、十町部落の南に於ける開聞岳の裾野で、附近學校の聯合運動會があるとのこと、學童の團體や、觀覽の人達が、陸續參集するのを見た。又指宿中學生の父兄が、井上校長氏

を來訪するものもあつた。

附近は、指宿中學の勢力範圍に屬することゝて、我等一行は、宿屋から特に優待を受け、而も宿料一人、一圓二十錢とは、餘りに安い。鹿兒島薩摩屋では、料理は勿論、諸般の設備が、甚だ優良であるので、一泊料四圓、外に晝食料一圓二十錢であつたが、當國郡部に於ては、可なりの料理で、一般に一泊料一圓から一圓半位が、普通だといふから、予が今回九十有餘日、五千七百餘哩の旅行中、當地方の物價が、最も低廉であるやうに思はれた。

濱田旅館は、自動車切符發賣所であるので、豫め其用意を頼み置き、我等は繪葉書を認めて發信するやら、附近の散歩を試みるやら、悠々休憩の後、自動車上の客となつたのは、正午を過ぐる三十分であつた。

指宿中學前で、井上、嶺兩氏と別れ、午後四時三十分鹿兒島着、薩摩屋旅館に投じた。
茲に開聞登山終結に方り、高頭、井上、嶺三氏の深甚なる好意を感謝する。

三 日本一の大樟

「薩摩に遊んで、極南開聞岳に登つたのは、一快事であるが、日本一といはれる樟の大本が、此の附近にあるのを見なかつたとあつては、一恨事であるから、是非探りませう」との、高頭氏の勧めに同じ、二十八日午前六時四十分、鹿兒島驛發の汽車に乗り、七時重富驛に下車した。驛前に「蒲生の大本、西北二里三十町」と書いた標札が見えた。

驛前から馬車に乗り、蒲生に着いたのは八時三十分である。この馬車の悠々緩々たるには、恐れ入つたが、其賃金の僅か四十錢といふのにも、亦驚き入つた。大日本地名辭書には「蒲生」とあれど、土人は濁らずに「カマン」更に縮めて一般に「カモ」と言つてゐる。

八時四十分、八幡神社に参拜し、其境内に在る、所謂日本一の大神に見参に入つた。

本多博士の日本老樹名木誌（大正二年編）によれば、「始良郡蒲生村八幡社にあり、地上五尺の處周圍七丈三尺八寸、根元十二丈五尺四寸、高十五間、樹齡八百年」とあり。大日本地名辭書によれば「上總介藤原舜清（眞光坊）大隅に下向し、蒲生に移り、保安四年、八幡宮を蒲生郷久徳の地に創建す。後島津義弘社殿を再興し、『正八幡若宮』五字の銅額を掲げ、一層の威徳を増す」とある。

大日本老樹名木誌の巻頭に掲げた、本樹の周圍にある木柵は、荒削りの丸木に見えたが、今は、白色ペンキ塗の角材となつてゐる。

傍に「樟にきずつけてはいけません大正十一年七月 内務省」。「周圍七丈六尺、高十七間。縣社八幡神社」とあるのは、前記老樹名木誌のよりも、各少々増してゐる。又「天然記念物蒲生の樟、史蹟名勝天然記念物保護法により、大正十一年三月、内務大臣指定」と書いた標札の傍にある揭示が、餘り細字で、読み悪いので、高頭氏から雙眼鏡を介して讀んで貰ひ、予が手帳に書き取つたのは、左の通りである。

「本多林學博士編纂大日本老樹名木誌、並に東京農科大學造林學教室大日本老樹番附により、此樟樹日本第一の大樹たる榮冠を載く、縣社八幡神社社務所誌」

我々は餘りの珍らしさに、無意識的に、此樹の周圍を巡つては見上げ、見上げては巡ること、幾回であつたか判らぬ程で、若しも他所で見てゐたら、狐憑（きつねつき）でもあるまいかと、怪んだであらうなどと、後に笑ひ合つたのである。予は記念の爲め、拾つた數粒の種子を、歸郷の後、庭園に蒔いた。發芽はしたが、雪深い我郷地では、成木覺束無いであらう。

境内には、樅の大木數株も見えた。戊辰、西南、日清、日露各戰役記念碑が、數基建てられてあつた。

予は記念印を受くべく、社務所の所在を行人に問ふた。神社からは可なり距離があるといふので、高頭氏は其間に、此處の大樟に關する繪葉書を購入することゝした。予は社務所兼神職の住宅を尋ねて、捺印を得たが、單に「八幡神社」と刻んだ印章だけである。これでは何處の八幡様やら、判つたものでは無い。路傍に立派な小學校があるので、校長氏に請うて、右社印の下に、校印を押して貰つた。これで蒲生の八幡社といふことが、明瞭となつた譯である。

記念印の爲に、三十分餘を費し、校門を辭し、繪葉書を販賣するらしい、幾つかの店頭を窺いたが、高頭氏の姿は見えない、尋ね廻り、村端に到つたとき、茶屋の階上から、予を呼ぶものがある。晝飯の用意して、待ち受けられた高頭氏であつた。

蒲生から、自動車賃して、重富に出で、汽車に搭じ、鹿兒島驛からは、電車に乗り、午後一時十五分薩摩屋旅館に歸着した。

物價が安い薩摩の國、人情醇朴な薩摩の國、氣候が暖かい薩摩の國、薩摩琵琶に薩摩汁、薩摩緋に薩摩袴、薩摩焼に薩摩節と、讀み立てれば、仲々名物が多い薩摩の國、然し言葉が通じ悪い薩摩の國、數日お世話になつた薩摩屋を辭し、高頭氏と共に、午後三時三十五分鹿兒島發の汽車に乗つた。矢嶽隧道に入る稍々手前に、可なり目に着く瀑布がある。夕陽に映じた霧島山彙の夷守、白鳥、韓國の諸峰を拜し、崇高の感に打たれた。其右に當り、遙かに錦江灣上に浮んだ櫻島山は、何時もながら餘程美しかつた。矢嶽は鹿兒島線に於ける、最高地點を占め、其隧道は、延長六千八百七十七呎、九州第一である。程なく大畑のループ式隧道を過ぎ、八時人吉驛に下車し、驛前の他力屋に投宿した。人吉は、相良侯累代居城の地で、球磨川の天險に據つた其築城は、日本三名城の一に數へられてゐる。

四 球 磨 溪

五月廿九日 快晴 朝人吉五八 夕溫泉新陽六四

午前六時二十五分、人吉驛發の汽車に乗り、予は球磨川の景勝を探るべく、歸京される高頭氏と別れ、一勝地驛に下車した。時に六時五十一分である。

この地方は、古熊縣と稱し、大隅の嚙吠縣と並び稱して、熊襲といつたといふことは、大日本地名辭書に見える。古書に玖摩、求麻、球麻、久萬にも作つてある。

球磨川峡谷水石の美は、一勝地驛から白石驛まで、三里強の間を最とする。予は此日、白石驛午前十一時二十八分發の汽車に乗つて、夕刻島原到着の豫定であるから、約四時間半といふ間に、手荷物三角驛まで、チッキとして發送した後、三里間の景勝を、徒歩にて探らねばならぬ随分忙しい行程である。驛の助役氏は、非常に親切な人で、自分の自轉車を貸せるから、白石驛員に託して、返送すればよいと言はれたが、遺憾ながら、予は自轉車乗の素養が無いので、唯其好意を感謝するのみであつた。

驛前の掲標に「清正公岩西一里二十町（徒歩約一時四十分）鎗倒岩西一里二十三町」とあつた。

道は、始終球磨川の左岸に沿ふ立派な廣路で、爪先下りであるから、歩み心地は甚だ好い。

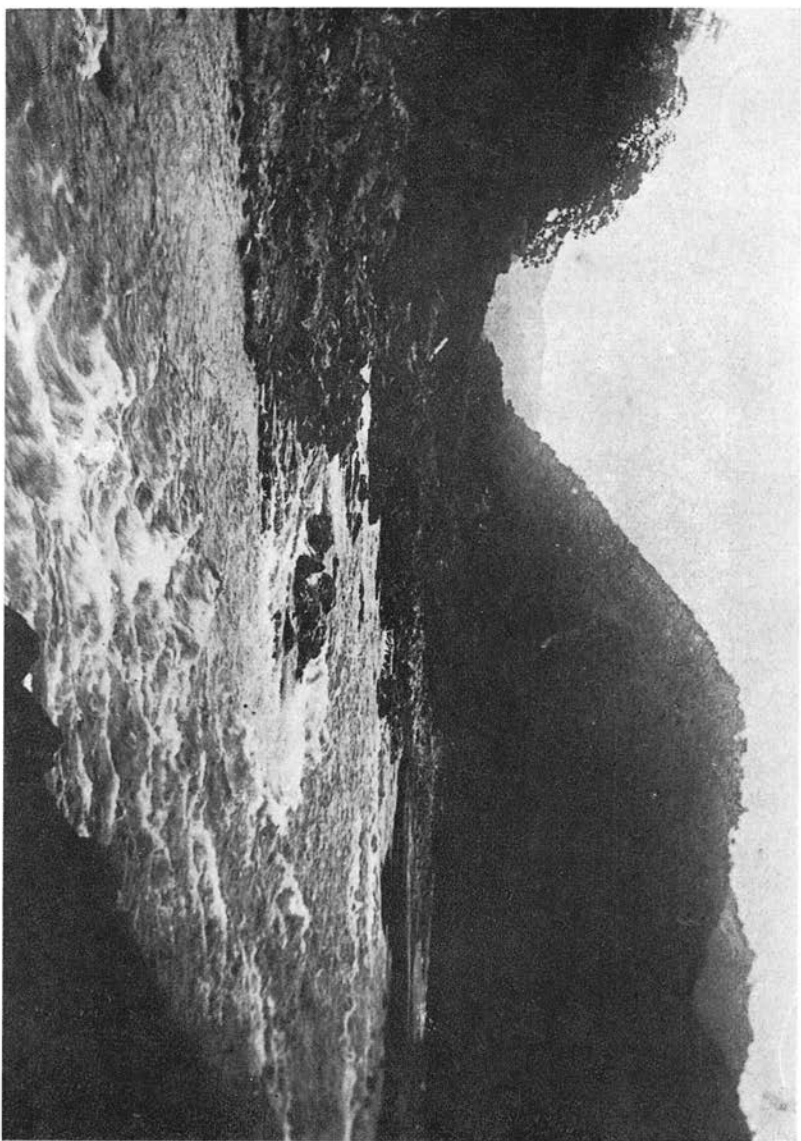
八時「高鼻の瀬」と書いた標柱を見た。此溪谷の標柱は、凡てペンキで上部は白く、下部は青く塗つてあるのは、此溪流美の示標として、相應しい感じがする。二町程に互る兩岸の岩壁は、高二三丈參差高低あり、急瀬奔湍相連り、水石美既に凡ならず、左手から注ぐ支流に架けた長六間許りの大阪間橋といふのがある。川を壓して屹立した岩嶂、高四丈許り、點々たる矮松もあり、岩面を飾るマメヅタやクリハランもある。此邊一帶ユキノシタが多い。谷間には竹林、闊葉樹林に隱見する、茅屋や

瓦屋根に白壁も風情がある。遠き彼方には、鶯朗かに樂を奏し、近き此方には、川瀬の音に和する、河鹿の歌を聞く、此景致、此情調、予は既に耶馬溪に於ける、山陽頼氏によつて其名を残せる、擲筆岩を凌ぐを感ずるのである。

八時三十分清正公岩セイシヤウコウといふを見た。峭立數十丈、松樹マメヅタなどの點飾があること、大阪間橋畔の岩嶂と相似て、規模が更に大なるのである。昔加藤清正球磨を征せんとて、此處に來り、天險の攻むべからざるを知り、遂に馬首を旋らした所だと言ひ傳へ、岩頭の小祠には、清正公を祀つてゐる。對岸には、其名も憎らしい、舅落岩シラトオトシといふのがある。

左手からの小溪流に架けた告橋ツデの畔に、黃薊朱果を綴つたトベラの一群を見、程なく對岸に、槍倒岩ヤリタフシの奇嶂を眺める。行逢つた一婦人に尋ねたら、「ヤッタヲシノイハ」と言つた。岩嶂嶄然として川を壓し峙つこと十數丈、岩脚を洗ふ激流は、幅約十間許り、白雪を噴き、碧湍を漂はし、舟筏矢の如く過ぐる處、昔相良侯も、此處を通過するに際し、行列の槍を倒さなければならなかつたといふので、此名を得たと傳へてゐる。岩壁上部は、短矮なる闊葉樹林蔽ひ翳し、岩面鮮紅點々たるは、ヤマツ、ジの花であらう。岩脚川面から一丈程の高さに、口徑四五寸位の竅孔があつて、水晶のやうな清泉が迸り出て、川中に落下する奇觀がある。其左方には、日光白雲式の瀧があつて、五丈許りの高さより瀧ぎ落ちてゐる、「大瀬の岩戸」と書いた標木がある。清正公岩、槍倒岩附近の景致は、正に峽中第一と思はれた。

此峽谷には、所々に杉、赤松、檜林もあり、又カシ、シヒの常緑樹に伍して、カヘデ、ハゼノキ、ヤマザクラなども相當に多いから、紅葉期の佳景も亦想はれる。路傍にユキノシタ、キンバウゲ、ヤマアザミ、ハルノノゲシ、ウツギなどの花も見た。ヲドリコサウの花は、珍らしき紅色を呈し、ノイバラ、スヒカヅラは佳香を送つた。



東京日日新聞社藏

球磨川銅場之瀨

九時四十分龜割岩カメワリといふを見た。岩壁には、ヤマツ、ジが鮮紅な花を飾つてゐる。我郷地のそれよりは、たしかに濃く鮮かである。

十時三十分、路右の白石郵便局に就いて、此峡谷探勝の記念として、スタンプを請ひ受けた。

近くに高音ダカオトの瀨がある。球磨川三十三瀬中、險難第一といはれてゐる。又鐘乳洞があつて、神瀬カミセの岩戸といつてゐる、堤の岩屋といふ俗稱もある。高八間二尺、幅二十間、奥行四十間、洞中鐘乳石の垂下せる狀、頗る美觀であるとのことだが、船にて對岸に渡らねばならぬ。予は時間に餘裕が無いので、唯川を隔て、入口を一瞥しただけである。鐘乳洞の美觀は、石灰岩が提供する特徴であらねばならぬ。

十時四十分、白石驛に着いた。

球磨川は、桃源的別天地といはれる、五箇庄ゴカシヤウ（五家庄）の奥から發源し、人吉附近から、坂本附近に互つて、急瀬奔湍は、河岸を擁する奇嶂と、水中に突兀起伏する怪石と相俟つて、茲に球磨峡谷の水石美を呈し、征西將軍懷良親王の英魂を弔し、八代海に注ぐのである。人吉から白石まで、七里の間を三時間、八代まで、十六里の間を五時間にて、舟は奔下するので、古來日本三大急流の一として著はれてゐる。橋南谿氏は、其西遊記に、此十六里を僅か二時にて下つたとあるが、これは勿論昔時の「フタトキ」で、今の四時間であるのだ。

大八洲遊記に「時雨至、石皆光膩、爲紫黑色、若能假五丁力、移得一石、直當萬金」とある。この峡谷岩質は、概ね石灰岩であるので、水摩作用を受けては、滑かな河床となり、水上に露はれては、參差起伏の尖頭狀連峯式を呈し、而も石は皆所謂光膩ある淡紫灰色を現じ、之に配する水色は、飽くまでも清澄透碧を極めるので、耶馬溪の頗る清澄ならぬ水と、粗糙な集塊岩とが、陰氣の感じを起さしむるのに對し、此處のは如何にも明麗純潔な快感を與へる。山田空齋肥後陣中の賦に「水色如銀月

色流」といふ一句がある。勿論月夜の景致を詠じたものではあるが、純潔無比の本流でなければ、眞に水色銀の如しといふ譯には行かぬ。この水色美には、耶馬の溪水は、とても比すべくも無い。白銀の如き水色美に加ふるに、紫光色の岩石美、翠綠鮮麗な樹林美を以てする球磨の溪谷は、正に九州の覇者たるを信ずるのである。

五箇庄は、菅家の末裔と、平家の落武者が、世を忍んだ所だと傳へられ、近代までは、世間と全く没交渉であつたが、球磨の清き波に浮んで流された一個の椀が、桃源の夢を載せて、下流の人界に運び傳へたと言はれてゐる。

予は曩に、熊本から霧島山に向ふとき、汽車が八代から坂本にかゝると、兩岸の青巒翠壁に擁された、球磨の水色美は、既に得易からぬ景致であると思つた。遡るに従ひ、愈奇益麗、眸子は實に送迎に追なかつたが、幾度か隧道を潜るので、唯其一斑を窺ふに過ぎなかつた。今親しく歩を此峽谷に運び、川上を見上げては、往にし五家郷祖の佗しさを哀れみ、川下を見送つては、南風遂に競はぬ吉野の雲上を偲び奉り、思はそゝろに史境を辿るのであつた。(大正十五年二月十三日脱稿)

十二ヶ岳と鬼ヶ岳

沼井 鐵太郎

拙稿「御坂山塊」(山岳十八年二號(大正十三年十二月)一七—三八頁)には私の行と大塚氏の行を基にして十二ヶ岳及鬼ヶ岳(西節刀ヶ岳)に就て多少の事を述べたが、其後山嶺道路の竣工により又

交通が便になつた事により手輕に登れる様になつて、私の記述も補正しなければならなくなつた。私自身は其後岩永君或は吉田君と共に大正十四年の春秋二回四日間に渡つて尾根の道や此山塊の踏めてゐない道又は岩壁と窮谷とを探つて歩いた。行は未だ盡せず鑑識未定の所も少なくないが、私自身暫く其山々と遠ざかる様になつたので、不完全ながら茲にまとめて見たいと思ふ。(別稿「御坂山塊に就ての補遺」参照)

山 嶺 道 路

山嶺道路を辿ると北節刀から十分位で中節刀の分岐點に來る。笹を刈つたので頗る歩き易くなつた。中節刀の分岐點は峯の南凡三十米下の所で道しるべがしてある。餘りよい休場ではない。山嶺道路はそれから西節刀(鬼)迄、初めは山腹を巻き、それから尾根上を上つて行く。平均四尺幅の小綺麗な感じのする通りだ。分岐點から西節刀頂上迄上下共十五分乃至二十分ですむだらう。

十二ヶ岳頂上迄は中節刀分岐點から二十五分以内で行かれる。先年藪こぎをやつた時に比べれば凡半減するを得た。此間の道も立派になつたが、キレット丈は修理されてゐない、何時來ても悪い下りで一寸注意を要する。

西節刀(鬼)から根場坂(鍵掛峠)迄私達は秋の夕暮に歩いた。道が出来てみると簡單で三十分ですんだ。然し此れは急行した場合である。根場坂の頂は感じの悪くない所だつた。其處迄道は尾根上を行き、垂直な天狗岩や其他の岩の突起やこぶは横にさけて行つてゐる。之から更に王岳迄の道は晴れた日の旅に相當の味を示して呉れるだらう。但私達は夜道を峠から根場へ一時間近くを費して下りて行つた。根場をうるほしてゐる澤の源はクマアナといつて一つの泉であるさうだ。根場は一晩位泊つてゆつくり山の昔話を聞きたい様な部落であつた。

十二ヶ岳の東尾根道

此れは長濱道ともいふもので、十二ヶ岳登山路の舊道である。長濱西湖間の小さい峠（鳥坂^{トツサカ}）上から尾根を登つて笹ヶ峰（一五〇〇米、五萬分一地形圖の毛無山）に到り鋸齒狀の尾根を上下しつゝ本岳に到るものだ。御坂山塊主脈の山嶺道路開通と同時に道作りをやつたので、今は登降共に容易になつた。私は下つた丈の経験だが其下り（笹ヶ峰迄）に一時間十分を要した。上りとても二時間以内には行かれやう。登山の興味からいへばたしかに西に向つて進むべきものである。なほ長濱から笹ヶ峰に直接登る道があるさうで、この方が馬も登る位で容易だといふ。但大塚氏の聞かれた大原の谷といふ名稱は私等の場合では通じなかつた。

以下少しく私の觀察を述べて見る。十二ヶ岳本岳から少し東して南尾根を行く西湖道（後記）と分れ平に進むと段々に急になつて遂に豪い坂になる。黒木立の中を其小道の周圍は柔かい藓^けがおほひ、其間から澤山のイハカ^ミがつや／＼した龜甲形の葉を出してゐる。感じのいゝ峻坂だ。十分間にして鞍部に着く。此れは全くのキレットで、第二高峰の裾とのあはひ凡三間は左右の澤が薙ぎ落ち、其崩れが合して、近い將來にまだ／＼深くなりさうな氣がする。此上に丸木を組んだ橋が架かつてゐる。山中にある人工物にしては立派なものだ。南方御澤の深い河谷を覗いたが何も分らない。かういふ薄氣味悪い所の附近にコイハザクラがばつちりと咲いてゐたのはいちらしい極みだつた。

第二高峰に登る道は左程急でもない。途中少し南側に外れて岩の頭に出で、御澤奥の深みを眺めたり本岳南東面岩壁の最東端を望んで其裏の荒寥たる様を想像する。第三高峰の頂はぢきに取付けける。それから再び下ると第三高峰との鞍部に着く。先のキレットから凡十分の行程だ。

第三高峰は之からの高さも僅かな尖峰で南面から西面にかけて斷崖となつてゐる。然し道は其の北

を廻り上つて第四の更に小さい尖峰との間に出る。そして此の第四の南面を一寸下つて又登る様に付いてゐる。此等二つの突起は小さいながら岩は岩で屋根通しは一寸厄介であらう。大塚氏が跳び下りたり行きつまつたりして、「西ノ湖で十二ヶ岳の手前に二ツ山の險あり、頭は通れぬ故北を廻れと教へられたのはこれだと合點しました」(山岳十八年二號三十三頁)といつてゐるのは此部分に違ひない。但し私共の見た所では大塚氏の高さの目測は半分位おまけである様に思ふ。兎に角この一組の小さい岩の隆起は、十二ヶ岳東尾根中他に類似したものもないから、誰でも氣のつく所であらう。二ツ山の西峰に背面から登つて崖の頭に立ち、眺めた岳の景色は悪くなかつた。

此れから先は逐次的に語るには及ばない。上下する道は樹林の中を多小趣を異にしながら本岳をしりへに眺める事などあつて、漸く十二ヶ岳らしい性質を失ひ來り、終に一つの小隆起からだら／＼下ると廣い鞍部に出る。それから最後の上りとなつて地上が草生となれば、其先の下りは草尾根が大まかに擴がつて伸びて左手に御坂山塊主脈を眺めながら行ける。大石峠上の裏白縦の木や、其右の低みを越えて現れる釋迦ヶ岳がなつかしまれる。かくて容易に開地の笹ヶ峰三角點に着く。

笹ヶ峰から西湖最寄の峠(鳥坂)迄は三十分で走り下る。初めはデグデグに二百米以上も下りてから平に出で、再び小林の中、草生の地を矢張り電光形に下つて行く。此の尾根は十二ヶ岳御澤奥の峭壁を研究するに許される唯一のものである。然し私は遂にゆつくり其を調べながら登る時を失つてしまつた。

十二ヶ岳をらくに一日で済まそうとするには此尾根から行つて南尾根を下りるが最もよいであらう。或は十二ヶ岳から更に鬼ヶ岳に向ひ根場坂迄行く事も可能である。夜行で東京を立つて吉田迄行くとは今では鐵道馬車が聯絡して河口湖南岸の勝山村迄行く(馬車は大田和迄行つてゐる)。其處から長濱迄はわけはない。途中に段和山登山口がある。長濱から西湖迄は最近新道が出来て文化洞とかいふト

ンネルで越すが、笹ヶ峰へ行くなら斯道を行つてはいけない。長濱の宿屋でゆつくり朝飯を食べても鳥坂へは午前九時頃には着く。山からの歸りもゆつくりしてよい。大田和から出る上吉田行最終の鐵道馬車は勝山に午後十時頃来る。斯様に便利になつた爲私達は山上で日が暮れても悠々として下つて行けるのである。

最後に十二ヶ岳の本岳を中心とした東西の山稜全體について附言する事がある。此山稜は鋸山（西湖での十二ヶ岳の別稱といふ）といふにふさはしい地形を示してゐる。其内目ぼしい急峻な突起は本岳を別として其西では二つ、東では三つばかりある。そして尾根全體の内最も感じのいゝ場所は本岳の東の斜面であり、又最も陰慘なるは本岳と東の第二高峰間にあるキレットである。然し道の悪いのは却つて本岳西のキレットの方である。

又、十二ヶ岳絶頂の様子も多少變つた。前にあつた朽ちた木の祠はなくなり、其後登山者も少ないと見えて辨當の殻など人臭い物が眼についた。

十二ヶ岳の南尾根道

此は御澤及クワルビの谷を分つ十二ヶ岳の南尾根を西湖部落の外れから登つて行く道で、東尾根の道に對し新道と稱するものである。道筋は二萬分一地形圖西湖圖幅でいふと、先づ西ノ湖部落を離れて西方に向ひ次第に登つて、南尾根の三つに分れてゐる最西の（最長の）尾根先端の山腹に達し、二岐する。來た方向に山を廻つて行くものはクワルビに行くもので、之と分れ直角に登り行くのが登山道である。道幅は狭いがよく踏めて間違はない道だ。此道の特徴は西湖方面の下瞰、鬼ヶ岳及クワルビの谷の眺望と共に麓から距離の短かい點にある。其故私達は之を一回も登つた事はない代りに二度とも岳の上で暮れそめてから之を下山路に取つた。下りは本岳頂上から西湖村迄凡一時半で行ける。

此れはもう二十分節約しても苦しくはあるまい。登りは休憩の時間を別にして一時間半から二時間位の所であらう。

頂上から此道を下りるのは一寸氣を付けねばすぐに分る。即ち頂上の祠から東すると直ちに右に入り（簡單な道しるべあり）疎林の間を行くと右手（西側）の針葉樹の間を電光形に下つて、又尾根を行き本岳直南の小岩峰の手前の鞍部に來る。五分間位の時間に過ぎない。岩峰は越えても行かれるが道は其西側を巻いてつけてある。間もなく其小岩峰を過ぎ、一寸した急場を下りたりして又電光形に行く。此邊に來て漸く御澤奥峭壁の一部が望まれる。

やがて萱と細木の生えた平に着く。其處に高さ二尺許りで笏を持つた一基の石像がある。愛宕様ださうだ。なほ下つて緩やかな開けた窪地に行くと二つの柱が門の様に建つてゐる。あたりには松を植林してあるが未だ頗る小さい。振り返ると本岳と小岩峰が重なつて見える。道は之から一層よく踏めてゐる。下の澤には炭焼の跡が見える。之より右に曲り小尾根を越え桑畑となつた澤を過ぎると、細かい笹の間を小道は右山で下りて行く。再び高みに出れば右手に十二ヶ岳西面の崖が物凄く現れてゐる。

四十分ばかりしてから頗る好い見晴らしに出る。鬼からかけて十二ヶ岳を見渡す。二つの岳の間の谷間（クワルビ）は皆奥に行つて急に聳えてゐる。とりわけ十二ヶ岳南尾根の西面にある屏風の岩壁がすさまじい。そして又本岳西面を數段に斷ち切れながら急下するアレトは、木は生えてはゐるが恐ろしく急だ。鬼の中央の崖澤も随分惡場つゞきの様に見える。兎に角此處の眺めは西湖々畔から登つて來た人の眸を吸ひつけるだらう。

それから下りは林の中で山ももう見えない。分れ道から左して西湖部落に行く途中は森林であるが、そのどこかで頭だけの氷雪輝くすばらしい富士を眺めた事があつた。

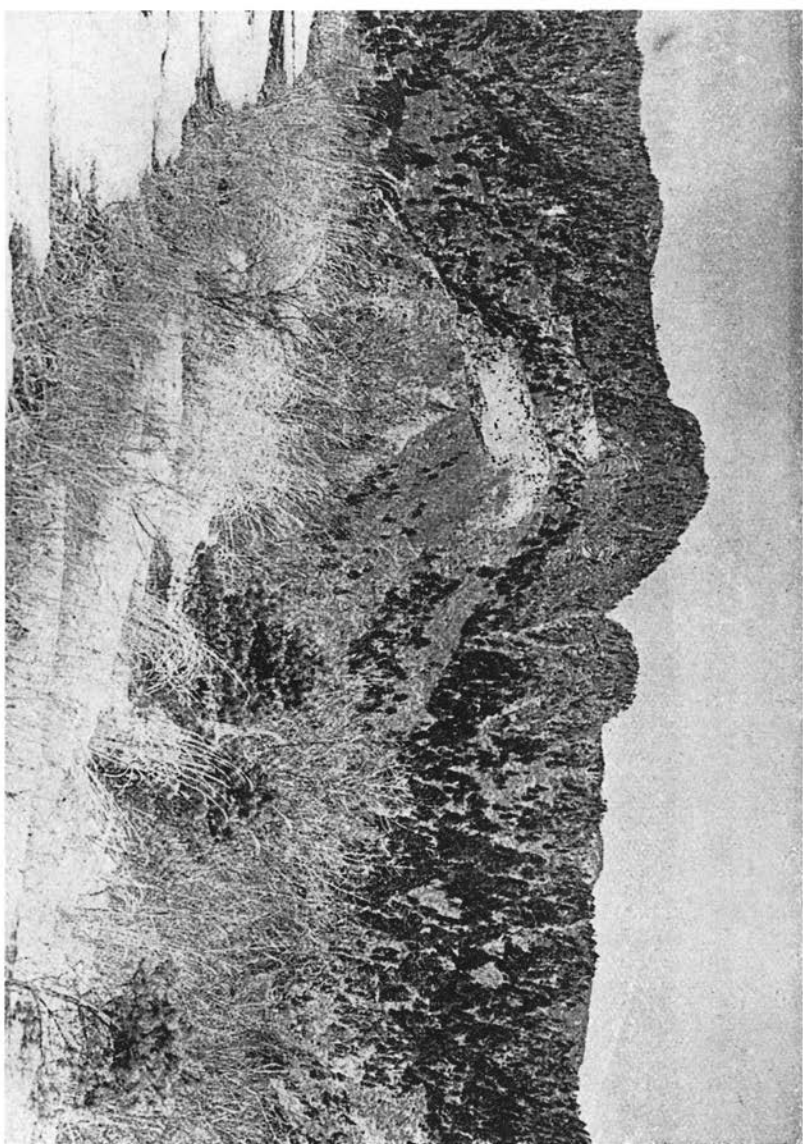
鬼ヶ岳の南尾根

鬼ヶ岳の南尾根よりする登山は道といふ道はなく、特に麓から取り付くには道と切開との聯絡が悪いので困るが、一三三二米峰の北鞍部からは急峻な地形の他は大した煩らひもなく豫想外容易に登れた。道筋はクワルビの入りから一三三二米峰に上つてゐる山道を登り坂路は成るべく右に取つて行つて、道が怪しくなつたらしやにむに萱と雜木の生えた山腹を押し登るのだ。うまく行けば鞍部に出られる筈、然らずとも大した損はない。此鞍部へ根場附近からの澤をのぼりつめても出られる。此澤は源頭まで桑畑になつてゐる故、下山の場合には根場へ出た方が得策であらう。

私達の行は大正十四年春の事で、長濱、西湖、クワルビの入り、南尾根より鬼、北節刀、十二ヶ岳、東尾根、笹ヶ峰、鳥坂、長濱といふ順に進んだ。

クワルビの入りに來ると富士は最早段和山に隠されず昨日より一層白い肌を惜氣もなく現してゐる。濱邊の景もよい。岐れ道はクワルビの奥へ入つて行く。其を二三町して迷はぬ内に左へ涸澤（谷の本流）を越え、作畑に忙しい農夫に教へられて少し北西に向ひ畑の間を行き、松山の尾根に入ると、やがて林の中をチグザグに登つて行く小道に出る。一二間の所を右へ左へ小うるさく曲る事凡三十回、其から上は屈折も大まかになつてゐるが傾斜は相變らず相當急だ。炭焼の跡から二分した道の右を取つて緩やかに登りつゝ、目ざす鞍部近い所から左に折れると其上は枯れた萱が亂れ、次第に怪しくなる。此處では大分休息を重ねた。休む毎に富士や近くの十二ヶ岳方面の山景色に見惚れる。かくして尾根にはクワルビの入りから凡一時間で達した。其處は鞍部から半町ばかり南上であつた。（後の觀察により、鞍部からの澤の間を上つても行かれるだらうと思ふ。）

鞍部から鬼の南尾根は三十度ばかりの傾斜だが切開はよく分る。左手の窪に散亂した岩の露出を眺



影撮氏一成口山

る見々岳ヶ二十に北りよ山和段

め、又青木ヶ原の樹海や遙かに赤石山系の雪嶺を望みながら行くと、ぢきに足は裸かの岩床を踏むやうになる。右手クワルビの方は何處の部分もかくれて見えない。そして私共の行く所は鞍部の南と趣を異にしてヤブらしいものがないのは有難い。十五分もしてから一寸緩やかな休場に出た。其あたりから先より見えた雪の高嶺は更に挺んで、聖や惡澤の大岳の快よさ。其前の山脈なる千挺木、策の諸峰にも雪の條がなすられてゐる。眞上には大岩の立つた岩場が見えてゐる所だ。

此上は岩混りのザレ道を登り、稍右手に搦み左にへつて岩場を越える。然し其の荒れた道も間もなく丈高い針葉樹の五六本生えた恰好な休場となつて、それから上は平凡な太尾根である。之から五分内には黒木のはびこつたるみを登つて鬼最南の峰を何時のまにか過ぎてしまふ。

山の上の樹蔭の藓苔は、羽蒲團の様に柔かく脚をくるんで、えもいれぬ山の精氣がたゞよふ。餘り心地よきまゝ私達は北へ下り氣味の尾根の西側に腰を下ろして、殘しの雪に口を觸れ何語ともなく話し合ふ。山上の切開は由緒ある庭道の如く美しく續く。鬼の三峰はまことに小さい。私達は中ノ峯で休む豫定の所を知らず、北ノ峯の既知の岩の根迄行つてしまつた。

鬼の南尾根はどちらかといへば急な登りだが、藪は殆どなく、中腹にある岩場も登攀するといふ程のものではないので、先づ徒歩を主とする夜行遊山者にも容易な徑路であると言へよう。鞍部から私達は約一時間半かゝつたが實の所休憩が半ばを占めてゐた。そして此登りは山嶺道路では味はれない自然の味はひに富んでゐる。鬼ヶ岳そのものも南東方面からクワルビの平と共に眺めると、何となく親しみを覚えさせる山容で、かの東方又は北東方面から見える多角形の感じとは逆である。

十二ヶ岳兩面の谷 (御澤とクワルビ)

十二ヶ岳の南尾根を境にして東は西湖部落を貫通する御澤、西は鬼ヶ岳との間にクワルビの谷があ

る。極めて短かい小さな谷間であるが、其源は無人にして徒步者の入るを許さぬ峻峭な地形を有してゐる。其處へ私は週末の快い遊びには適當な所と思つて入つて行つた。果せる哉谷の入口又は山上より見る以上に複雑な削磨と裂開を見出し其を分析する愉快さを感じたのであつた。而も人知れず古き行者の跡を踏み行き又は友と一つに新しき窮谷と瘠尾根の登攀線を進み行く時、そはたとへブリトン人の所謂簡單にして眞純なる岩登りならずとも、原始思慕の情と主觀高調のエクスタシーを織り混ぜた收獲を得たのであつた。

御澤は狭く洞穴の如き峽である。其下床には地形圖の指示に反して終始小綺麗な溪水が流れてゐる。谷奥は即ち本岳並に其東尾根の峭壁である。此の峭壁は東から入つて來た旅人が鳥坂上の畑に立つた時始めて強い調子を以て印象を與へる。其處では十二ヶ岳の本岳共に四つの高點が見えるのである。本岳は流石に秀拔で塔の如く、其南東面は右手小尖塔の數箇見える急な岩尾根、左手は稍々緩やかに下りて行く南尾根で前山の木山に續く。其間は幅の廣い切れ氣味の崖である。木々にかくれた部分も實は急峻な崖なので、總じて見るからに登攀の困難否不可能をすら思はしめる。第二高點の峯は稍頂が延びてゐるが、其東面は本岳よりも險惡だ。そして御澤の正統の源は第一（本岳）、第二高點の間を深い洞穴の窮谷となつてゐる事が覗はれる。第三高點はずつと小さく低くなつてゐるが其西側は切り立つてゐる。最後の第四高點はもうさまで顯著な地形を示さない。そして笹ヶ峰から鳥坂に續く尾根の脚と本岳南尾根の裾とが寄り合つた所、深々と緑の濃い（春）御澤の谷が忍んでゐるのである。御澤の谷には可成り奥迄里人の山仕事に行く道がついてゐる。西湖部落の人に聞く迄もない、篋の繩を長く傳つて小道を進むと十分足らずで杉林に來る。少し先に相當大きな不動明王の御堂がある。部落と湖を眺めてすが／＼しい氣持となる。此處で澤が二分し右手は涸澤で笹ヶ峰の南尾根に近づく。私達は堂前から右に渡り本流左岸を徐々に登つて其奥に本岳の頭、第二高點の峻しい南尾根及び

第三第四の峯を望み、ぢきに又杉林の中を行く。之から道は少しく急になつて来る。御澤の溪流は脚下幾何もないが雜木林に閉こもられて餘りよく見えない。芝居の書割にある様な日本式の小岩壁を見る事も多くなつて来る。

斯くて十五分ばかり過ぎると二股に着く。いづれも水が落ちてゐるが、左の澤は奥に高く本岳と第二第三の峰が鋭く寄り合つて凄まじい氣がする。左の澤（本流）の左岸に一寸上り、再び其澤に出てから今度は右岸を行く。春は若木の柳や其他の闊葉樹が淺緑に燃え、其下もとにミヤマエンレイサウやミツバツ、ジがつましく咲いてゐた。炭焼の跡などが見えた。二股から十五分ばかりで又々澤に出る。左岸に渡ると最早人と岳との境が見えて道の作りも稍惡くなつて来る。其れと共にあたりは山脚やまもとがきつく立ち始め、何となく暗い影がおほつて来る。

西湖から一時間餘（休憩共）で又澤の二股に下つた。私達は目指す峭壁の南に出過ぎるを懸念して、之からなるべく右へ右へと取つて行く事にする。事實もう此邊は谷の方向が餘程東西に近づきつある。終に右澤に可成り高い瀧がかゝつてゐる二股の所で道の行手は消えてしまふ。御澤奥の峭壁に近づく爲にはこの瀧の上を更に多く進まねばならない。然し其は徒歩の範圍外となつてゐる。そして又私は其水脈と地形を説明すべく餘りに經驗の少ない事を白狀しなければならぬ。

クワルビの谷は御澤とは餘程趣を異にしてゐる。徒歩者は其口元（クワルビの入り）に於て大河の磧の如く擴がつた所が山脚に狹められると次第に急さを増し針葉樹が黒く危峰圍繞せる獨自の景を見出すであらう。山上より其峯々の眺めはすでに記した所であるが、其内この谷を鳥瞰的に最も快く眺め得るのは中節刀十二ヶ岳間の岩の突起からである事を附言する。谷の奥左右かけてその地形を明かに眺め得る事が御澤と異なつた特色である。又山體の割れ方が御澤は頗る皮肉なるに反し此はある規矩を以て整列されてゐる。即ち十二ヶ岳鬼ヶ岳の夫々西東の面には略々平行した直截的の崖尾根と崖

澤が數多く配置されてゐるのである。そして谷の急になる中心の所に表岩オモテイハと稱する斷崖を認める。この形勝何となく誘はれて入つて行きたい氣が私に起つた。

このクワルビの祕境は未だ探るべく調査すべき所が多いが、兎に角私等の僅かの實地踏査と所謂土民測量の結果より大體の地理を記して置かう。

クワルビとはこの谷一圓を云ふもので別にクワルビ澤とはいはない、只口元をクワルビの入里、奥をクワルビの大入と區別してゐる丈である。クワルビの大入りに行くに西湖より十二ヶ岳登山道（新道）を行つて山を廻り適宜の所から下りてもよい。其の廻り道から鬼ヶ岳十二ヶ岳が面白く眺められる。入りから入つて行くと表岩附近迄は道が踏めてゐる。其れ迄岐路もあるが判斷に苦しむ事はない。澤の水は其邊になつて清い響を傳へる（下方は全く潛流だ）。表岩迄行かない内によい泊場がある。一度月光を浴びて天幕生活をと願ふたが遂に果さなかつた。

西湖村の渡邊文藏ぶんざうといふ老翁によるとクワルビの十二ヶ岳方面の澤には南からクマアナ澤、ウマバ、サ、ツバノダン、オモテイハノ澤などの名稱がある。クマアナ澤は明かに二萬分一地形圖で崖の大きく長く標示された澤であつて、其上方にはワシノス岩といふ岩があるさうである。ウマバ、サ、ツバノダンとは判然しないが、前者は元焚木を伐つた所といひ、後者は其上方に二本の黒い立岩があるといふ。この上方がアカザレのある所のウツリ（澤）で一番險阻な所である。オモテイハノ澤は表岩の右（東）にあるもので、即ち行者還りの入りである。昔ある行者がこの表岩の東の澤を上つて十二ヶ岳へ行をしに行つたが岩壁で登れずに歸つた、其れ故行者還りの岩といふさうだ。明治時代金掘りが出た。此は勿論小規模に行はれたもので現今其道跡は不明だが、今でも小屋の廢物は残つてゐるといふ。拙稿「御坂山塊」の記文中「尙西の湖と根場との間から緩傾斜地の間丈潛流をなしてゐる澤に付

いて登る道がある。此は十二ヶ岳山腹の鑛山の廢坑に行くものださうであるが、それから岩登りをしつゝ達する事が出来るであらう（山岳十八年二號三三頁）とあるはクワルビの谷、表岩迄の道及今述べた金掘りの道跡を言ふものである。但し直接十二ヶ岳を目指さないで道跡のみを行くものならば岩登りの用意はなくとも済むであらう。

次にクワルビの鬼ヶ岳方面の澤や岩の名には下記の如きものがある。タチイハ、此は表岩の左腹上手にある一の尖岩で道からそれと指す事が出来る。このタチイハの西にある澤の左岸の長い岩壁はナガイハと稱し、又タチイハの尾根に續くものはアラトノナガイハと稱し、其上手にはなほナカナガイハ及びオキノナガイハの岩壁がある。オキは奥の義である。澤はナガイハ澤といふのだけを聞いた。そしてこの共に長い岩壁を備へた小澤が一つになるとナガイハノオホカハラといふ名稱を持つ。

以上クワルビの細部に渡つての地名及位置は再調査によつて確めるべきものである事を注意していただくたい。因に鬼方面の諸々のナガイハの澤は獵師などが雪降つて出る鹿、猪、熊、モ、ンガ等を捕へる爲に歩く事もあるが、十二ヶ岳方面の崖尾根崖澤、特に本岳直下のものへは足を踏み入れないさうだ。兎に角このクワルビの谷は愛すべき我が湖水地方の山々の内で登攀に關し最も特色ある境地なのである。

附言、十二ヶ岳の北面大淵谷よりの登攀も考へ得るが、不幸にして私は其材料を提供する事が出来ない。

御澤奥より十二ヶ岳への登攀

此登攀の動機は大正九年鳥坂よりの仰望に印象を刻まれ、其後大塚氏の話によつて促進されたものと言つてよい。大正十四年五月十日、岩永君と私は御澤を深く進んで瀧場で道は終り、それから右澤

の右岸に付きながら中央の尾根に稍々登攀らしいものを始めて行つた。此間暫く本澤は小規模な釜とタルの連続であつて、中には二條に分れて岩壁を躍り下る瀧などが見えた。私達の立場も相當急で苔むした樹陰を枝から枝へと手繰り登るのであつた。

物の十分ばかりして下りた所はタルの上で、少し先の左手には低いチムニー狀の岩塊から下に岩屑が流れ落ちてゐる。谷の源に向つてがら石を踏んで行くと、十二ヶ岳最高峰の右肩の岩尾根が見えたが未ださうも近くはない。谷は一寸の間潛流となり、其先狭い階段の如き惡場の下で再び水が現れる。此れ迄道の最後から四十分かゝつた。

惡場の中段迄は先づ無難に登れるが、其先上段との境は又一つの瀧(高さ二間半位)になつてゐる。右寄りに行つて登れない事も無さうだつたが、こんな所で時間を潰すのは本意ないので、右岸の壁のひだを傳つて斜左に登る。此時私達はロープで結び合つてゐた。そして壁の上から右岸の小やぶの生えた急壁を横に登つて行つた。

かうして三十分ばかり進んで行くと澤は又二股になる。右方は十二ヶ岳本峯と第二高點とを劃する大きな崖澤で、最早其底のみを傳つて登つて行く事は出来ない惡場の連続らしい。近く、細い瀧が可成りの高さを藁地に下りてゐる。私達は左の澤の落合から數間上に出たのであつたが、此澤の方は幾らかなるくなつてゐる。其左岸高くに最高峰が見えたので、見當を付けて左の澤を少しく上り左岸にある斜かひの小廣い棚に取りかゝらうとしたが駄目だつたので、なほも澤通り行く。この邊は惡場ではないが、うつかり滑る事は出来ない。少し上つて脆い青味を帯びた平剝げの岩屑の床から水は全然なくなり、私達は其上を右に入つて行く。疎林の山腹に取付いてから尾根らしくなつた所を進むと、前面は又急になつて左端に狭いチムニーを置いた岩の露出が見える。岩の下は不安な地盤だつたが外に行く道もないので右に漸くへつり、尾根に取付く。立つて見ると窪みを一つ隔てゝ其處に十二ヶ岳

南東面をかざる岩尾根が屏風立に塞がつてゐる。此れ迄階段の谷の惡場から一時間半かゝつた。

其時私達は地點を確認すべき目標を得なかつたので、窪み（澤の源頭）を上へ（西方へ）押し登つて肩の様になつた開地まで行つた。そして西面に一つの澤を隔て、十二ヶ岳の南尾根——其處には最早岩壁は見られず草木青々とした——を望み、私達が目的とする峭壁は北面屏風立の岩尾根の背後なる事を知つた。澤が悪いので知らず、私達は南へへと追ひやられて來たのだ。但此日は既に時刻遅く澤迄下りて奥の峭壁に下から近づく事は覺束なかつた。空身になつて少し下り觀察するに開地の眞上から樹林に圍まれた岩壁が御澤の縁迄峻しく立列んで下つてゐる。見透しは定かではないが其中段の邊が興味もあり又取付く可能性もあるらしく、下段は直立の裸岩で見込はない。中段の岩壁の下に立つて見たが、此壁は幾重にも縦に割れを見せ、木も生えてゐて確保に便利でありさうだが、へつりの安全な棚は見當らない。岩壁の傾斜は總じて七十度前後で、一見簡單に行かない事が分る。

かうして色々調べてゐる内に一時間ばかり立つてしまつた。荷を取りに歸つてから先づ中段の峭壁に取りかゝる。初めは稍廣い草生の棚をかゞみながらへつて北に廻る角に立つ。それから壁は急に直立近くなり始める。二三間へつるともう足場は頗る不安になり、手懸りは乏しくなつてどうする事も出来ない。止むなく引返したが此先のへつりは何となくやつて見たい場所であつた。其の鋭いアレトに攀ちて目的の崖を覗き込みたかつた。私達はこりずまに西隣の急斜した草生の棚を腹這つて攀ち、安定な細木を頼りに登る。其上は割に裸かな岩稜で私達は其間の窪を行くつもりであつたが、傾斜は八十度に及び手懸り足場は缺乏して下の者が肩を借す事も危い。故に此の道程も失敗とあつて私達はもう中腹からアレトに取付いて目的地に行く事はあきらめる。午後三時も過ぎた。止むなく元のらくな尾根をからんで登り、開地の上からは成るべく岩について本尾根（南尾根）に行かうとさめる。

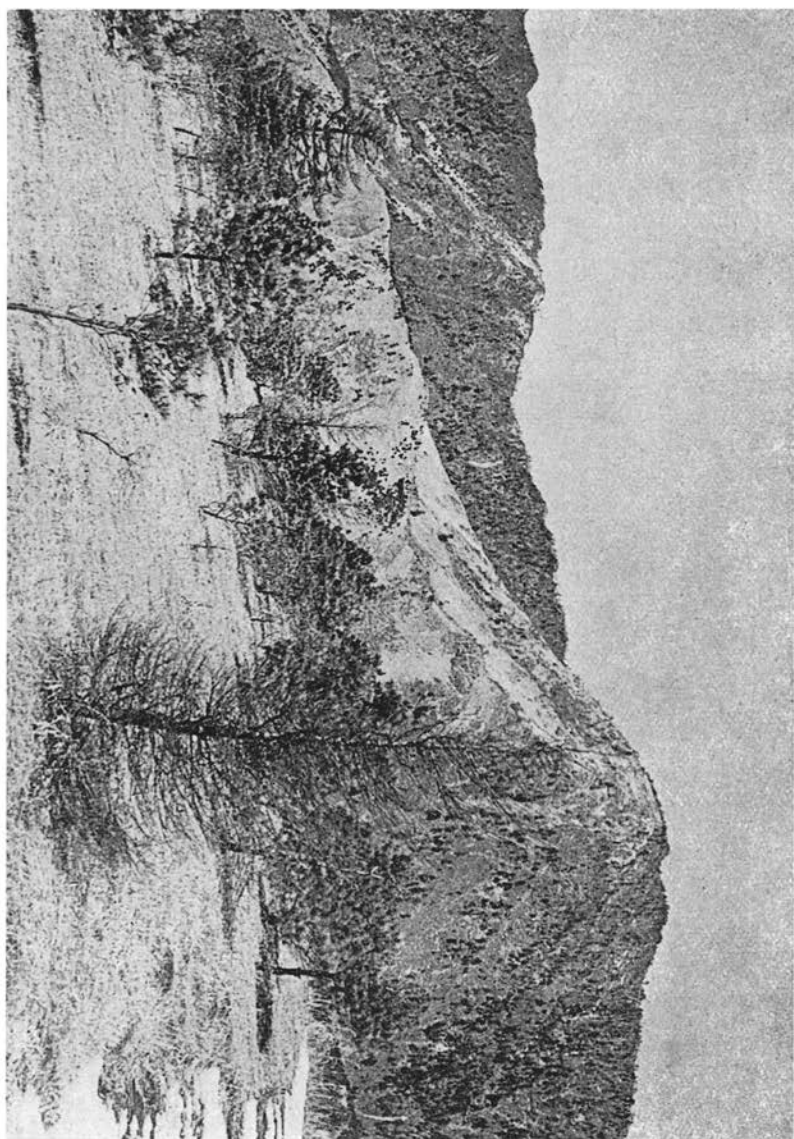
開地の近くから再び登攀が始まる。ヤブ山の岩登りでは皆目先の様子が分らないが、行くに従つて

此の進路も決して安心出来ない事が分つた。地盤が脆いので木は一々ためして見なければつかめない。岩はともすれば崩れる。傾斜は七十度を越してゐる。一番急な所に一つの浅い洞穴があつた。獸の様に其中に跼うづくまつて休んだりした。其上は頗る不安な登りが續いたが、凡四十尺上に休むにいい棚があつて、それから傾斜も減じ安心して攀つかむ事が出来た。棚の上からは河口湖、西湖を見下ろし、笹ヶ峰以西の峰々から遠くは黒岳、三峠山、御座入山（道志山塊）がなつかしく見える。此生々した眺めの感じはたしかに歩行登山者には理解出来ない。私達は其内に普通のヤブ斜面に分け入り其を抜けると一塊の露岩の突起に出て、登攀は一段落を告げた。正に四時二十分であつた。此の突起は十二ヶ岳南尾根にある一突起で、本峰とは一鞍部を隔てゝむき出しになつた所である。

クワルビの大入より十二ヶ岳への登攀

クワルビから見上ぐれば鋭いアレトになつて落ちてゐる十二ヶ岳の西面を、私達（吉田、岩永兩君及私）は鬼ヶ岳の東山腹から望んだ。其處には平行した三條の崖澤と細尾根が氣持よく突き立つてゐる。私達は正十四年十一月二十三日に其中央の澤に入り、頂上直下の尾根を登つて面白い處だと思つた。御澤よりの登攀が底暗き迷宮の壁を傳ひ登るが如き感ありとすれば、此登攀は餘程晴々しい一筋のものであつた。或部分などは正に「地と空の境」に浮ぶが如き感を抱かせられたのであつた。

其日私達はゆつくり長濱の宿を出て、西湖村の藥師堂の古代丸木船を見物したり、クワルビの入りで土民測量をやつたりしてゐたので表岩下の野陣場に來たのは十二時近くであつた。澤の流で中食を使つてからウマバ道を行つてオモテイハの澤に入つた。此澤は涸澤で岩塊荒々しく壘積してゐて可成り面白味があるが、伐木も多く存在してゐるので清新の感は起らない。二十分ばかり上つて行くと二股になり、其間の尾根には岩が現れる。表岩の尾根はすぐ左方だ。二十分ばかり吉田君に偵察しても



影披氏一成口山

(時掛鍵は部鞍の央中方左)る見を岳ヶ鬼に西北りよ山和段

らつてから右股(矢張潤澤)に入る。此は落口はすぐ一寸した崖になつて、其側のヤブをからめば行けさうだが、練習の爲に綱を取り出し結び合つて私から攀ぢ始める。下半は譯はないが上半はスラップになつた岩面の切れ目を行く他はない。傾斜は大した事もないが手懸りは殆どないので専ら服の摩擦を利用する。最後の悪場は切れ目を離れ只一本の細い灌木を手懸りにして辛うじて丸い額に出て、左上の澤中に生えた大木迄行つて始めて第二の人を確保出来るに至つた。そして第二第三の人は最後の所は上からの綱につかまりて登つた。總計百尺に足りない登攀だが面倒だつたので三十五分も費した。此上は容易であつて五分後に又二股の廣場に出る。西湖が望まれる。左が本筋らしいが其間の岩尾根に手早く達せんが爲に、右股の崩壊し勝ちな石の斜面を登つて急壁の行きつまりは左に攀ぢて廻り左行して三十分後には一寸立派な、面に角の多い岩壁の下に出た。此岩場は人を誘惑する様な晴々した所だが、慎重に考察しなければ一寸取りつき難い様に思はれる。高さは百五十尺位。私達は其脚の窪を右手に高く登り、挾石の下で一休みした。

再び登攀にかゝつたのが三時二十五分、岩壁を精細に檢する餘裕はないので、すぐ様挾石の挾まつた岩溝を登る。挾石は一つ上にもある。然しヤブがあるので至純の感は殺がれる。此上に至つて又左にセンチシヨナルな登攀を取る。そして下の岩壁の頭つゞき、屏風の縁を裏に出て少し宛隔時登攀を繰り返し、漸くに轉石し易い足場から離れる事が出来た。なほ上ると先の溝の頭で左目に擴がり、すがすがしい黒木の太木の生えた休場に來た。四時頃。少時休憩後左へ又側澤の溝をたやすく登つて行けば、十五分足らずで一つの尾根の鞍部に出た。眼下には大きな澤(上りかけた澤と平行のもの)がある。上には十二ヶ岳本岳真下の元の岩尾根(山嶺道路から注意さるゝもの)が見える。そして今立つ尾根は森林適宜に茂つて下草は少なく、狭く急ではあるが先づ安全な通り尾根である。

此れから先は吉田君を先にして尾根を登つて行つた。綱が不用な位のらかな尾根であつたが、しば

らくすると木は失せて岩兀の急場となつた。此處は一寸只では行かない。體の小さい吉田君が右に左にするくくと岩の鼻を抜けて攀ぢた後を、岩永君と私は一寸苦心して登つた。岩兀の上に行けば苔がやはらかな通りとなる。其處でもそしてとりわけ兀場の登りでは「地と空の境」を沁々と感じ、淡い月と共に鬼ヶ岳や富士の夕映えを見る事が非常にうれしかった。右手（南）の尾根に垂直の絶壁があつた。

其れから最高の岩壁近く迄は一つの高みがあつた。然し最早我々は岩人としてではなく、森の人峯づたひの人としての歩みを續けて行く。十二ヶ岳本岳直下の最高の岩壁は美しい。その對の尾根の鞍部に來た時は五時過でもう日が暮れかけてゐた。切跡が見えるし本尾根迄もわけはないので綱を解き、つくくくと今日登つた尾根の眺めよろしさを語り合ひ乍ら林檎を食べた。そしてうすくらがりの中を切跡を拾ひく登つて、それから七分後には頂上と目鼻の間であるすぐ南の地點に出る事が出來た。此登攀はクワルビからオモテイハの澤に入る所から五時間近くかゝつた事になるが、此方面の地勢を一度でも知つた上、綱の處理をうまくすれば三時間に短縮出来る事と思ふ。

クワルビの大入りより鬼ヶ岳への登攀

此の道程は獵師なども入る事故、登攀と強ひてむづかしく言はなくてもいいかも知れぬ。實際私達は豫期はしながらもずつと澤づたひをしたのでは遂に綱を本統に使ふ所はなかつた。私達の登つたのはナカナガイハのある澤であると思ふ。

私達三人がクワルビの大入りなるオモテ岩の下に來たのは十二ヶ岳へ登攀した前日の十二時五分前であつた。此處で中食をすまして午後一時近く出發、十分ばかり道を行き澤を渡つてから、タテ岩の左澤を進路に取る。其處に二間餘りの空瀧があつたが、ヤブは御免と物珍らしさに流水を立てかけて

岩永君が先に登り綱を垂らして後の二人を引き上げた。其上約半町ばかり積を進むと垂直に近い高さ約三間の空瀧となる。此は一寸登れないので幸ひ此處で二股になつたその左を取つて行く。河底の石は皆角張つて兩岸の崖もよし、荒涼たる道を好く人には持つて來いの所だ、そしてもう此邊になると本統に深山の空谷といふ氣がするのがいゝ。又すぐに右から澤が入つたが、見ると其先は岩角の立つた面白い岩溝で、一つの岩隙と挾石さへ見える。奥には屏風をなした岩壁がはだかつてゐる。私達は右股に入り、挾石の所は背と膝を使つて攀ぢ登り頗る愉快だ。奥の間の屏風の前から澤は右に曲り其背後にかくれて行く。此處には少しばかり水が滴つてゐる。裏に廻つてしまふと大分容易な澤になつてしまふ。前の二股でも見えた十二ヶ岳がはつきりと見えて来る。この澤筋は最早まつすぐに鬼ヶ岳に向ふものである。其内に一寸した岩壁に來る。避けて登れる事はたしかだが今迄豫期以上に簡單だつたのでわざ／＼惡場をえらんで登つた。然し其處は本統に惡場で先登の吉田君は大分不安を感じた。後の者も綱で結び合つた有りがたみを本統に知つた。

其れから上の澤は平凡になつて行く。傾斜は相當急だが、岩は段々に少なくなる。かくて鬼ヶ岳の北から數へて第二と第三の峯の間の鞍部に出たのは午後四時半近くであつた。

此の登り丈で推すのは早計ではあるが、恐らく鬼ヶ岳の東面の登りは澤も尾根も十二ヶ岳の西側に比べると困難の度は少ないであらう。私はこの登りは十二ヶ岳西面の觀察及その足馴らしに試みたのであつた。但鬼の岩壁は尾根の側壁に長く續いたものであつて、其爲澤内は十二ヶ岳方面に見られぬ面白い箱狀谷をなしてゐる。二つの澤の落合ふ處が直角をなしてゐるも面白かつた。

附 記

○鬼ヶ岳は三境といふのが普通で、即ち中芦川、營宿、西湖三村の三境の謂である。そしてこの三境の間の窪（位置不明）の池に雨水が溜れば之をアヲナギの池といふのださうだ。私は天氣の好い時この池を探して無駄骨を折つたが、譯を聞けば道理こそと思つ

た。

○クワルビの入りの左手、鬼ヶ岳の尾根續きて標高一三三二米の松を植えた山は今、セツトウケ岳といふ。此はセツトウ（即ちホ、ジロ）が遊んでゐるから名付けられたといふ。

○王岳の尾釣が根場に廻る所にはチヨッキといふ腕を立てた様な岩峯があるといふ。

以上は西湖村の一人老の話による。私達は此外今述べたセツトウケ岳の古名や之に因んだ弘法大師と鐘鬼大明神の話などを聞いたが、其等は聞き取りが充分でなかつたので此處には遠慮して置く。（大正十五年九月脱稿）

溫泉嶽

大平 晨

一、溫泉嶽へ

三角の風光、島原松島、牛の狂奔。

二、溫泉嶽頂上

天外の一小世界、複式火山、彌陀ヶ原、普賢岳頂の展望、鳩穴、野岳の美觀、小地獄、霧氷。

三、溫泉嶽下り

小濱溫泉、千々石灣。

參照地圖

陸測廿萬一。熊本、八代。
同 五萬一。島原、小濱。

一 溫泉嶽へ

五月二十九日 (大正十三年)

快晴

溫度

朝人吉五八

夕溫泉新湯六四

球磨峽を探つた予は、午前十一時二十八分白石驛發の汽車に搭じ、十二時五十分宇土驛にて、三角線に乗換へ、午後二時十五分三角驛に到着、さきに一勝地驛でチッキに付した手荷物を受取つた。三角驛より一驛手前が赤瀬驛である。水碧明媚の地、赤瀬溫泉がある。夏季には海水浴場として賑はふさうだ。霧島火山帶上に於ける一現象として頷かれる。

三角は人口約四千許の小都會ではあるが、有明海と八代海(不知火海)との連絡點を占め、開港場として發展した。此地は宇土半島の尖端に當り、三角山の奇嶂を負ひ、前面大矢野島に對し、北は溫泉岳を望み、南不知火海の彼方には、天草群島の翠色を指點し、風光美は九州第一の稱がある。又近時海水浴場として、唐津と並稱される様になつた。

予が乗つた、肥後汽船會社の琴平丸(七十噸)といふ小蒸氣船が、三角港を離れたのは、午後二時三十分である。

島々は概ね岸壁高く峙ち、翠松美しく翳して、得易からぬ景致を展開する。山陽賴氏が「雲耶山耶吳耶越、水天髣髴青一髮」と吟じた、天草島を左に眺め、船は島原海灣に入り、四時島原の湊町に着いた。三角から約十二哩である。

港前に散點する數十の島嶼は、寛政四年に噴出された熔岩塊だといはれるが、今は松樹之を飾つて、島原松島の稱がある。

島原は、島原半島の東岸に偏在するが、古來半島の首都を占め、人口一萬餘、有馬氏の城址は、町の北に在る。昔は天主教匪の亂を以て、今は天草島と共に賣春娘子軍の遠征を以て、芳しからぬ名聲を天下に博してゐる。教匪の立籠つた原城は、南方口ノ津との間の海岸にある。

島原の地、後には近く溫泉岳の一峰前岳(又眉山、八一九米)を屏風の如く負ひ、前には海岸に突

起した權現山公園がある。

我等が乗つた船は、島原線島原湊驛の近くに着いたので、早速驛長に就いて溫泉公園^{ウシゼン}の經路を質問した。驛長は種々附近の情況を語り、且つ親切にも電話で、自動車の發着所に照會して呉れた。自動車は一人客でも發するとのことである。琴平丸の二等船室には、予の外に、五十歳許りの男と、少女を連れた四十許りの婦人だけであつた。婦人は紋付の縮緬羽織を着けて居り、言語舉動身分ある人の様に見えたが、丁寧に別れを告げて町の方に行つた。男の人は、門司の商人だと言つたが、其風姿から察するに、所謂紳商らしく、別府には始終湯治に行つたのだが、此節は方面を換へて、溫泉公園に遊んで見たいといふので、予と同行した。

餘り清潔でもない、旅館兼茶屋の自動車發着所に待つこと暫時。四時三十分自動車は出發した。高低ある、屈曲ある、狭い町の中を通過する自動車は、往々軒端の看板や柱に衝き當りはせぬかと、氣遣はれる程であつた。やがて町の南に出ると、右には眉山を仰ぎ、左には島原海を眺め、緩傾斜の原道を進み登るので、安心も出來、氣持も好い。中木場^{ナカキバ}を過ぎ、池平^{イケヘイ}にかゝつた時、自動車に少々故障を生じたが、幸二十分許りで手當がすんだ。三百米突許り登ると、右に岩床山^{イハトコヤマ}の岩嶂を望み、徑は漸次急勾配となり、山側を繞るあたり、ツ、ジ、タニウツギ、ノイバラ、アザミなどの花が目に入つた。此邊のツ、ジは、純紅色のヤマツ、ジが多く、アケボノツ、ジの紅紫色も見えたが、兩者とも濃淡種々交つてゐた。樹林には、闊葉樹に伍して赤松が多い。上るに従ひ、鬱蒼たる老松打續ける林間を貫くは、山色氣分を益濃厚にした。

此車道は、三間幅の立派な道で、昨年の縣營開鑿にかゝるのださうだ。松林に差しかゝつた時、數町の先きに歩いてゐた一頭の牛が、我等が自動車の慕進に驚いて奔り出し、牽手の男は、牛に引つ張られ引き摺られながらも、數十間は手綱を握つてゐたが、遂には其速力に堪へ兼ね、前方に打倒れて

手綱を放つた。放たれた牛は、益狂奔して忽ち姿を消した。取り残された男は、恨めしさうに、自動車をお睨んで目送してゐたのも、氣の毒に堪へなかつた。予は運轉手に、進行を緩めるか、若くば一時中止して、牛方の處置に餘裕を與へてはと、注意もしたのだが、騎虎の勢ならぬ、狂ひ出した牛には其效無かつたことを遺憾とし、深く牛方に同情を表してやつた。

樹林茂つた矢岳⁺を左に、緩斜の窪地に瀦水を有する池^イノ原^ンを隔て、裾野より山側一面に亘り、今やツ、ジ満開の野岳を右に見遣り、豁然たる小平地に出る。こゝが山岳温泉郷として、霧島温泉と共に、九州の雙璧と謳はれる雲仙温泉である。

我等が自動車は新湯に入り、有明ホテルの門前に着いた。時に五時四十分、島原より五里強、自動車賃金は二圓五十錢である。

此日予は、球磨峽谷の探勝が、豫定時間を超過し、白石驛にて乗車するのが、一列車後れたならば、三角港に宿泊し、翌朝島原に渡航すべく、若し幸に此日の内に島原までの渡航が出来ても、島原に宿泊し、翌朝を以て温泉岳に登るべく考へてゐた。それは三角港からの汽船運航時刻が不明なものと、島原から温泉公園^{ウセン}まで、自動車が運轉することを知らなかつたからである。然るに三角からの船出、及び島原からの自動車に意外の好運を得たので、平地ならぬ、山から山への旅行日程としては、珍らしき進行を贏ち得たのであつた。

二 温泉岳の頂上

五月三十日 快晴

朝温泉新湯四七 晝同七〇 夕諫早七〇

雲仙又温泉の文字を用ひて「ウンセン」と讀み、古湯^{フルユ}、新湯^{シンユ}、小地獄^{コヂゴ}の三區の温泉場に分れてゐ

る。古湯は湯里^{ユサト}、又北溫泉と稱し、延暦時代から著れてゐるので、延暦の湯、又元湯とも云ひ來つた最も古い湯である。新湯は其南東四町許りに隣接し、明治の湯又中溫泉^{ウチノセン}の稱もあるが、今は専ら新湯と呼び、現今最も發展振りを示し、古湯の日本式旅館なるに反し、此處のは白色綠色赤色などのペンキを塗つた堂々たる西洋式構造の旅館が多く、ローマ字蟹行式看板を掲げあるのは、西洋人を多く相手とする表徴として直感される。予が宿つた有明ホテルの外、九州ホテル、新湯ホテル、溫泉ホテル、富貴屋ホテル、大正ホテルなどがある。長崎縣溫泉公園事務所、巡查駐在所、郵便局もある。湯の花や、名物溫泉煎餅を始め、菓子店、雜貨店もある。縣營の娛樂場には、玉突臺、ピアノ、其他の樂器を備へ、讀書室、カード室もある。溫泉公園は、新湯を中心とし、十六萬餘坪の地域に互り、ゴルフリンクスは、公園の東方約十二町池^{イケ}ノ原の景勝平野面積五萬一千餘坪を占め、縣は此等の發展改善に向つて、着々歩を進めつゝある。

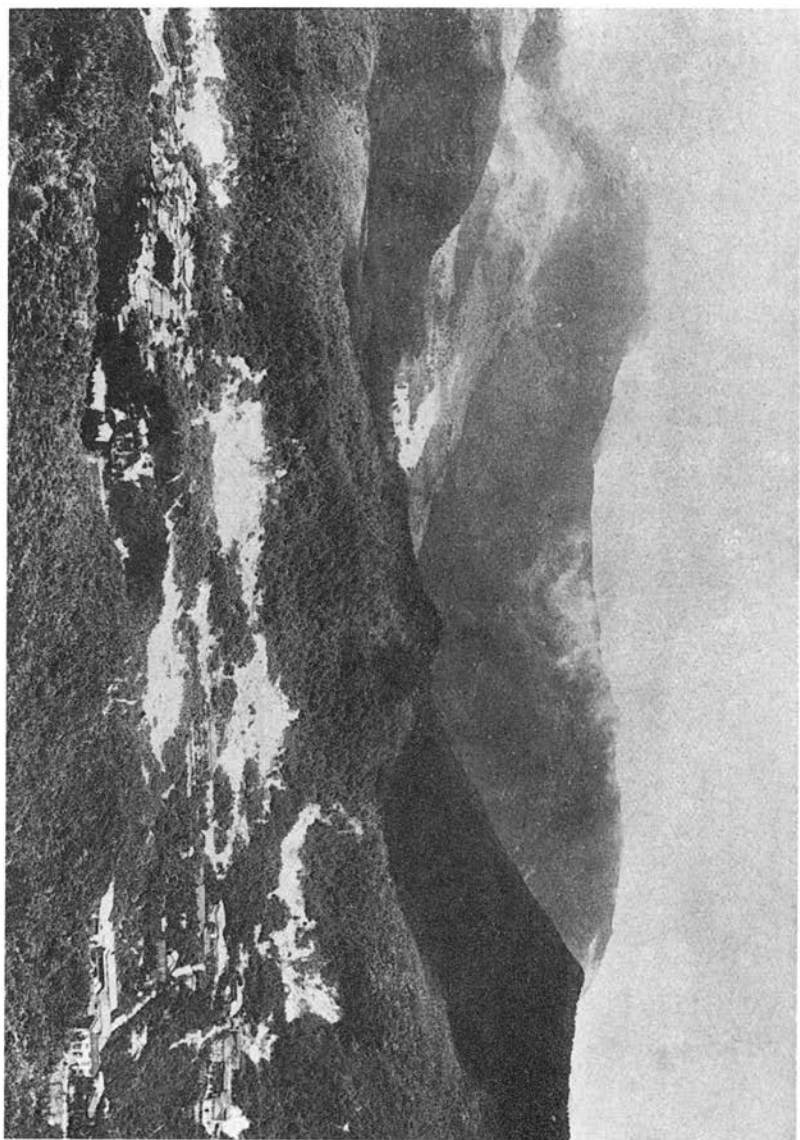
小地獄溫泉は、新湯の南約十町にある。又南溫泉^{ウチノセン}と稱せられ、和洋式旅館がある。

以上溫泉は、何れも明礬性硫黃泉に屬し、溫度は、古湯最も低く、小地獄が最も高い。皮膚病、金創、梅毒、リニーマチス、腺病などに有効だといはれてゐる。

内湯の設備は、ホテル以外には無いので、別に共同浴場がある。

溫泉地域は、矢岳^{キヌダケ}と絹笠山との間の爆裂火口に屬し、長徑約七町を有する窪地を呈し、海拔約二千四百尺、四周の山容秀麗、樹林蓊鬱、夏時は大氣特に清爽、蚊虻の害もなく、眞に人寰を超脱した好避暑地として、其名夙に歐米人間に著はれ、上海、香港等から來遊するものが甚だ多い。百數十年前に於ける著名の旅行家橘南谿氏が「天外の一小世界にして、實に地上の仙境ともいふべし」と禮讃したのは、至言と謂はねばならぬ。

有明ホテルは、有明海^{アリアカシ}の名を取つたのだとは、誰しも頷くことだが、殊更に音讀して「イウメイ



東京日日新聞附計藏

溫泉泉吊

ホテル」といつてゐるのは、通音の有名に擬したのであらう。

玄關から入ると、突き當りに卓を圍んだ椅子へと招待し、客の好みに應じて、和洋何れかの室及び料理を提供することゝなつてゐる。和式は一日四圓以上。洋式は一日室料參圓以上、三食料二圓五十錢以上となつてゐる。門司の商人といつた人は、別に日本室を選んだ。

予は温泉岳頂上展望の美観は、種々の記事で承知して居り、且つ高頭仁兵衛氏から、其曾遊の讚美的談話も聽いては居た。唯この温泉場が、年浴客數萬を算し、殊に西洋人の客が多いので、旅館が非常に拜金宗的惡感を與へるであらうと、所謂喰はず嫌ひの考を持つてあつたが、高頭氏からは、旅館の設備は甚だ優良であり、且つ客の取扱も決して厭味など感ぜぬことを、特に附加されたのであつた。成る程温泉場の設備としては、本邦の第一流を占むべく料理に於ては、本邦無比の稱ある長崎に範を取ることゝて申分なく、茶菓子には、長崎製のカステーラを供するなど、予が宿料の四圓といふに對しては、諸般の取扱鄭重を極め、勿體ない様な感じがした。山行の折詰辨當料は六十錢である。此地の繁昌は、無論避暑としての夏期である。予が登遊は、時偶本山の名物ツ、ジの満開に際してあつたにも拘らず、雑沓の憂が無かつたのは、意外の幸であつた。

「天下の美觀、温泉公園つゝ、じ満開」といふ宣傳ビラは、九州は勿論、其他地方有名な各驛では視たのである。又カステーラについて、一寸思ひ出したのは、九州地方鐵道沿線到處「長崎文明堂カステーラ」と「天本六神丸」といふ大々的廣告標が、目に着くのであつた。

此日は幸非常な快晴であるので、早起郊外の散歩を試み、温泉岳頂上の探勝準備に取りかゝつた。

大日本地誌によれば、温泉岳は複式火山である。最初は九千部山（又クセンボヤマ、一〇六二米突）を中央火口丘とし、北西に烏甲山（トリカブト、八二二）、吾妻山（アヅマキ、八六九）、鉢巻山（ハチマキ、南に絹笠山（八六〇）、矢岳（九四〇）、東に普賢岳（フゲン）を外輪山とする一個の二重式火山を形成したが、其後外輪東壁である普賢岳

を中央火口丘とし、西南に國見岳、妙見岳、野岳、東に眉山を外輪山とする更に一個の二重式火山を作つた。前者を西溫泉火山とし、其火口瀨は千々石川、後者を東溫泉火山とし、其火口瀨は有家川である。現在諸峰の最高點普賢岳が帝座を占め、標高一千三百五十九・七米突と註さる。

外輪山の内壁は、急峻であるが、外側が緩かな傾斜線を引いて、火山一般的の裾野を作り、島原半島全部が、溫泉岳の噴起によつて出来てゐるので、對岸肥後方面から望むと、丁度蝦夷富士の尊號を有する眞狩岳の山容を、火山灣頭から仰ぐのと甚だ相似てゐる。田山花袋氏が、この山容を溫秀典雅と批評したのは、如何にも適切と思はれる。

大日本地名辭書によれば「溫泉岳又雲仙に作る、島原半島の鎮山なり、風土記に、景行帝長渚の濱（今長洲）におはしまして、此山を覽、山形海島に似たり、陸に屬する山か、別にある島かと問はせ給ひきと云者是也」とある。

予は松尾清太郎を案内とし、有明ホテルを出發したのは、午前七時三十分である。

古湯にある縣社溫泉神社に詣で、記念印を受けた、神職不在で、夫人の方が應接された。地名辭書によれば「三代實錄貞觀二年の條に、肥前國溫泉神社授位の事見え、此山の涌湯は、古より著はれ、古風土記に高來峰の溫泉と云へり」とある。溫泉神社は、元筑紫國魂神社といつた、其草創は一千二百餘年前に屬し、諸冊の御子五柱の神を祀つたといはれる。社前に大寶元年僧行基が、勅願により建立せる、眞言宗三大寺の一といはれる日本山大乘院満明寺がある。昔時は、小濱登路の山腹札ノ原邊から雲仙溫泉附近に互り、三百寺坊の稱があり、天草亂の前までは、尙四十八寺を存したが、一山天主教匪に與みした咎により毀ち棄てられて、今は唯一乗院のみ淋しく残れるものだといはれる。

八時「溫泉岳登山口」と書いた白塗の標柱を見、池ノ原の芝生地にかゝつた。原の窪地には瀦水がある、長徑約二町、水淺けれども、全く涸れることは甚だ稀ださうだが、情なくも名は空池といはれ

てゐる。

空池を右に見、ゴルフリンクスを貫き、前面に妙見岳を仰ぎ、緩斜の芝生地を辿る。此邊一帯を彌陀ヶ原といつてゐる。一面に布いたやうに咲き誇つたツ、ジの中に、翠滴る松の點々たるが、餘り高くもなく、岩塊は所々にわざ／＼配置された様に突起し、眞に天作の庭園である。秋にはマツタケ、シメジ、キタケなどが多く生ずと、案内者はいつた。

原の中途に登つた時、松の枝に掛つた數個の菅笠が目に着いた。近寄つて見ると、附近には、金剛杖もあり、莫塵もあり、白衣もあり、白布の籠手も脚絆も足袋もある、草鞋もある。四人分の巡禮支度一式が、而も殆どまだ使用せぬかと思はれる、生新らしいのが放棄され、風の爲めに飛散するのを防ぐ爲にや、無造作に岩塊を載せたのもあれば、載せぬのもある。普賢菩薩への參道でもあり、其名が彌陀ヶ原の地域のことゝて、少なからず我等が想像を惹いたのであるが、老練なる松尾案内も遂に不可解の謎として葬つて了つた。

前面妙見岳から、右の方野岳の山側一面に蔓延したツ、ジの美觀には、屢歩を止めて、見惚れざるを得ないのである。徑は追々急となり、岩塊露出の間を縫ひつゝ、九時仁田ニダの小平地に着いた。妙見岳と野岳とを連結する鞍部で、著しく灰白色を呈した地肌が露はれてゐる。遊客繁昌の頃には茶店の設けもあるとのことである。

彌陀ヶ原では、オキナグサ、カセンサウ、アフギカヅラの花を見たが、ヒメウコンウツギ、シモツケはまだ蕾であり、ヨミナヘシ、キキヤウ、ナデシコは、若芽が萌え出たばかりであつた。

これまで、妙見岳から野岳に互る、屏風の尾根の爲に、前面は始終遮られてあつたが、仁田の鞍部に達すると、眼界忽然として開け、北東には、普賢岳との間を、深く刻んだ薊谷アヰミヤがあつて、實に目覺むるばかり鮮か味を呈し、谷は延びて裾野に及び、黄熟した麥が黄金の縁を彩どる。裾野の彼方に

は、有明海を隔て、肥筑の山野を眺め、南西には、松や檜の立派な造林を飾つた矢岳が峙ち、此方には、彌陀ヶ原より野岳の山側に互つて、ツ、ジの花氈を布き、遙かの彼方には、千々石灘（千皺灘又橋灣）に突出した、國崎半島や、半島の此方山腹には、碧水を湛へた諏訪池が、美しい曲玉の形を呈する。

こゝに「小濱村大字小濱字小濱温泉岳温泉、國有保護林、面積十町二段歩」と書いた標柱がある。小濱の名義が、三ヶ所に出頭し、字名が「ヲハマウンゼンダケウンゼン」であるから、念入な稱呼といはねばならぬ。又「至薊谷七町五十三間」と書いた標柱もあつた。

徑こゝから妙見岳の東側に沿うて、薊谷の上部を辿り、鬱蒼たる樹林に入るのである、樹にはカヘデが多く、ハゼノキ、ツゲなどに伍して、モミの老木もありタニウツギの花が美觀を添へた。樹下にキンランの花を見、カニカウモリサウやメタカラカウもあつた。ツゲは幹徑尺餘、高二丈に餘る成育振りを示し、九州山岳に於て、予が目に入つた最大のものであつた。

徑は追々急峻の登りとなり、温泉群峰の最高點普賢岳の頂上に達したのは十時であつた。頂上には一等三角測量標石がある。頂上は、幅二三間乃至四五間、長徑約二十間に互る岩骨露出し、休憩用の腰掛がある。

仁田峠以來、始終密林に蔽はれ、鶯の誦經を貫く杜鵑の數聲も聞き、陰森の氣に浸つたのであつたが、足頂上を踏んで、眼界俄然として開け、目覺むるばかりの景觀に接するのである。

頂上に於ける展望は、實に優秀である、壯觀である。仁田峠の展望は、既に得易からぬ景觀ではあつたが、北方近く妙見、國見、普賢の高峰が重なり合つて、此方面が蔽遮されると、標高がまだ低いので、山麓四周を瞰下すには、遺憾の點もあつた。今普賢の頂上に立つて四顧するに、何等視界を遮るものもなく、氣宇真に豁然として、南谿橋氏が所謂天上の一小世界に、我は今逍遙するの感に入

つたのである。

東方には、有明海を隔て、岸に迫つて峙つ金峰山（六六六米）は、直距約九里のことゝて、手に取る様に近く見え、其背景として、遙かに靈烟天に靡くは、世界的偉大な火口を有する阿蘇山である。東南渺茫の天空には、霧島の靈峰を遙拜し、東北には、修験道者の行場として、其名も著る彦山を望み。北西八里許りの近距離には、霧島火山帯の北端として、掉尾の雄姿を誇れる多良岳（一〇七六米）に面接する。眸子一轉、南方には、天草二島を首領とする、列坐の面々を瞰下した。

唯西部方面には、始終雲霧が去來するので、岬灣島嶼が、最も複雑變幻を極むる、多種多様の景觀を縦にすることは出来なかつたが、しかし屢薄雲を透し、或は雲の切間からは、千々石灘の彼方に、野母崎の八郎岳や、大村灣の彼方彼杵半島や尙其背景として、五島の列島が、烟波模糊の間に、一瞥的見參に入つた。

西々北一里許りに、峰頭犬牙參差たる岩嶂を呈するは、九千部山で、阿蘇山彙の根子岳に甚だ似てゐるが、唯其一方の肩が稍傾き下つてゐるのは、聊か見劣りがする。

富士山が天下の名山たる所以の第一要素は。遠くより望んでの、所謂雲表に聳える其姿が、如何にも優秀崇靈なるにある、其近き麓の御殿場や、吉田口から仰いで、所謂「來て見れば」の感を起さしめるのであるが、乙女峠や、三ッ峠あたりから眺めると、始めて其英姿を感じべく、三保松原からならば、更に優秀を覺えるのである。予は會て八ヶ岳や立山の頂上から望んで、益其莊麗を認めたのだが、後伊勢朝熊岳の頂上に於て、曉靄の上に超然たる富士の靈容を遙拜した時、眞に崇高の感に堪へなかつた。富士の頂上に於ける展望は、標高の卓越するそれだけ、視界の宏遠なるはいふまでもないが、實は標高が高きに過ぎて、下界の眺矚は、稍鮮麗を缺くを免れぬ。然るに普賢岳頂は、適當な標高を有するのと、四周の海洋岬灣島嶼が、無比の複雑を呈するので、山上展望に於ける海洋美は、

正に天下一品と謂はねばならぬ。之を霧島山に比するに、頂上地域の廣闊、多種多様の景觀に至つては、彼に數歩を譲るべきも、其海洋美と鬼神谷カシダニ、薊谷アサノ美に至つては、大に彼を凌駕する。

東溫泉火山は、普賢岳を盟主とし、五六町の近距離を以て、溫泉山彙中、第二の標高を有する國見岳、妙見岳が峙ち、三者は丁度鼎足に位置し、普賢岳と妙見岳との間には、薊谷を作り、普賢岳と國見岳との間には、鬼神谷を作つてゐる、兩者とも深く刻まれた薊谷は、蒼鬱たる茂林を以て埋めてあるが、殊に普賢岳頂より瞰下す、鬼神谷新緑の美觀は、更に秋期に於ける紅葉美として、本山彙中第一の榮冠を占むるであらう。樹種はカヘデ、ハゼノキ、ナ、カマド、アカシデ、クロモジ、ヤシヤブシ、ツゲなどの闊葉樹に、マツ、モミの鍼葉樹を交へるので、今では淺緑深緑玄綠の中に、帶紅帶黃帶褐等、濃淡種々の若葉が錯綜してあるから、如何に紅葉美の多種多様なるかを想はしめる。

普賢岳頂から瞰下す、鬼神谷の景致は、我郷國金城山頂百間ビラの岩嶂から瞰下す深谷にも似、又朝鮮金剛山白雲臺下の幽谷にも似てゐる。さうして百間ビラの深谷が、卷機マキの雄峰を背景とし、白雲臺下の幽谷が、衆香城、法起連峰の奇嶂を背景として、其價值を高むるのに對し、此れは海洋島嶼無限の美を背景とする所に、本山獨特の價值を發揮するのである。

山頂の岩嶂を縫うた、ナ、カマド、ヤシヤブシなどに伍して、ツ、ジがある、シロバナシャクナギがある、イタドリがあつた。ツ、ジはヤマツ、ジ、アケボノツ、ジ、ドウダンツ、ジもあるが、概してミヤマキリシマで、其花色は、仁田峠よりの途中、頗る鮮かな深紅のも見たが、多くは淡紅紫色である。此邊は其數量餘り豊富ではない。シロバナシャクナギは、花期既に過ぎて、僅かに其殘花に接した。予は九州山岳跋涉に於て、筑紫の名に負ふツクシシャクナギ即ちオホシャクナギの物色には、頗る注視を拂つたのだが、唯久住山頂小局部分の外に於ては、遂に見參に入らなかつた。後吉野群峰跋涉の際、各所で之を認めたのだが、殊に大臺オホダイヶ原山頂大蛇ダイジャク嶺附近に於ては、實に古色蒼然たる老樹の

大群落に接した。竹内亮氏によると、九重山麓中には、随分多いとのことである。

大日本地誌によれば、本山は粗粒角閃石斜長石の斑晶を有する熔岩で、本邦では、戸隠山の裏山高妻山を除いて、他に餘り其例を見ぬ所だといはれる。

普賢岳頂上の展望臺に腰打かけて、眺望三昧の境に入つた予は、十時五十分頂上を辭し、奇岩怪石參差起伏せる急徑を降り、十一時普賢神社に參拜した。名の通り普賢菩薩を祀る。社殿は方二間許り亞丹蒼の屋根は、此山頂にまで昇進してゐる。社殿を擁する一大岩壁は、恰も屏風の如く峙り立ち、高さ約百尺、幅二十間にも亘り、シロバナシヤクナギは岩面を飾り、ウンゼンマンネンゲサ、クロクモサウが之を綴つてゐる。岩側からは、清冽な泉が滴り落ち、三個の石槽之を受け、溢れ流れてゐるので、此處で辨當をしたゝめた。この泉水は、盛夏炎天打續くも、涸れることは無いさうだ。

尙巉岩崎嶇の間を降ると、鳩穴といふのがある。入口幅七八間、穴内傾斜をなし、或は廣く或は狭く連續して奥暗く、深さは知れぬ。底部は一面に雲母の様な剝層式奇狀を呈した氷塊を以て蔽はれ、上部及側壁の岩角から懸垂する氷柱は、大小長短參差錯綜して、水晶簾の如く、さながら寒地獄的鐘乳洞に入る感じがする。殊に岩壁の節理面を被覆する氷衣の奇紋は、驚異に値するのであるが、其量餘りに多からぬ此氷が、盛夏を通じて、年中無盡藏であるとは、本山の珍品として、更に驚異に堪へぬ所である。この靈穴は、火孔の賜だといはれる。松尾老の語る所によれば、其發見は二十餘年前であるさうだ。此氷の成因は、富士山北麓の龍宮窟や、草津白根山下の氷谷の類であらうが、此處のは更に一段の奇觀を呈するのである。崖壁五六丈の上から、其一部が崩れ落ちて、入口に横つてゐる。崩れた部分は、暗赤褐色を呈し、粗大不規則な柱狀節理を現ずる。

社の下方近く、鳩穴の西南に當り、普賢池がある。是亦火口の址だといはれる。池は今長さ二十間、幅十間許り、長方形を成し、所謂自給的角閃安山岩塊を以て、四周の縁を積んである。長さ三四分に

成長した、黒色のオタマジャクシが夥しく見えた。四邊は鬱蒼たる闊葉樹林である。

附近に蠶種を貯藏せる風穴が多い。不規律な柱狀節理を呈した岩壁にある自然の洞穴、或は岩罅に人工を加へたのである。洞穴の前に立てば、冷氣身に迫り、肌粟を生ずる程だ。入口の石柱に「小林」と刻んだのもあり、「龍神風穴、島原蠶種製造株式會社」と註したのもあつた。此種風穴は、火山國を以て鳴る信州の山地には、到る所頗る多いのである。

ハルゼミの聲が頻りに耳を穿つた。唯此冷境に、大形な蛸イナが甚だ夥しいのは、何の關係かは知れぬが、前後左右から群襲するには、少なからず閉口した。

附近カヘデ、イタヤカヘデ、アカシデ、クロモジなどに伍して、ハコネウツギは花眞盛りであつたが、ドウダンツ、ジはまだ蕾であつた。

零時四十分、曩きの普賢岳頂への登り路に會した。「國有林一百町三段八畝歩」と書いた標柱がある。

午後一時仁田に歸着した。

此處から、急徑を辿り、中木場を經、島原に降るのは頗る惡路である。普賢岳國見岳の間から北に降り、寛政四年の噴出にかゝる燒岩シキ（新燒）と呼ばれる熔岩流を右に見て、千本木サナギを經、島原に出る方が樂だと、案内者は言つた。

予は更に本山の名物ツ、ジの美觀に浴すべく、仁田よりの連絡尾根を辿つて、野岳に遊んだ。五萬分一圖によれば、野岳の頂點は一千百四十七米突と註さる。野岳は、普賢、國見、妙見三峰の方面とは、全然其景觀を異にし、視界を遮るやうな樹林は無く、極めて短縮した小灌木を根締とせる岩塊が點在し、ミヤマキリシマ所謂霧島躑躅が、一面に布いたやうに蔓延してゐる。彌陀ヶ原の下部は、花期稍満開を過ぎてあつたが、此處は遙かに高いので、今や正に満開の美觀を呈し、神仙の技巧に成つ

た、一大庭園を観るやうな感じがする。

數丈の奇岩突兀たる處、泊岩トマリイハといつてゐる。此邊ミヤキリシマが最も多く、山側から彌陀ヶ原に互つて展開する、ツ、ジの美觀壯觀を双眸に收むるには、最好の地點と思はれた。

ミヤキリシマの花色は、淡紅紫色が普通であるが、久住山、阿蘇山のは、此色が特に淡く、且つ殆ど無差別平等の觀があつた。霧島山のは、幾分濃いのが多く、且つ濃淡種々あつたが、本山のは、更に種々雑多の色彩を呈した。案内者及び土人の語る所によれば、本山には、紅紫色に濃淡種々あるばかりでなく、白花のもあり、黃花のもあるさうだ。園藝變種には、有名な久留米赤司廣樂園の營業案内にもある通り、暮の雪、水晶簾、窓の月などの如く、雪白色のもの、水の山吹の如く、淡黃色、玉乃位の如く、帶黃白色のはあるが、予は本山跋涉中、遂に此様な色彩には接せぬのであつた。地方人の言ふ白色とは、シロバナシヤクナギか、シロヤシホではあるまいか。又黃花とは、キバナシヤクナギでないのは勿論であるが、或はヒカゲツ、ジか、キレンゲツ、ジではあるまいかとも思はれるが、普通のベニレンゲツ、ジも予が目には入らぬのであつた。

予は特に本山の名を冠するウンゼンツ、ジに對し、深甚の注視を拂つたにも拘らず、遂に見參に入らなかつたのは、不思議に堪へぬ。ウンゼンツ、ジの葉は、幅一分長さ三分許り、花は、稀には白色のものもあるが、概ね極めて淡い紅紫色を呈し、花冠は四分にも足らぬ小形で、我邦に於けるツ、ジ中、最小の花葉を有するものである。案内松尾清太郎の語る所によれば、「自分の家は、祖先から七代此溫泉地に住んでゐる。自分が子供の頃は、此地の住人は、二十五戸さへなかつたが、其後溫泉の發展に伴ひ、今は百五軒となつた。自分は若年の頃、若松や小倉あたりに出稼したこともあつたが、其後此地に歸り、多年本山の案内に従事してゐることと、今は六十二歳といふ老練な案内者ではあつたが、ウンゼンツ、ジに關する予が質問に對しては、唯隨分細かい葉のものもあると言つた位で、要領

を得なかつた。有明ホテルの庭園にも、各種のツ、ジが植ゑ込んであるので、廻つて見たが、ウンゼンツ、ジは無かつた。家人に聞いたが、矢張不得要領に終つた。園藝家によつて、今や本邦全般にもてはやされてゐる此のウンゼンツ、ジが、本家本場に於て、此の有様であるのは、普通人の足を入れぬ處に、或は辛うじて原産の名残を存するのではあるまいかと想はれた。後紀州那智山に參詣した時、那智瀑を探り、其一の瀧より二ノ瀧に到るの途、圖らずも此のウンゼンツ、ジを多く認めて、一驚を喫した。甥國士（新宮高等女學校教諭）の語る所によれば、那智山の北西に連る大雲取山方面には、非常に夥しいとのことである。本場で認め得なかつたのが、意外の所で見參に入るものである。

橋南谿氏の西遊記には、ウンゼンツ、ジのことは見えぬが、「環珞躑躅は見事にして、珍らしきものなり」といふ一節がある。此ヤウラクツ、ジは、普賢岳から野岳方面にも、ぼつ／＼あるが、矢岳方面には殊に多かつた。これは帶黃白色の鐘狀花で、餘り目立たぬ方だが、其葉振枝振に、一種の雅致があり、秋季の紅葉は、随分美しいのである。今はまだ蕾であつた。

野岳逍遙の際、他の遊客二三の案内をして來た男が、ミヤマキリシマの數株を掘り取つて携へゐたのに逢つた。幹の高さは一尺位、横に擴がつた枝は二尺許り、樹容枝態雅致を極め、數百年の樹齡を経たらんと思はれるので、予は「都會に持ち出さば、一株優に三十圓以上に賣れるであらう」と激賞したら、彼は親切にも、「記念の爲め、お持ちなさい、進呈します」といつて呉れたが、其掘取方が、無造作で、生着覺えないと思ふたので、予は唯其好意を謝するに止めただけであつた。

此邊のツ、ジは、實際綺麗に刈り込んだやうに、矮縮したのが多い。他日濫採に對し、保護法の必要があらうと思はれる。本山に於ける天與のツ、ジ園は、非常に綺麗だが、霧島山のそれに比すれば地域は餘程狭い。

二時野岳に於けるツ、ジ觀覽を打切り、彌陀ヶ原に降り、池の原を貫く島原道を横ざり、森林鬱蒼

たる矢岳の山側を巡ると、休憩臺がある。稍高みに在るので、小地獄を近く脚下に瞰下することが出来る。硫氣は屢風に送られて鼻を襲ふた。小地獄巡りの際、散歩の客には、西洋人も屢見受けた。

大日本地誌によれば、本山の噴火は、西より漸次東に移動したので、最初は千々石灣を擁する弧線が、千々石灣を火口とする輪壁であつたが、次に九千部山を中心とする西溫泉火山、次に普賢岳を中心とする東溫泉火山の活動となつた。記録に著はれた噴火としては、天和年間のは、噴炎天に押し、山麓の人々は、炬なくして夜行が出来たといひ、寛政四年一月十八日の爆發は、普賢岳の東北山側に沿うて、長さ四軒、幅三百米の熔岩流を生じ、杉谷村千本木に達し、同時に眉山の爆裂岩塊は、島原の東海に數多の島嶼を作つたといはれる。

現今活動の餘威を存する所は、この小地獄の地域で、徑三町許りに互り、盛に水蒸氣、亞硫酸瓦斯、硫化水素、熱湯熱泥を噴出してゐる。之を越中の立山や、陸奥の恐山の所謂四十八地獄に比すれば、此處のは小地獄と謙遜するだけ、地域は甚だ狭いが、邪見地獄、焦熱地獄、叫喚地獄、血ノ池地獄、鍛冶屋地獄、餅屋地獄、酒屋地獄、無限地獄など、活動狀態によつて、夫々の名稱があること、亦立山恐山のそれと同様である。古代に於ける人達が、此種地獄の狀態を、神聖視し靈場化し、之を中心として、佛宇を建てたこと、恐山と其規を一にするのであらうと想はれる。但立山の地獄は、位置が餘りに高いのと、距離が餘りにあり過ぎるので、此種佛宇の建立を見なかつたのであらう。

切支丹教匪の亂に與みした、山上寺院の僧尼數百人が、幕府の嚴命によつて、寺院を毀たれると同時に、この血ノ池地獄に投ぜられたといふが、あはれ神秘的靈場も、此世ながら血ノ池地獄の慘狀を呈した、當時を思ひ出すさへ、慄然たらざるを得ない。

小地獄の境地は、到る處噴氣噴湯の壯觀があるばかりでなく、噴出硫黄の爲に、地表は黄變赭褐變した所もあり、白土の爲に、白化した所もあつて、一種の異觀を呈するのである。

小地獄を下ること數町にして、一切經瀧がある。行基菩薩が水垢離を取り、一切經を誦すること一百日、祈願成りて、大乘院満明密寺を建立したと傳へられる。

鐵道省の旅行案内によれば、本山は、春に躑躅、秋紅葉、夏に綠林、冬は霧氷の美觀があるといはれてゐるが、この霧氷については、溫泉小濱案内に「冬季嚴寒の候、山上に登つて見ると、木々の枝葉は勿論、木の根岩角に至るまで、悉く雪とは異なる、一種の不透明な氷の結晶が附着してゐる。而も皆一様に風の吹いた方向にのみ、横に發達してゐて、風蔭の部分には、殆ど着いてゐない。是れ氣象學上霧氷といふものであつて、此れが満山を飾り、日光に映じて、燦然と輝く光景は、實に何とも言へぬ壯觀であり、亦奇觀である。由來溫泉岳には、春の躑躅、秋の紅葉等、世の賞譽に値する眺は尠なくは無いが、此霧氷には及ばざること遠しと斷言するを憚らない」と記してある。然しこの霧氷は、吉野群峰や、其他濃霧を蒙むる山岳では、嚴寒の候、往々視る所の現象である。

溫泉公園の西方に峙つ絹笠山には、氣象觀測所があり、展望臺があつて、此處に登ると、東方脚下に、古湯、新湯、小地獄などを瞰下し、東北には、普賢岳を始め溫泉群峰を眺め、西方は千々石灘方面に展開する景觀を賞することが出来る。

三 溫泉岳降り

本山の西麓海岸に、小濱溫泉がある。地名辭書には「コハマ」と訓じてあれど、土人は「ヲバマ湯ノ町」と濁つて呼んでゐる。鹽類泉で、諸病に偉効があるとして、溫泉旅館も數十戸あり、夏期には木賃制を設け、頗るの繁昌を呈すといはれる。此處から山上溫泉地への登路は、最舊の經路で、現に自動車も運轉し、徒歩も樂であり、途中の景致亦觀るべきものがあるといはれる。

西北麓千々石より木場、岳の部落を經、新湯に登る道路は、最近自動車も運轉し、今は道幅二間では

あるが、小濱登路と共に、縣營を以て、本年中には、三間幅道路に改修されるさうだ。

尙本山登路には、東北麓からするもの三つ、東南麓からするものに三四の細徑があるが、縣營として北麓神代カシノよりの登路と、南麓口ノ津よりの登路は、目下開鑿中であるから、峻功の曉には、山上溫泉場は、實に四通八達の便を得るであらう。

午後三時、有明ホテルに歸着、一浴を取つた。本館内湯は數個室あつて、設備は優良清潔で、非常に氣持が好い。内錠の施設もある。この浴場に於ける溫泉は、微かに白濁を帶び、硫化水素の臭氣あり、少しく酸味を感じたのである。

浴後庭園を散歩し、玄關の傍に設けある休憩卓に倚つて、繪葉書數十枚を認め、郵便局に投じた。千々石驛に下るべく、四時有明館前に待ち受けた自動車に乗つた。乗客は予の外一人だけである。

古湯を經、道は西北の針路を取つて下りに向ふのであるが、程なく右手數十間を隔て、針葉樹林翳鬱たる岩壁に、其名を聞くさへ、哀劇の感ある稚兒落チゴオトシノ瀧といふを、木の葉隠れに見た。千々石川の上流加持川カチに懸るのである。道は始終此川を右に、山側を左に見上げつゝ、立派なジグザク式を呈するのであるが、運轉加減數寸を誤らば、深谷に墜落する虞があるので、一廻轉毎に背に冷汗を感じたことは、丁度朝鮮内金剛に迫つて、墨坡峴を昇降するのと同じかつた。偶自動車の死體が、路傍に横つてゐるのに逢つた。聞けば此處まで登つて來て、岩角に衝き當り、大損傷を受け、運轉不能に陥つたので、乗客には徒歩を求め、車體を分解して、運搬の手當中であつたのだ。此事件は、益予に不安を懷かしめたが、幸に我等が自動車は無事四十分間で、千々石驛に降り着いた。此經路四里強、自動車賃金は二圓五十錢である。

島原線愛野村驛アイノムラに接續する溫泉輕便鐵道は、目下千々石驛が終點である。

六時十七分、汽車千々石驛を發すると、左方近く千々石灣を縁どる白砂青松のほとり、岸打つ白波

を眺めて心地よい。八時四十分、長崎線の接續點諫早^{いさハヤ}驛に下車し、驛前の中村屋に投宿した。

諫早は、卍字狀に展開せる諸半島の中心點を占め、龍造寺氏の舊城下である。

中村屋は、酒類販賣料理兼業の旅館である。此日予は遅く着いたのと、予が山装を怪しく見てか、餘り好い挨拶も受けなかつたが、敢てお斷りにも接せず、店の上にある、二階の頗る振はぬ一室に導かれた。入浴を終り、晚餐をすまし、予は店の帳場に居た、二十許りの娘に就いて、記念帖に宿印を求めた。程なく「奥座敷に、お床を展べて置きましたから、御隨意にあちらで、お休み下さい」と申し出た。此室は下の奥座敷で、廣くもあり、立派な床の間もあり、綺麗であつた。殊に夜具が非常に優良清潔なのは、意外であつた。捺印の際、前夜の宿所、温泉岳新湯有明ホテルの印が押されてあるのを見て、氣の利いた娘が、家人に告げた結果が讀まれ、妙な所で、記念帖の功德を蒙つたのも面白い。

(大正十五年九月三十日稿)

雜 錄

○霧ヶ峰登遊雜記

柳 澤 悟

大正十五年七月十七日下諏訪に住む知人を案内とし、富部から霧ヶ峰に登りし記録に、最近に至つて教へられた土民の實話及び二、三の參考書によつて、糊と缺式に切り取りつなぎ合せて、此の稿をまとめたのである。

霧ヶ峰の山腰をとりまいて針葉樹や闊葉樹が年毎に盛んに植林されるが、一步、霧ヶ峰の本體に足を入るゝならば、未だに自然のまゝであつて、其處特有の美、竜大にして緩慢なる傾斜、淺く一起一伏したる山容は展開せられ、樹木は殆んど皆無であつて、ス、キ等の草本が生じてゐる處は、山とも峯とも原野とは勿論趣の異なつたもので、幼

年期の臺地狀地貌を呈し、その中央には東俣澤の上流、觀音澤が深く河蝕して、既に幼年谷を形成してゐることや、そのはるか北方には高層濕原があり、夏季にはワタスゲの白穂や、ハナシャウブ、カキツバタなどの群落が薰風にゆらいでゐる。又その奥に水を湛へてさながら研ぎ澄した輝鏡、鎌ヶ池、八島ヶ池を聯想するに及ぶならば、どうして登遊心を起さぬ者があらうぞ、他に同行者二名を得たのであつた。

蓼ノ湖を経て賽ノ嶺へ

富部の家を午前六時四十五分に出て、北方に承知川の上流武居入りにかゝる。天候を氣遣ひつゝ、來し方を見返せば、朝霧に覆はれた諏訪の湖面はさながら曇らせた銀板の様であつた。

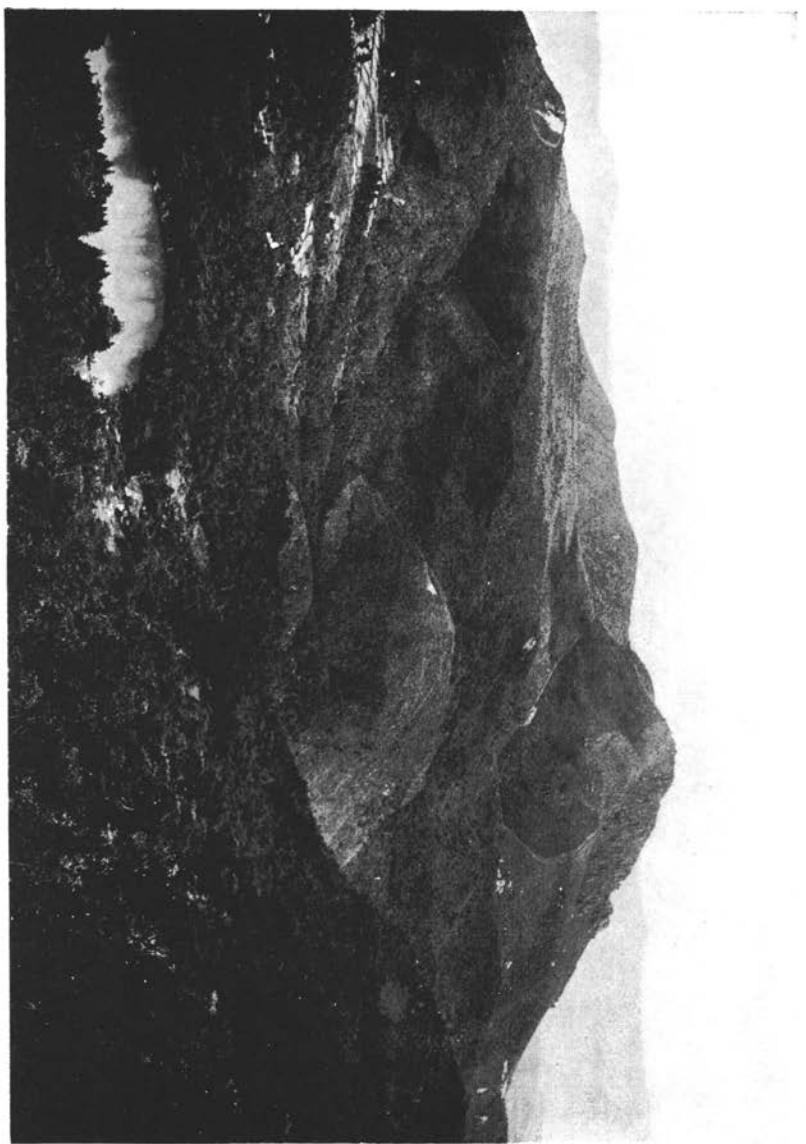
途中で道連れになつた學校林巡視といふ數人の小作男と共に、御射山ミサヤマ（二八〇・八米）と高見山（五萬分の一地形圖「諏訪」記載、大見山）の山裾の間を細い流れに沿うて緩やかなに登つて行く。御射山の東北方を萩倉に越ゆる萩倉越えの岐路に差掛かる頃から、今まで端山によつて狹められてゐ

た水田地も次第に展げて來た。七時十分、岐路に來て作男等と別れ、右岸沿ひの路を尙も行く、路傍にホタルブクロ、オニユリ等の草本を見る。又も狹められた水田地を單純な眺めも無き細徑が入り來ると、其の先方の尾根は騎馬横手と言ふのであつた。母や杉などの植林と細長くせられたる水田と入り混つた中を行く細徑は、朝露の多い下草で兎角覆はれてゐた。私達は次の岐路で右して騎馬横手といふ尾根の裾にそうて、蓼ノ湖（宛字）に至るのである。蓼ノ湖から不完全に流出する水は、此の細徑を浸潤して足下は誠に氣持が悪い。次第に端山が開けて、今迄の植林と入れ變りに草地が續く中を蓼ノ湖に八時五分に着く。

此の池は上諏訪水道の貯水池であつて、今は地形圖の湿地一體は池となつてゐた。此處には一寸とした茅葺小屋も建てられてあつて、水源の集水所はシナノキ平の東方にあり、夫婦清水の附近を流れて此の貯水池に導かるゝのである。

十分程にして此處を辭し、貯水池（蓼ノ湖）に流入する水路に沿うて角間澤の路傍に佇む。南を

振り返つて見ると、上原山（一五一七米附近）や石を採掘してゐる福澤山（輝石安山岩で、節理によつて扁平に離れる性質を備へたもので、土民呼んで平石と言ふ、俚稱唐澤、阿彌陀寺の南方地形圖に石截場の記號ある地點）と高見山との山間、角間澤の平地に角間新田を俯瞰し得る。うねりして細長く貫通する路は角間新田に下つて行く。荷車の軌跡新しい路を登つて行くとい間も無く岐路に出る。其處には木柱が建てられてあり、「左山道、右和田峠及男女倉に至る」と讀まれた様に記憶する。此の左路は明かに一ノ窪ノ頭（一五四五・六米附近）方面に至る山道で、右路は男女倉越えである。此の邊から北に秦ヶ原（宛字）といふ湿地の一部や、賽ノ碛の地藏尊が遠望し得られる。私達は先史時代の遺物石鏃が發見せられたといふシナノキ平（諏の字の上手針葉樹の記號ある地點）の近くで右折して涸れた角間澤の碛を過ぎてアシクラ池（オドリバノ池とも言ふ）に先づ行くのである。案内の彼はシナノキ平は知らなかつたが、此の邊一體をハンノキ平と呼んでゐた。此の



東京 新日新聞社

風景 居

地域はシナノキ平も含んだ可成廣いものであるらしく、地形圖は草地の記號があるが、今では落葉松やハンノキの植林であつた。彼は一昔も以前には、男女倉方面から早朝に此の邊迄鎌を手にして秣を刈りに來たものであると話して呉れる。

直ぐ滾々として湧出する流水に至つて、水の用意をして樹林を過ぐると、路傍右手に水道集水所を見る。此の邊から草地となるのを喜びつゝ登りを急ぐ。返り見れば、御岳方面は執念に取りつく雲で見えぬが、北アルプスの山々が輝く残雪を戴いて、朝の透徹な空氣の中に遠く近く眺められて、ともすれば緩るみ勝なる神經を緊張させる。

四圍を山裾で圍まれた濕原の遙か奥に池が望れる。此處は村界で廣い防火線が作られてある。案内の彼からは、池ノクルミと發聲せられる。そして彼れはアシクラ池及びオドリバノ池の俚稱を知らぬのであつた。

私は明日アシクラ池から車山、大笹峯（一八〇七・三米）に出で、山浦方面（山浦は山裏、霧ヶ峯東麓をいふ）に出掛ける豫定であつたので、池

へは割愛してしまつた。

霧ヶ峯にある多くの村郡界には、殆んど防火線が出來てゐるので、適宜に利用するならば、僅な時日で霧ヶ峯火山彙を觀る事も出来るし、名物の霧が濃く立て置めて、四圍を混沌と閉ざすとも、困難な事はあるまい。

霧ヶ峯の本體に近づく頃、賽ノ嶺に分る、地點附近からは、車山から低くのびる山向ふに、立科山から八ヶ岳に續く一體や、さては芙蓉峯、白峯三山、仙丈、駒ヶ岳などの山々を一望し得るのであつた。賽ノ嶺に續く防火線に従つて降つて行く、堅縞や横縞模様に浸蝕せられた角閃安山岩といふ巨岩磊々として續く中を過ぎて、十時三十分賽ノ嶺の地藏尊に額づく。

角間澤をさかのぼつて來た男女倉越えが、源頭東部に突出した尾根に丁度昇り切つた處であつて、其處には地藏佛が二基あつた。俚稱秦ヶ原（宛字）といふ濕地を直ぐ下手に、北方東侯澤の松翠御柱山、其の向ふの鷲ヶ峯や、更に大峯山（地形圖の三峯山）、二ツ山、鉢伏山方面が展けて望まれ

る。

觀音澤まで

土民が霧によつて風化浸蝕せられたといふ岩の多い(私も事實さう信じてゐるが)男女倉越えの路をだらだらと下つて行く。同行の彼等はツボ石と呼んで非常に珍らしがつてゐた。ツボ石とは庭石の事で、昔は盛んに切り出したそうである。最近では禁じられたとの事だが、中には鑿の入つたものも見受けられた。かうした岩石は尙も觀音澤を越えてまで見る事が出来た。

晝食の豫定であつた強清水^{コワシミツ}ノ澤附近からは、期待したる霧ヶ峯本體の特殊なる山容を見るに及んで、一として私達を喜ばせずにはをかなかつた。澤渡り^{サワダ}(宛字)と呼ぶ濕地から流出する強清水ノ澤は、最近の旱魃で跡形も無く涸れてゐた。防火線のある村界を三角點のある處を過ぎて、アシクラ池の西方から来る防火線が、地圖の闊葉樹と草地の境に作られて觀音澤に落ちてゐる。それに従つて觀音澤に下り晝食とする。十一時三十分。

觀音澤は蠅の多いのに不快であつたが、それにしても清冽な流れに晝食をすませて、狭い谷間に休む間、同行の一人がサンセウカジカ! と叫んだ。手頃な岩石を靜かに取りのけて水中を見れば、其處には小さき山椒魚とでも言はうか、大きくて長さ三吋程もあつたらう。流れの淺所と深所の中位の石下に居るのであつた。何んでも小兒の癪に特効で珍重せられるといふ。一時間程も費して四十匹程は捕る事が出来た。

山岳(第九年第一號)所載、故梅澤氏の三峯川昇りの一節に、

山川君の露宿した處は流れに近かつたのでサンセウカジカ——銀彌(市野瀬の獵師、宮下銀彌)が左様云つた山川君に伺つたが一向何だかおぼえないと云はれた——が飛んで来て大分驚いたとの由であつたが自分等の處は水より大分上であつた爲か幸何にも飛び込まれなかつた。と記してある、面白く感じたので附記した。

因に言ふ、此のサンセウカジカは、長野縣より天然記念保護物に指定せられたる四阿山麓菅平に

産する日光山椒魚と同一種ではあるまいかと思ふ。

所で此の珍客は、私の水筒中に靜かに納められて十二時四十五分此處を出る。

舊御射山

觀音澤の右岸急斜面の防火線を登つて、舊御射山の小祠に參詣する。地圖の闊葉獨立樹の記號ある地點で、傍に石柱あつて刻して「御射山——」と言ふ。

往時は此の御射山社に相當に參詣者があつたとの事で、當時納められた賽銭が附近の叢に未だに發見せられるとの事である。同行の彼等が最前から邊りを頻に物色してゐたのも、實は此の古錢の爲めに他ならなかつた。

かりてほす穗屋の芒の御射山にかまはやふさや御坂なるらん

春 雨 集

此の歌を取扱つた書にして、よみし場所を指摘してゐるもの遺憾ながら一本を備へるのみであるから、總ては土民より聽取せし實話を以て保證付けするより仕方がない。

此の霧ヶ峯の御射山社が榮えた昔、毎年七月二十七日の御射山祭りの節、此處に芒の小屋を建て、芒の屋根をふき社人あつまりて神事を行ひ、呼んで芒大明神といふのであつたが、後世に至つて此等一切を萩倉の御射山（二八〇・八米）に移したのであつた。毎年八月二十七日が今の御射山の祭禮日であつて、芒の小屋を作り神事を行ふと土民から話された。所で前記の歌が若し此處を讀みしものならば、舊御射山にかまはやふさの地名が當時にあつた事は幾分か知る事が出來よう。

此處から南方の斜地に北面して二、三間置きに出來た壇が數段ある。往時諏訪藩士が馬で此處に來て、秘かに馬術を習ひ、槍銳を練りし時に作られたものであると説明された。當時往還にあてられた通路は、前記騎馬横手から高見山に出て舊御射山に至りしものであるといふ。此の壇の斜地を騎馬横手とか騎馬横手廻りと稱する人もある。

鎌ヶ池、八島ヶ池を経て鷲ヶ峯まで

踏まれてゐる徑を鎌ヶ池に行く、濕原に沿うた路傍には、カキツバタ、ユリなどが咲いてゐて美

しい。大笹峯（一八〇七・三米）方面から流れ出る流水も今は涸れた磧を過ぎて鎌ヶ池へ午後一時二十分に着いた。

暑い炎天をさけて北岸の磧にあるヤナギ、ハンノキなどの樹下に小休する。池の水も昨今の旱魃で涸れて少なく、湿地に續く對岸は池棚が現れて急に段になつて水にのぞんでゐる。私は最初サンセウカジカと思ひ違ひしたイモリが水中に棲んでゐる。池の涸れた磧には一面にモウセンゴケが生じてゐる、水端までそれがのぞんでゐる。

八島ヶ池へは濕原の北西に徑があつて、迂闊に徑を濕地に離れ、ば泥中や水溜りへ飛込んで不快な目に逢ふ。途中瓢箪形の小水界もある。此れは武田博士の所謂瓢箪池である。附近からは北方に眺望がひらけて、上信境の山々を望んで新しい喜びに満ちる。

八島ヶ池は其の名の如く無數の島によつて形をそなへてゐて、池畔もミヅゴケやアシで鎌ヶ池と全然異なつた複雑した突出を見せてゐる。

島はミヅゴケ等で出来たものだといふが、土民

は八島ヶ池を呼んで七島、八島と言ふも島から出来た池名の遺物であらう。

和田峠を徑て大峯山方面に至る防火線は、鷲ヶ峯附近は主に尾根の西面をからんで作られてあつたので、登路は總て此に従ふのである。鷲ヶ峯の東面は男女倉谷源頭で落葉松の植林である。西面は東俣澤の支流ウツギ澤で、ウツギ澤の左岸から東俣澤の左岸の一體の積翠を御柱山（東俣官林）と言ふのである。

諏訪神社の御柱祭は七年一回であつて、此の時引き出される木材は、御柱山から伐り出される。八ヶ岳の阿彌陀岳西麓坪葉川（柳川の上流）の右岸に御柱山がある。此れは諏訪神社上社の御柱山であり、下社の御柱山は前記東俣官林の一部である。

東北方に尾根の屈曲する處、南面して「鷲ヶ峯大天句、萩倉講中」と讀まれた石が立ててある。此處から尾根は一度ゆるく低下して西北に曲り鞍部に至つて鷲ヶ峯に三時頃着く。

三等三角點は防火線の傍少し小高い堤上の叢に

置かれてある。未だ山ツツジ美しく、南アルプスの脈は未だ日盛りといふに、白紗の布で覆はれた様に霞んで望まれたが、霧ヶ峯本體を展望する最良處として、霧ヶ峯火山彙中のバノラマ臺であらう。西北方に低下して行く顯著な尾根は、一度星糞峠（宛字であらう、諏訪史による）を経て和田峠に至り、猿ヶ巢と言ふ岩尾根から大峯山（三峰山）を起し、美ヶ原、武石方面と分岐し、略同高度の二ツ山、鉢伏山の一塊を棟として、横峯、高ボッチ山、四澤山（一六二〇米）、東山の高原性は、二ツ山からの尾根と並行して南部諏訪平に開析的に次第に低下して行く。

歸 途

一行は星糞峠から和田峠に出て西餅屋跡へ迂回するよりも、銚子川に出で、餅屋跡に出る方が日盛りの中に下諏訪に歸れようと、西南の星ヶ塔（宛字）に續く落葉松の疎な尾根に不規則な細徑をとる。返り見れば、鷲ヶ峯西面の岩壁は錯雜を見せてゐる。木曾の駒ヶ岳方面はもう紺青の空に溶けこんでしまつた。

兎角足元の不安な急坂を、落葉松の梢に助けられて星ヶ塔の鞍部に着く、依然として續く徑は曾てアイヌ民族が先史時代に於て、黒曜石を求めて仕事をしたといふ鈍峯星ヶ塔に刻まれてある。此處から雜草を踏んで銚子川の流に急ぐ者と、遺跡を尋ねて大平から來る細徑に出て、銚子川の流れに出ようとする者とは、星糞峠から伸びた尾根によつて、明瞭に作られた路を振向けようとする所で出合ふ。二、三町行く程に流れの手近な路傍をえらんで二度目の晝食をとる。三時三十五分。

東西に延びた路に荷を下ろして、彼等がコレと呼ぶギボウシを菜にして味噌汁が出来た。大分サンセウカジカを味の素にとの意見であつたが幸にして強硬に願ひ下げてしまつた。

此の地方（諏訪）ではギボウシの若芽を食用に供せられる事は、武田博士の記事によつて知るところであるが、南佐久の大部分からも同様に、コレと呼んで食用とするのである。

幾分西に廻つた太陽は容赦なくてらすので、三十分にして出發する。柳の多い大きな道を流れを

離れて中仙道の舊道から新道に出る。砂塵の多い道には自動車の轍が明瞭に認められる。偶々自動車が進んで、好都合に行けば下諏訪に日中に歸れるが、不幸にして膝栗毛をするのだつた。西餅屋跡には右手に新しい一軒家を見るのみで、私の唯一の期待、それは餅屋跡と言うても在りし昔の幾分かは残されてゐるであらうと思つてゐたが、路傍には二ツ三ツ立竝んだボブラの木立が吹く風にゆれてゐるのみであつた。

汽車が出来、自動車が出、山間僻地を疾驅する今日、三度笠縞合羽の旅人導者に餅を齧ぎ、榮えた老舗餅屋は、餅屋峠とまで呼ばれた其の昔、恐らく宵越しの金は持たぬといふたであらう勢も、今は夢物語となつて、哀れ廢業の憂目となつたのであつた。

砥川の流は白く濁つてゐた。來し方驚ヶ峯の叢峯は、此の附近より眺めては其の姿餘りと言へば貧弱である、取立て、觀賞する程でもない道は、驚ヶ峯から西南方に低く延びた山坡と、右方焙綠山（一三九〇米）との山間を暫く行くのであつた。

た。焙綠山から遙か南方に低下する尾根の東面には、高呂岩と呼ぶ錯綜した岩壁を仰ぎ見る、それは地形圖にも申譯ばかりに記しある。その尾根の突端を廻つて細徑をとり浪人塚（水戸浪士墓）に參詣する。

墓の背後から前方に覆ひかぶさる櫻の古木に炎暑をさせて一休みする間、彼が今迄聞き傳へられた當時の話を老人めいた語調で物語るものであつた。

元治元年十二月水府脱藩の義徒、冤を京師に哀訴せんと欲して本國を落ち、上下野州を経て信濃に入り和田峠を越して此處に至つて松本、諏訪の二藩の防禦兵と衝突して死者を出したのであつた。

人馬絡繹の地であるだけ、戎装の士の横行や、昇平日久しく干戈を知らざりし村民の震駭恐怖、そうした事件の數々が私の腦裡から眼前へと展開して行くのであつた。

小休後此處を立つて、樋橋の部落を素通りして道を急ぐ。今迄狹められてゐた山間は急に展け

て水田地となる。御柱落しの明神を左方の樹間に
見て落合を過ぎ、下諏訪に入つたのは七時であつ
た。

思ふことども

霧ヶ峯火山彙は、諏訪北部横川、砥川の上中
流の山塊の東南方に噴出した霧ヶ峯火山を中心と
する地域であつて、中央の表面は今尚ほ浅い起伏
を以て次第に緩斜してゐる高い幼年期の地貌を呈
し、八島ヶ池、鎌ヶ池附近の如き典型的な高層濕
原を各所に持つてゐるが、該火山噴出後に於て、
此の地域の四圍に起つた南北（角間澤、男女倉
谷）、東西（觀音澤等）の斷層や多數の爆裂口の爲
めに浸蝕作用の乗ずる處となり、次第に深い溪谷
が刻込んで來て、既に幼年谷、晩幼年谷の地貌を
呈してゐる。従つて主要な交通路は何れも是等溪
谷に設けられてゐる。然し音無川や砥川の溪谷は
該火山噴出以前からの構造谷状のものであるか
ら、大門峠、和田峠等は古くより主要な交通路と
成つたのであると。

此處に左の參考文獻がある。

諏訪史

第一卷

鳥居龍藏博士著

信濃教育會諏訪部會發行

霧ヶ峯附近の内容として私の氣付いた事は、日
本全國に於けるアイヌ人石器時代の遺跡は、實に
鎌ヶ池附近であるといふ事であつた。此れは鎌ヶ
池の東方標高一五〇〇米の地點に於て、黒曜石製の
石鏃一個を發見せしにより垂直分布として最高の
位置であらうといふ論文である。

尚ほ、山岳（第十一年第三號）に武田博士の記
事がある。内容霧ヶ峯の植物景觀に至つては、明
細な圖解を以て、チリモに關する立派な學説が出
てゐる。

霧ヶ峯特有の美しさのみに満足は出來やうけ
れど、充分満足な登山をなさんとするならば、私
達に最も手近な右の「山岳」を手にして旅行した
ならば、什麼にか心強くも、又興趣深いことだら
う。

（了）

○第二回修正版地形圖『山中湖』に就て

武 田 久 吉

五萬分一地形圖『山中湖』は明治二十一年の測圖に係り、同二十九年に第一回修正を行ひ、大正二年に鐵道を補入されたものであつたのが、大正十一年に第二回の修正が行はれて、大正十四年七月二十五日印刷同三十日に發行されることとなり、本年頃から我々の手に入る様になつた。これを前版に比較して、改修された點の主なるものに關して、卑見を述べて見たい。

改修の主な點は、甲駿國境の變更、道路の補入、地名の改補、郵便局や役場の移動設置等や、神社佛閣の補足とか、市街地や村落の發展に伴ふ變更等で、地形の改變は殆どない。唯明見湖の形が變つたり、富士表口五合附近に崩壊地や露岩の記號が加へられたり、阿多野の貯水池が記入されたりした位に止まるらしい。それでも舊版を用ふるに

比すれば、遙に良くなつたことは言ふ迄もない。とは申すものの、慾にはもう少し地名を多く記入してほしかつた所や、詮議を嚴密にして、正確な名稱を用ひて貰ひたかつた。私はこゝにそれ等について記述するに當り、先づ富士山から始め、次に道志山塊に及ぼし、最後に丹澤山塊に就いて書いて見ることにする。

富士の東面で、甲駿の國境が訂正され、籠坂以西主として分水脊に沿うて小富士に達する。それ以上は未定地とあつて記號が入れてない。駿州の側では、須走村附近の小徑が増加された外、東口登山道沿に地名が記入された。慾には序にも少し多く各名所の名を入れて貰ひ度かつた。新版に『馬返』とあるは、舊稱で、今はこゝを一合目と變更して居る。これは山内營業組合の計略で、山麓の村から一合目迄の距離を短かく見せかけて、登山客を引寄せようといふ苦肉の策である。新版に『一合』と記入してある地は、昔も今も假休で通つて居る所で、こゝを一合目と稱することは、あまり耳にしない。假休はカリヤスと讀むので、富士山に

關する最も纏つた著書として有名な、小島鳥水君の『不二山』の附録『金剛杖』には、「假休み」と送り假名が添えてあるが、その意味から出た名稱には相違ないとしても、カリヤスミとは呼ばない。又中にはカリヤスと聞いて刈安の字を宛てたがる人もあるが、これも正鵠を得たものでは斷じてあるまいと思ふ。

これから古御岳^{コミダケ}まで何も名稱の記入はないが、一七二〇米程の地は雲切不動の舊趾であるし、神祠の記號のある地は、小室淺間社^{コムロセンザ}の鎮座する所である。それから古御岳の直手前に家屋の記號のあるのは、舊は中食場として知られた所で、現に休泊所もあるが、今はこれを二合に改めてしまつた。

古御岳は以前は太郎坊と稱して、村民出張して全剛杖を販いだものだが、今は山麓で販賣することとなり、此處には神職が出張して、御札を賣つて居る。北口の小御岳同様に、天狗の面等が奉納してあるのも面白い。こゝは登山路と下山路と合一する所で、登るには右を、下りは左から來ることになる。新版の地圖では、下山路はズット假休

迄伸びて居るが、私はついその路を知らずにしまつた。須走村の山内營業組合で發行する『登山の栞』にも、古御岳の所で兩道合一する様になつて居るが、米山館發行のものには、砂走り道は馬返迄通じて居る圖が載せてある。舊圖に『一合』とある所は今はなく、その位置で走り道に沿ふ所の休泊所を、今は走り二合五勺と稱すること、新圖に示してある通りである。

五合の位置も變更されたが、新版にはそれが正確に表はしてある。然し乍ら五合上(舊五合五勺)を経由する中道の記入が、新舊兩版共に省いてあるのは何が故か、全く解釋に苦しむ所である。

東表口の下山路が増補されたのは結構なことである。然し寶永山の室^{むろ}の位置は中道路の西に記してあるが、これは東に改める必要がありはしまいか。須山口の路の記號が細徑に改められたのも尤も至極なこと、申す外ない。

山中から小富士に達する路は、舊い二萬の圖には載つて居るが、舊版の五萬には省いてあつた。それを今度復活されたのは喜ばしい。

北口の登路について言へば、吉田の富士嶽神社が、富士淺間神社に改められた。これは何れでもよいが、富士嶽神社の鎮座する諏訪の森の名稱を省いたのは遺憾である。登山路は改修された幅の廣いものに修正され、大石、一合、三合等の名稱が加へられた。序に内八海（タチノカイ）の一である泉瑞も明示されたら更に結構であつたらうに。その外舊胎内の外に新胎内をも記してあるが、新胎内を『北口胎内』とし、舊胎内を單に『胎内潜』としてあるのは、餘り賛成出来ない様に思ふ。吉田から大田和に通ずる馬鐵線路が、船津の手前で急に消滅してしまつて居るのは變な事である。

ナシケ原の西一軒屋の傍に、大町桂月がとてつもない讃辭を呈した井戸の記號が記入された。惜しいことには、近年は通行人が少ない爲めに、この一軒屋は去る十三年頃かに賣物に出て、今では全く取去られ、井戸は木片や木枝で蓋をされてしまひ、あの冷水を汲み上げる設備もなくなつた。山中の村の西北端にある稻荷神祠の記號も結構であるが、船津道にある鐘掛松は是非明記して貰ひ

度かつた。

道志山塊の最高峰なる御正體山の振假名が、『ミソー』とあつたのを單に『ミ』丈けに改めてある。この山は矢張りミセウタイであるのだから、この改訂は我意を得て居る。御正體の西に峙つ鹿留山（シドメ）には何等の名稱も記入しないこと、前版同様であるが、その一峰一五九七・八米と測られたものには、『杓子山』と新に記入してあるのが、チト氣に入らない。何となれば、杓子山なる名は、この峯頭の名ではなくて、その中腹より遙に下方にアカマツの植林してある部分の名であるからである。鹿留山は本來北面の稱ではあるが、此の山の専有名としてはふさはしいものと言へよう。内野では鹿留の稱を用ひないで、村の背戸にあるからといふので、セド山と呼んで居る。これは『甲斐國志』卷之三十六山川部第十六中にも左の如く載せてある。

「一 タカゴヤヨリ戌亥ノ方へ峯續半里許ニシテ内野ヨリ鹿留山へ入ル採薪ノ道アリ此ヨリ酉ノ

方へ貳拾町餘ニシテ高峯アリセド山ト云此丑寅ハ惣テ鹿留山ト稱ス此峯ヨリ未申へ當リテ峯續半里許ニシテ鳥打峠ニ至ル明見村ヨリ内野村へ越ユル坂路ナリ嶺ノ辰巳ハ内野ニ屬シ戌亥ハ大明見ニ屬ス下吉田村入會ナリ鳥打ヨリ西へ行クコト五町許ニシテ高峯アリ高又山ト云未ノ方へ峰ヲ下リ平山ニ至ル明見ヨリ忍草村へ越ユル坂路アリ云々」

右に言ふタカゴヤとは、山伏峠の西北に連る一三六六米の峯で、内野から鹿留への採薪路といふは、地圖にも示してあるもので、俗稱二十曲峠のこと、見て誤たない様である。内野では一六三二米の三角點ある地點の西南に當る最高點を、子の神と呼び、新版圖の杓子山と誤記する地點を、イシクボミ、又はキンガクボと呼ぶ様である。

新版圖に高坐山とあるは飯盛山イヒダケと稱するもので、本當の高又山は、忍草の北の山から北に續いた一峯一一四四の三角點のあるもので、明見村に屬するものである。それから鳥打峠を新版圖で『鳥居地峠』と記してあるのは嗤ふ可き誤で、大

方測量師が東北地方の人でもあつた事から起つた語であらう。郡内辯は幾分訛りがあつても、ウチをキヂとは發音しない。忍草の村の西南端近くから北に向つて越す峠は『甲斐國志』にもある平山峠である。

忍野村役場の位置變更、學校の記入は適當の處置である。又忍草に寺院の位置を示した記號の入つたことも賛成である。序に申添へ置くが、この村の鎮守諏訪神社は名こそないが位置は新舊兩圖共明記してあるが、この境内のイチキの巨樹は慥に一覽の價值がある。

丹澤山塊に屬する一峯で甲相駿の境に立つ三國山には、『三國嶽』の名が記入された。それと共に明神峠の一部に『三國峠』の名のあつたのが削除されたのは蓋し適當の措置であらう。

甲相界の名峯コモツルシ菰釣に名が記入されたのも嬉しいことである。小山から世附に越す峠には『世附峠』の名が加へられた。同じ峠道の一路で、三ノ窪サンノクサを経て廣河原に越す路も明示され、廣河原の地名を

初め、大棚、水ノ木の名や、小徑の記入も感謝に値する。序に山伏峠からビリ澤を通つて水ノ木に通ず徑も記入されたら更に申分があるまい。大棚澤の上流から、夕日當りといふを越して、平野に出る路が、この新版圖のは少し腑に落ち兼ねるが、私はこの路は唯一度しか通行しないので、今議論する丈の知識がない。

小山町の附近も大分改訂されて、便利になつたが、何故か野澤川の左岸から、中島を経由せずに藤曲に通ずる道が記入してない。それと共に、餘白が少なくなつた故か、落合といふ地名が舊版から削除されたのは遺憾である。然し北郷村の大御神に振假名を施されたのは周到な用意である。これをオホミカと讀むことは、普通には鳥渡思ひ付かないことである。現に高頭雜學博士の『日本山嶽志』五一五頁にも、オホミカミとルビが附けてある。

○赤石荒川其の他に就いて

前澤 政雄

山岳十九年三號の雜錄、地名の變遷欄(六八頁)『赤石山脈の聖岳は、普通ヒジリ岳と讀まれる。會員前澤氏の説に、それは誤讀であつて、セイ岳と讀む可きものだといふ云々』の記事を見て、それ以前からも、此地方の山名に就いて、確實な資料を得ておきたいとは心がけて居たが、遺憾ながら、此セイダケに就いては未だ其れが得られない。もしの間、といつても何時と定めづきやうも無いが、疑問としておくより仕方がない。

此機會に其の近傍幾つかの山名に就いて書いておきたい。

一、赤石岳

今でも左様だが、古くから、『タケ』で通じて居た。之は何處にも例のある事である。其れが、小澁川が其の支流小河内川(釜澤川)の小谷と呼ばれるに對して、大谷又は本谷といはれた事から、

其の奥にそゝる今の赤石岳を、本谷の岳、大谷の岳とも呼ばれ、更に又釜澤^{カサヘダ}岳の名さへあつた。尙之に加へて他地方人の稱呼、大河原邑の方を意味して大河原^{オホカハラ}の岳^{タケ}(寶曆六年坂本運四郎の木曾駒ヶ岳より遠見の記事)がある。

それから明治十二年八月、内務省地理局の測量方として梨羽晴起、寺澤正明二氏他人夫十五六名の登山があり、同十四年七月測量方、巳和庄助、荒木、吉田(名不明)三氏の他人夫七八名が登つた事がある。

越えて同十六年エドモンド、ナウマン氏が大河原口より登山、其の調査の末、赤石スフェノイドの名が用ひられ、同十八年故原田博士(維四郎)に赤石ゲビルゲと記され、廿五年ウラルター、ウエストン氏の登攀から、同廿九年には同氏の著日本アルプスによつて世界的の名となつたのである。ウエストン氏登攀當時の逸話も一二耳底に残つて居る。

併し、赤石の名が多くの人を引きつけるやうになつたのは、四十二年以後のこと、此岳登りの

足がかり小澁湯の宿帳に、同年七月廿八日行先地飯島として名を連ねた、小島久太、高野鷹藏、高頭式、三枝威之助、中村清太郎、渡邊權一の諸君の力に負ふところが多い。後で氣がついたことだが、故荻野音松君は四十年の八月四日午後六時と到着日時が自記してあつた。私達一行五名はそれから三日おくれて七日此湯を足だまりにしたのであつた。

二、小河内岳

之には前にも記した小河内川の奥にある關係から、コガウチダケが勝を占めたいが、此小河内川も小谷^{コガニ}といひ、或は釜澤川とも呼ぶのに因んでカマサハダケ、コダニノタケの名もあつた。飯田藩儒者大藏謙齋(天保十五年歿八十八)の『登釜澤嶽』の記事は此岳最古の登山記である。尙又、天狗が棲んで居るとの傳説からテンゴ山の名も存する。

三、荒川岳

赤石近傍の山名中、今不定の位置に在るのは、惡澤と呼ばれ、東岳と呼ばれ、大河原地方人の捨

てかねて居る荒川三山の一族である。之に就いては是非とも山岳（五年ノ一）の小島、高野君達の記事を引用しなければならぬ。

『前略。これより愈々惡澤岳の斜面にかゝる。甚だしき急斜面にして犬牙の如き巨岩多し、少しく南東の山腹を迂回して、八時南方の一角に達す。四邊は所謂御花畑にして高山植物を以て埋まり、長之助草、色丹草、黒百合、信濃金梅、白山一華等を見る。附近には創立せる巨岩多く皆赤褐色を帶ぶ。北面して又高山植物亂開の斜面を登る。同一山にして昨は雪田の高山植物が固く芽ぐめるのみなるに比べて、表裏兩面の變化に驚かれたり。八時三十分惡澤岳頂上に達す。白木造りの小祠三つ俣松猥藉せる岩塊の間に鎮座ましませり。中央は天照太神、左右は諸冊二神を祭れるもの、如く、岩角には青錆びたる鐵の御幣を立て、附近には參拜者の殘行きたる木札の散亂せるを見る。間々田代川の伐採の爲め入込み居る工夫等の登拜するものと見えたり。祠中には何も無けれど、木札には荒川大明神と書せるものあり。三角標無し。

頂上は狭く、西北方に比較的急斜をなせども、東南方は傾斜稍緩にて、先刻一行の登りたる南方の一角との間に小平地をなせり。豫め用意したる標木惡澤岳と書せるを社側に立つ。これ昨日魚無河内にて人夫に切らしめたる杭に携へる所のペンキを以て書けるものなり。猶千枚澤岳と書ける標木をも携へ來りしが、嚴密に千枚澤の頭といへば、ここの東南角なる遙に低き三

角標を有する一隆起に過ぎず。然れども宗平に依るも昨夜の辻良一によるも、千枚澤岳、惡澤岳何れも他の別名として用ひらるゝ如くなれば、今最高點を惡澤岳と定め、千枚澤岳の標木は之を東方に距る六七間の一岩塊の上に樹て置きたり。中略。眺望は露營地と大差なし。唯茲よりは西河内方面の岳の全容を望むを得べく、明らかに二箇の高峯略東西に連亘するを見る。近き方高く三等三角標立てり。依て一行は之を以て宗平其他に糺したるも確かなる名稱無きが如きを以て東方の高き峯に「魚無河内岳」西方の峯に「西河内岳」の名を命じたり。これこの邊の山名は多くその澤谷等の名を以て呼び居るが故に、その習慣に従ひ各それに近き谷の名を探りたるに據る。又本山の北東斜面に池ありと聞きしも探らざりき』後略。

命名の由來は之で判明する。即ち現五萬分の一地形圖赤石號、東嶽（三一四六）が惡澤岳、荒川岳（三〇八三・二）が魚無河内、その西南四十米ばかり離れたところの突起が西河内岳といふわけである。

併し此無名と見られた山々には、それより以前名を持つ迄に人に親しんで居た。それは何時頃よりかは古いところは判明しないが、明治十九年より以前から存在して居た事だけはわかつてゐる。長野縣下伊那郡河野村字堀越に原丈吉といふ人が

あつた。十二歳の時から信を起して行を積み、長じて後此山塊に登つたのである。同氏の書き遺した荒川岳開闢記に、

『明治十八年夏頃三七二十一日ノ斷食ノ荒行致シケル行中ニ於テ、當三峰神社鎮座日本武尊訓エニテ、往古赤石嶽ト申ス山ハ荒川嶽ナリ。此ノ山開山スル事速カニ訓導致ストノ御告有之、難有存ジ大神ノ教エヲ受ケ、開闢スルハ聊モ開山スベシト彌精進票濟致シ、既ニ于時明治十九年八月一日ニ大鹿村役場エ出願ニ及ビ、右嶽ヲ開山仕度ト申シ何分共御許可被下度ト御届候所、右大鹿村戸長申ニ、何レ此嶽ヲ開キ度トハ思候得共、今ニ至ル開山致ス者無之候所、貴殿御開闢致スベシト、從是御願何レ下向ノ節御禮申トテ役場ヲ出歸宅致シ、家内ノ者ヲ初メ近所ノ諸君方ヘ、大鹿村役場エ出願致シ候所、早速御許シニ預リ、彌登山ハ八月六日ト定メ、行ヲ重ネ扱ハ六日至リ、身ニハ白キ衣服ニテ一丈二尺ノ寶カンヲ付、加多ヨリ脇掛ニ白キ福サヲ掛け、右ヨリ左エ胸鈴ヲ掛、五尺六寸八分ノ金剛杖ヲ持テ、腰ニハ尺八寸ノ惡魔嵐雲切拂ノ劔ヲ刺シ右ノフクサニツバ粉ヲ八合斗リ入、表丹ニ神水ヲ入、右次第ニテ出立セン。弟子共外諸君方見送トテ出頭有之、先ハ隨分御身大切ニテ御開山被成可御歸宅ヲ待居リ候ト皆々言フアケ、扱ハ諸君方ニ深ク御心配被下難有次第也。私長行中開山歸宅迄ハ家内ノ者宜敷願上族。先ハ歸宅ノ節御禮可申上ト出立シテ、宇唐松峠登リ清水横手ニテ休ミ、從是大河原和合エ降り、市場、澤戸、上藏ヲ通り、釜澤耕地エ參リシ

所、其御地ノ諸君五六人御立會シ場所エ、私々儀ハ河野村字堀越ノ者ニテ此荒川嶽ヲ開闢仕度ト心願ニテ出頭致シタル者ニテ、御當地ニハ三正坊ト申社有ト聞シカ、此社ヲ晝夜御拜借願度ト申セバ、其諸君此社ニハ戸締モナシ、幸ヒ尹良社ニハ戸締リモ鋪物モ有ル故、此社ニ休ムベシト云被下是ハ難有次第也、扱ハ晝宿御拜借仕ルベシト、其夜ハ大神エ拜禮仕リ休ミ居ル所エ、午前二時頃ニテ人聲スルニ、目ヲ明キ、此雨降ニ夜中ニ人聲トハ不思議也ト思ウ所エ三四名來リ、今夜此社エ行人ヲ止メタル事皆々不腹ニテ、行人殿此場ヲ立テ何レエトモ行クベシト云フ、私儀ハ元ヨリ此社ヲ願タルニアラズ、夜分ニテモ苦シカラズト云テ此社ヲ早立シ釜澤湯場エト心差シ、道中早夜明ケル。從是リ湯場ニ着、小澁川ニ付テ四十八瀬ノ川ヲ越渡リ、奥エ入、廣キ川原ニ山ノ麓ニ休ミテ山エ登リ、凡五合目程登リテ北ノ方ヲ見レバ、天狗嶽速ニ見エルヤ、六七合目位登リテ見レバ礫礫タル被ノ山ナリ。八九合目登リテ上ヲ見レバ、大石ニ腰ヲ打掛六十餘リトモ見エル白髪ニテ白衣服ヲ付ケ劔ヲ持チタル老人壹人居リ、扱ハ此嶽エ人間ノ登リタル事無之ニテ此老人ノ居ルハ不思議也ト、老人ノ前ニ進行止立シ、眞平御免被下、私シ儀ハ當郡下河野村堀越敬神大社長訓導山開正位原丈吉ト申者ニテ此嶽ヲ開闢仕度精進ヲ定メ登山致シタル所、御貴殿ハ何レノ御方ナルヤト問エバ、私ハ少シ用事在テ此所ニ休居トテ姓名ヲ云ズ。貴殿登山ニテ此嶽ヲ開山トハヨク精進票濟シ登リタルヤ、此嶽ノ様子ハ聞來ルヤ。不案ナレバ傳言悉ク訓導致スベシト在、私儀ハ初メテノ登山ニテ嶽ノ様子心得ズト申セハ、老人扱

ハ從是訓導可致シ、西ハ信州天龍川ハ落ル也、北東ハ駿州伊川ニテ末ニ大伊川エ落ル也。南ハ遠州エ落ル也。此山嶺キ三ヶ國エ筑ヲナシ、此ノ平ハ人民ノ申ニハ大小持ト云ガ、高天ヶ原ト申シ、宗良親王殿下御休被遊タル場所テ在ル。是ハ劍ヶ峯、本嶽ナリ。三峯嶽ニ登リテ訓導スベシトテ登リ、頂上ニテ北ノ方ニ凡ハ畝歩餘ノ池ガ有リ此池ノ水青吹立チ、夜ノ丑ノ刻水玉吹立事不思議也。深キ事一點塵垢無、亦東向キタル大瀧在凡百五十間餘、水ハ皆小豆ノ如ク玉ニテ落ル。此嶽ハ嵐烈シクテ其時天狗來ル事有、今日ハ改晴ニテ富士山モ見ユ。阿禮ハ胞衣山、天照皇大神御誕生ナサレタル山也。此ハ胸ヶ嶽、其先エ見エルハ木曾ノ御嶽次ニ乘倉嶽、阿レハ賀加ノ白山、是ハ越中立山、是ハ立科山、煙ノ立ルハ淺間山、其先エ見エルハ越後國明光山、是ハ上野國白根山、是ハハヶ嶽、是ハ甲州駒嶽、御嶽山、國々嶽々皆見エル也ト訓導有之、承知仕マシタ。御貴殿ハ何レノ御方ニ候ヤ、後日ニ御面會致シ御厚禮申上度ト心得御性名ヲ御名ノリ被下ハ難有ト願ケレバ、私老ハ其元而洲ノ瀧ニ於テ行中ニ訓導シタル者ニ候ト云テ、御身解消ガ如ク、喜徳トヤ、扱ハ不思議ト思エ共、行中ニ訓導シタルトハ三峯神社鎮座シ賜布日本武尊也。後日參考アラン事ヲ一言ス。(原文聊字の局を具に作る)

明治十九年秋

堀本 丈吉

如何はしい文字は驅使してあるが、大要は之に依つて推察出来る。

此行を終つてから岳の様子は知られて來たし、

明治廿二年八月以降は年々、三峯講社の人々が六根清淨を唱へながら鈴の音を幽谷に響かせた。多い時には随分登つたものと見え、今も健在な八十餘歳の釜村所平(小澁湯主人)爺さんは、

『死んだ婆々さのいつ話だが、婆々さの若い時分向ふ山で見て居ると、あの横手(釜澤横手)を三峯衆が上藏からつゞいて、ひつた〜と並んで來たといつたが、いつ時分だか、覺えはねえが、婆々さの嫁つて來たのは私の廿七の時だから、その近所の事だがハツハ、ハ、』

明治三十四年の九月、其のすぢへ『山祠存置并に遙拜事務所建築許可願』といふ書附を此社長はじめ代表者が呈出した事があるが、その文中に『此敬神講社信徒現今三千人餘御座候』とある。

之より前、その岳々の祭神が定められたので、開闢十三年即ち明治三十一年の事で、奉遷された神々は(原文の儘)

高天原 保食神

鯉玉大神

八幡大神 明治天皇祭揚所

荒川嶽

天之御中主神 天照皇大神

高御產巢日神 國常立神

神產巢日神 伊弉諾神伊弉冊神

前ヶ嶽

日本武神

大山住神

天手力男神

中 嶽

天見屋根神

級長津彦神

級長戸部神

劔 峯

建御名方富神

木花開耶姫神

三峯嶽

素盞鳴大神

神武天皇

大己貴神

少彥名神

神明瀧

瀨織津姫神

大日不動尊

青水池

一岐島姫神

五龍王大神

此時は、丈吉氏の代理世話人として、松尾諏訪吉氏が登つたのである。

此處にあらはれた高天原はダイシヤウジダヒラ

の一部、荒川嶽、前ヶ嶽（今まへだけといふ）中嶽もその儘ながら、遺れられようとしてゐるのは劔峯（今の小赤石）、三峯嶽（赤石岳）それに荒川岳に近い神明瀧に青水池である。

それから、傳手に記したいのは小湫川の上流いよく森林にとりつかうとするところから二岐する右がフツ川、左がアラ川キド川の合流となるがアラ川は其の名の通り三〇八三・二の西面斷崖の裾から水を集めるので、降雨の際は濁り易いし、早魃となれば水も殆ど絶えるけれど、キド川はそのさしひのないところから井戸川の名を得たものである。

また、フツ川は、よく福川の字が宛てられるが之は古川の方が當つてゐる。それは、此の川も水絶えず、あれる事も少なく石には常に苔をつけて居るのでフル川即ち古川が訛つたものだといふのである。

四、中 盛 岳

尙、赤石山脈の大澤岳（二八一九・四）と兎岳（二七九九・三）との間の隆起二八〇六の點は丸山とも

いつた。併しそれは同じ續きの西北方二三七三・五の丸山と紛らはしいから、私は便宜上二八〇六の方を丸岳マルダケ、或は大澤丸岳と假稱したのが一部には襲用せられたらしいけれど、それよりもナカモリ岳といふ名があつたのだから此の方を通稱したい。其の形真中がボツクリ盛りあがつたところから得たものと思つて中盛岳ナカモリダケの漢字を宛てる事にした。

五、鹽見岳

も一つ鹽見岳(三〇四六・九)に就いては、昔建御名方命が此の岳に登られて、鹽あるところを探されたといふ傳説と共に残された名で、大鹿村鹿鹽の舊家大久保源藏(弟完司と共に勤王の志篤かつた人、明治卅五年十月七十八歳歿)氏の手記にも此の事がある。之を他方から眺めたものには坂本運四郎の記事にそれと思はれる鹿鹽カシホの岳ダケもあつたに違ひないが、地元の方の鹽見岳シホミダケも手輕に棄てかねる。

更に前に疑問として残した聖岳セイダケ之が多くヒジリダケと呼ばれるやうになつたが、此の山脈中餘り

にかけ離れ過ぎた名であるところから、私は之を疑問としてゐる。その疑問とする以前にセイダケの名を聞いて居た。それで、以前上京の際、武田さんに御目にかゝつた時そんなお話をしたのであつた。

之に就いて、故前澤市次郎は、同岳東麓を大井川に注ぐ聖澤セイザをセイザセイザと呼んで居たので、何のいはれと問ふ暇もなく、セイと呼ばれる其の一致が凡てを肯定してしまつたので、重ねてセイの出所迄もと追求する心持はなかつたのである。

之と附帶して聖岳セイダケに近く遠山川に入る西澤セイザをセイザセイザと呼びはせぬかとの疑ひもあつたが、之は全くニシザニシザに違ひないが、傳手にあげれば此の聖岳セイダケには西澤セイザの古名があつたから、之を音訓とり混ぜにセイザセイザハダケ、それがセイダケとやうになつたのかも知れないが、今のところ確たるものが捕捉されないのは遺憾である。

以上を、もう少し根據のあるものにして報告したかつたので、二三それかと思ふ目星をつけて問合はせをしたり、古文獻をとあさつたりしたが、三

峯講に關する資料以外新らしく入手する事は出来なかつた。該資料を一見する事の出来たのは、通稱松尾諏訪吉（入夫仲間では御嶽^{オタケ}といつた）の丹念と松下叻村君のおかげであるが、其の松尾氏ももはや物故してしまつたから、又一つ此の地方の活き字引をなくしたわけである。

○「御坂山塊」に就ての補遺

沼井鐵太郎

此は拙稿「御坂山塊」〔山岳〕十八の二、大正十三年十二月發行、一七—三八頁に就て誤謬を正し、且其後の山行で見聞した事柄を補ひとしたものである。

前文補遺

第一に「山岳」十八年の三號六六頁及六七頁（武田久吉氏の記文中）の記載を拜見すると、どうやら私の「御坂山塊」の初めに舉げた參考書の一つに就ての話らしい。私どもは、いつもの武田氏に似合はぬ御遠慮勝ちな態度に驚いた次第であるが、其は何か事情のある事であらう。今は只、私

の舉げた其參考書に就ては更に武田氏の記文を参照する必要ある事を言つて置く丈にする。従つて私の「御坂山塊」の記事中、二六頁三行目括弧内の事も讀者は考慮を要するかも知れない。

又、同記事中一九頁六行から七行に渡つて書いた事は訂正をすべきである。即ち三峠山開山の由來は「冬の三ッ峠山」〔武田久吉氏、東洋學藝雜誌第三十九卷第二冊、大正十一年二月五日發行、一五—二四頁〕なる一文に發表があるさうで、私は未だ其文を読む機會を得られないが、會員澤田武太郎氏よりの御注意によつて、取敢えず茲に私の見落しをおわびする。實は前々から感じてゐた山岳文獻の涉獵といふ事が、今度は適切に原稿を書く者の頭に響いて來た。然し此は個人の力では専門的ならざる限り先づ到底出来ない事で、此際私は是非山岳記事の抄録欄を「山岳」に設けて、協力便宜を圖りたいものだと思ふ。

同上記事中二〇頁五行目に「下つた所は達磨石から右の支流數丁の上流で」のから右のとあるは紛らひしい故「の東方」と訂正する。

又同じ頁の十二行目、「藪も繼續的であるし」は斷續的と直す。

又、二五頁終から三行目の「之は嵯峨ヶ嶽と」の之は「元」の字の誤まりである。

二七頁終から七行目乃至六行目にかけて「下るにれて」は「下るにつれて」の誤まり。

又、二八頁に記した屏風ヶ岩は大石方面では破風（ハフ）と稱してゐるらしい事を三峠保勝會の前田氏に聞いた。

三〇頁最後の行に「大塚氏によると其後此下り道はよくなつたらしい」としてあるが、大正十四年春私の實驗した所では北尾根には何等道らしいものは作つてなかつた。

三一頁十四行目に「尾根が少し右手に……」は少し曖昧だから「一隆起を越え尾根が右手に……」と直す。

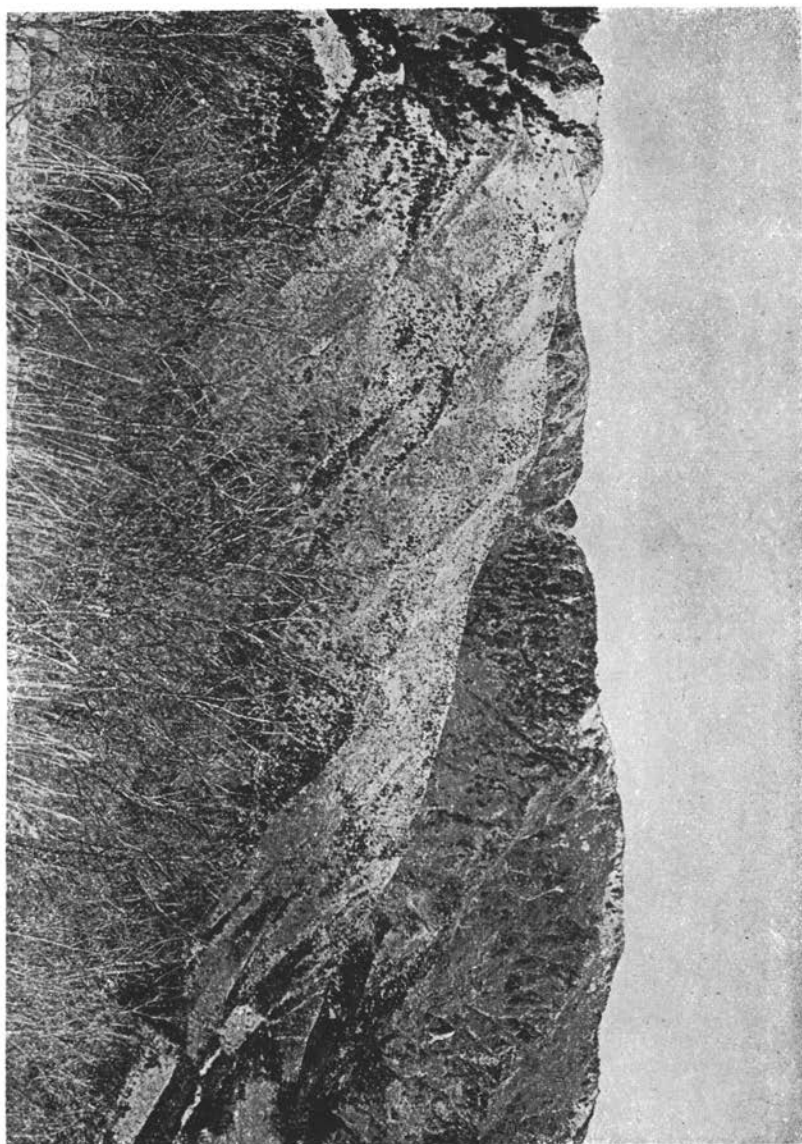
同頁十五——十六行目、「四十度近くの急坂を攀ぢると尾根は再び左手に曲る」は前同様曖昧だから「四十度近くの急斜面を少し右左りして攀ぢ、小隆起を越えて又登れば、尾根は再び左手に曲

る」と直す。

三二頁十行目「笹ヶ峠」は「笹ヶ峰」と直す。

三三頁十七行から十九行にかけて書いた事は暫く抹殺してもらひたい。最近十二ヶ岳へ行つて西湖村の人に聞いた所では、此澤の名は別に無いが澤筋の一帶はクワルビといふさうで、十二ヶ岳鬼ヶ岳間の尾根近くの鑛山の廢鑛には今行く道は無い。地形圖に示した道はクワルビの入りに作畑や山仕事に行く者の爲の道であるらしい。詳細は別稿「十二ヶ岳と鬼ヶ岳」に就て見られたい。

又、同頁十九——二十行に十二ヶ岳麓の村々には安眠し得る好い宿屋は無いと書いたが、實は長濱に三浦屋といふ、我々にしては上等な宿屋があつたのだ。此家は街道から奥に一寸ひつこんでゐるので此迄分らなかつたわけだ。なほ西ノ湖村方面で、鳥居坂新道（別稿参照）の西端に面して建てられた宿屋は、大正十四年五月中旬では未だ開店してゐなかつたが、湖岸の位置は山黨にとつても、一般旅客に向つても至極好適の場所である事を注意して置く。



影撮氏一成口山

(米五六六—「ケツミ」謂所の氏井沼は方右)む梁々脈主の地山坂御に東々北りよ山和改

三四頁一行目最後の「苦い経験を待つて」は「苦い経験を持つて」の誤まり。

又、三八頁十一行目「フトヲの北端西峠との接合點」は少し紛らひしいから、「北端で」とでの字を入れる。

山嶺道路と御坂山塊歩きの計畫

三峠山から尾根傳ひに節刀、十二ヶ岳の方迄道が開かれた事は既に記して置いた。此は山梨縣でやつた山嶺道路で、山塊の主な山稜は皆通過してゐるのである。即ち鬼からなほ西して王岳を経て精進の上迄行く。十二ヶ岳の東の尖峰の連續した山稜も道らしい道がついた。段和山まで東西に道が越えた。

其故、私の書いた御坂山塊並に其内に紹介した大塚氏の十二ヶ岳東山稜の行は、特に時間と努力の上に於て甚だしき改削を加へなければならなくなつた。私は鬼、筋刀、十二ヶ岳の一群を最近訪ねた丈なので、其他の所は詳細に言ふ事は出来な

いが、私の経験した部分でも著しくらくになつた事實から見て、最早御坂山塊の本尾根は不便なヤ

ブ山ではなく、高みの散歩道になつてしまつたと稱するも過言ではあるまいと思ふ。

私が先づおすゝめしたい計畫は御坂山塊へ最初の旅が春ならば、下暮地から三峠山に登つて、巢鷹山から北に向ひ、本社ヶ丸を附け加へて清八峠から奥野澤を下り笹子驛に出るがよい。又秋ならば、三峠山からフトヲを経て吉田か上暮地に下りるがよい。いづれにせよ、最初に三峠山に登つて置く。

第二回の旅は奥野澤から清八峠に出て西進するか、或は女坂を越え藤野木を経て御坂峠に到り（或は又吉田から船津、河口と歩いて御坂峠へ出るも可）、之より黒岳に登つて大石峠に到り、北節刀へ行かずに大淵澤に下り、長濱に行つて泊る。其二日目は鳥居坂から笹ヶ峰に登つて十二ヶ岳本山に向ひ、長驅精進に出て泊る。三日目は甲府に出るのも平凡だから青木ヶ原、西湖、河口湖を連ねた富士裾野の旅を歩き、餘裕があつたら段和山にも登つて、馬車又は自動車で吉田に向ひ歸京する。

右の様にすれば前後二回でこの山塊を面白く見

る事が出来やう。更に第三回は神座山（シンザサン）の釋迦ヶ岳に一日秋晴れの登山をする事である。此方面の山嶺道路は不明であるが、若しついてゐるとすれば黒岳、御坂峠と結んで一日ですます事も容易に出来る。先に書き洩らしたが、第二回の旅で大石峠北節刀の間を省いたのは此處は展望が大體東面に限られてゐて比較的興がうすいからだ。

第四回以後の旅は最早勝手でよい。又、時季を變へて同じ場所へ行くのも中々面白い。冬の登山地として此山塊が恰好なる事は既に慧眼なる武田久吉氏の教へる所であつた。

御坂山塊の精髓ともいふべきは、前にも述べた如く東の方三峠山と、西の方十二ヶ岳、鬼ヶ岳の一群との二者である。そして黒岳は盟主らしい山貌から、又釋迦ヶ岳は聳立した展望臺として、北節刀は其北面の深い森林を以て、共に捨て難い所がある、此等を中心にした旅は、たしかに今や心安く樂しまれる事であらう。多くの人が行き過ぎる事であらう。けれど道路と標木石以外には、人の何物も尾根の上に停つてはならない。山はどこ

までも寂しくして置かなければならない。

附記、一。

前記山歩きの計畫は展望を主とした場合の計畫であつて、近頃私どもが試みた様な岩山登攀や、澤筋の溯行に就ての計畫は自ら別途特殊のものである。そしてさういふ行き方は其自身の途に於て山體を最も好く理解し得る方法であり、且飽き易いヤブ山の旅から新生面を開き得るものである。又、私どもは低山に於てすらかういふ取殘された場所に原始の匂を嗅ぐ事が出来るのである。

附記、二。

最近武田久吉氏は黒岳の北鞍部（私が新田乗越（シンデン）と假稱したもの、新田から見れば芦川乗越といふも可であらう）から新田の方へ澤を下られた。其澤は富士の山腹裾野によく見る様な性質のものであつたといふ。

附記、三。

地名の發音は厄介なもので、同じ字でも地方によつて違ふから注意を要する。最近河口湖畔の小立村で聞いた所では、船津はフナツと濁らないで發音し、其北の淺川はアザガハと濁つて發音するのが正しいさうである。（以上大正十四年七月末稿）

○富士山雜記

國府精一

日頃富士に關する圖書を漁りしが、近頃新しく富士根元記（以下根元記と書す）及び富士山道知邊（以下道知邊と書す）と云ふ單行本各壹冊を得た。前者は東都高田興清撰文化二年即ち今より百二十二年前の著で、後者は松園梅彦輯玉蘭齋貞秀畫とあり、萬延元年の記載あれば文久年間の著であらう。二書中記する所私としては珍しき點尠ならず、依て從來考へたる事どもを加へ、二書中の興味多しと信ずるものを抜き左の雜談數項を綴りて御參考に供した。若し珍しと同感さるゝ方あらば勿論、更に叱正を得ば幸である。但し後者に關しては「さんわう」なる人が山岳第六年第二號に富士山の昔の圖畫及び書籍と題して書かれた文中南葵文庫にて此書を見たと言はれ、且肝心の富士山は北の吉田口丈でそれもあまり細かくはないと失望されて居る。同氏の云はるゝ如く單純の物には相違ないけれども所々面白き所もあればかくは物した。

（一）富士山の起因に就て

富士山の出現は所謂地質時代の沖積世にて蓋し數十萬年以前の事なれば、天孫人種入國の時は富士は既に今日の秀麗なる姿を示し居りしものなることは何人も疑はざる所である、然し昔は孝安天

皇の九十二年に湧出したとか、孝靈天皇の御代に一夜の内に地より湧き出したとか云ふことが信じられてゐたらしい。然るに此根元記には『神代よりありけるを、ものに皇代となりて湧出でし山のよしひへるは僻説にや』と明に之を否定して居る、尤も『富士の南山、薩摩の三の島、八丈島の富士などが出現せしをおもへば、絶えて有まじき説とも云消難し』と時代には異論を挟みつゝも、山の時に出現することあるは認めて居る。而して異論の根據が萬葉集山部赤人の歌に、天地之分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺と詠たればとせるは一寸よき思ひ付きである。秋里離島も東海道名所圖會に於て、人皇時代の富士出現説は、都良香の富士山記に見えざれば正説に非ずと明斷してゐる。山部赤人又は都良香（陽成帝元慶時代の人）等の時代には、神社考の所謂人皇時代の出現説は未だ餘り行はれなかつたかとも思はれるが、兎に角此等の人々は富士山出現の神話的傳説に誤られなかつたやうだ。但し根元記の著者は新島新山の出現の實を見て、臆氣ながらも火山の活動

を認め、遠き過去の富士山出現の時の有様を思ひ浮べたらしいのも面白い。

(二)富士の諸名稱に就て

神社考に郡名を取つて富士山と云ふとあれど果して然りや否や疑はしい。富士の語源はアイヌ語に遡るべく更に研究の要あるであらうが、茲には唯其別稱のみに就て説いて見たい。不二、不盡は別に不思議はないが、根元記は駿河風土記を引いて分地、粉陣、富智、風土、風詩、福智などを擧げてゐる。又蓬萊山、芙蓉峯、君子山、甲斐がね、八葉の峯などは、我々も時々聞く所なるが、根元記には萬葉集十四の駿河歌に、伊豆の高嶺の鳴澤とあるを引き伊豆の高嶺なる名稱を擧げてゐる。

(但し直にこれは伊豆にあらず嚴なりと論定せり。)又同記は更に秘藏抄下巻にありとて、富士の十名を列記してゐる。即ち藤嶽、鳴澤高根、常盤山、塵山、二十山、三重山、新山、見出山、三上山、神路山であるが、多くは未だ見聞したことの無いもので、中には他山と混同せるに非ずやと思はれるものもある。次に又道知邊には穀聚山と云

ふ珍しい名が掲げてある。此は神社考の孝安天皇九十二年六月、不二山湧出、始雲霞飛來如穀聚とあるによると斷つてある。(又此山の形平地に穀を盛りたるが如き故に、穀を量るになぞらへて凡そ一里を一合とも云ふとある。)矢張此山の名は富士、不二、不盡又は芙蓉峯位にとどめておき度く思ふ。(日本山嶽志參照)

(三)神として山靈崇拜

高山火山が神として畏敬せらるるは、原始時代の常例である、富士山も亦其例に洩れず。此山に祀らるゝ淺間神社は、もとゝゝ神殿と云ふものなく、垂仁天皇の時始めて山麓に御社を建てられしも、唯拜殿のみにして神殿即ち本社なるものなし、是れ山體夫自身が神として祭られし證據と見られる。その神殿の備はつたのは實に清和天皇の時(大噴火のありし時)なりしとの事である。道知邊の云ふ所によれば、吉田口淺間神社境内正面の大鳥居の額には、三國第一山とありとし、且つ當地にありと雖も是れは不二山の鳥居なりと態々辨じてある、富士山と淺間神社とが全く別物なら

ば斯く辨ずるの必要もあるが、富士山即ち淺間神社なりとすれば、此處にこの鳥居あるも怪しむに足らず、殊に富士淺間神社と云ふのを見て、二者同一のものなる事明である。そして『富士登山の栞』にも『淺間神社は元社殿なく、富士山を神體として齋き奉りしものなるが、人皇第七代孝靈天皇の御代、頂上噴火して鳴動止まず、人民恐れて四方に逃散し、國土痛く荒果しかば、人皇第十一代垂仁天皇の御代に至り、始めて社殿を建て之を祭祀せり、是官幣大社富士淺間神社の創始也』とあり、又『昔は別に神殿と云ふものなく、御内院（噴火口）を神靈の鎮まり給ふ處とす』とある。（共に別に典據を示さざるも、據る所あるものと思はる。）又三代實錄貞觀六年五月の條にも駿河國言、富士郡正三位淺間大神大火」と書いてある。道知邊の吉田口二合目御室淺間社の條に『當社は貞觀七年十二月祀る所にて山中最初の基立なる富士の本社なり』とし（是貞觀六年の大噴火の翌年に當り噴火の神怒を恐れて祀りしものならん。）又其頂上内院の條に『之を淺間大菩薩と稱し、詣人賽錢

を坎中に投入すとある。此等の淺間神社が富士山と同體なるを語るのみならず、又噴火が威靈と密接の關係あることを語るもので、神靈は噴火口内に鎮座ありとするもので、火山を神靈として畏敬する世界各地の例と相通じてゐる。（布哇キラウエア噴火口に火山神ペレありとする信仰と一致する。）而して一方に淺間神社の祭神は木花開耶姬なりとあるが、同神は大山祇命（即ち三島神社祭神）の御女にして瓊々杵尊の妃でゐらせられる、即ち富士淺間神社と木花開耶姬とを祭神とするものと云へやう。

（四）富士山の領有争

測量の術發達せず、地理的知識の不充分なる時代には、山の境域を定むることは困難であつたらうし、又名山領有の名譽に均霑しようとして、富士領有を主張する國が多かつたのも怪しむに足りない。即ち駿河甲斐の外に伊豆相模から遠江までがこれに加はつてゐた。根元記は駿河、甲斐、相模、伊豆を主張し、（文晁の名山圖會は此四個國説に従へり。）東遊行囊抄は駿、遠、甲の説を僻事と

して退けて居る。普通には、駿、甲、豆の三國説が多數のやうであつた。然るに道知邊には明に駿甲二國のみ之を領有するとある、而して二國間には其何れが山の主要部分を領有せるかに就て可成論争されたやうで、古來駿河の富士とあるに對し甲州人先づ反對の聲を揚げ、江戸人は吉田口より登る爲めか多くは甲斐説に傾き、道知邊も矢張甲斐説で『當山を古より駿河の富士と云ひなして萬葉集山邊赤人の歌其他國史及都良香の不二山記にも皆駿河國と記せるは、山の表の向きたるを以て言ふなるべし、地の理に據つて争ふ時は、山の東南加古阪より西北裂石(割石)まで裾野十三里の間は、皆甲斐國の地なり、故に天正五年勝頼朝臣の祈願書に、日本に山あり富士と名づく、三州に跨ると雖も過半は吾甲陽の地なりと云ひ、又峽中記行に其實は則ち山の本州(甲斐)にあるもの六の三、駿を二とし、豆を一とす、古人齒奔の甚だしき以て痛恨せしむべしなどいへるは、本州の抑鬱を霽す愉快の説と云ふべし』と同情して居る。

但し今日では測量も完全に行はれ、境界も確定

し其大部分は駿河に入り、殊に主要なる頂上が駿河に屬し居り、全山の全面積約八百三十二平方糎中二百九十六平方糎が甲州に屬すること山梨縣發行の『富士山の自然界』も認めて居る、さうすれば矢張駿河の富士山と唱ふるを至當とする。

(五)富士の高さ及形體に關する先人の説

根元記は上吉田村の大鳥居より絶頂迄三百五十七町十七間ありとし、道知邊は三百五十七町七間半とす。直立高距に就ては、根元記は塵塚物語に直に立つれば九十六町ありと云ひ、又九山八海解論とかには二萬五千六百尺なりと見ゆと記して居る。無論想像であらうが實際よりは著しく高く見積つたものであることが察せられる。山の形に就て根元記は伊勢物語、今昔物語を引き、鹽尻の様なりというてゐる、鹽尻とは鹽濱の砂堆の圓錐形をなせるを云ふ、又他書に富士を伏籠、薰籠ふんろうの如しと云へる由を掲げてある、俗説の摺鉢を伏せた形と云ふのとよく似てゐる。

(六)八峯八神八佛八湖八海的事

富士の頂は八峯に分れ、八葉の峯と云ひ、蓮華

に似たりと云はる、今順次に之に就て記して見た
い。

イ、八峯

道知邊は藥師岳、觀音岳、駒岳、文珠岳、劍
峯、馬背山、雷岳、釋迦岳の八を掲げ、天保初
年の富士見十三州輿地之全圖の富士山頂上圖に
は、藥師岳、不動岳、元經岳、觀音岳、文珠
岳、駒岳、劍峯、馬背山、雷嶽、釋迦岳の十峯
を示してゐる。今では久須志岳(藥師岳)、大日
岳(不動岳)、伊豆岳(元經岳)、成就岳(觀音
岳)、駒岳、三島岳(文珠岳)、淺間岳、劍峯、
白山岳(釋迦岳)の九峯を列舉し、其内大日岳
を除きて八峯とするやうである。しかし大日岳
は相當の高さもあるから、之は寧ろ八峯に算入
し、駒岳淺間岳二峯を除き、劍峯と白山岳との
間の雷嶽もしくは馬背山(上述天保年間の地圖
に示しあるものにて、最近の地圖には劍峯と三
島岳との間に單に馬背と云ふ所あり)を加へる
方穩當の様に思はる。

ロ、八神

道知邊には富士頂上に勸請されたる神とし
て、天照皇太神、熊野大權現、飯綱大權現、白
山大權現、日吉大權現、鹿島大明神、三島大明
神、箱根大權現等、大多數は山嶽關係の諸神の
名を掲げ、同順位に一ヶ嶽二峯三嶽四嶽五嶽、
六嶽七峯八嶽に鎮座せる如く記してゐる。但し
此八峯は三島岳、白山岳の外は今の何れの峯に
該當するやは不明である。

ハ、八佛

道知邊の擧ぐる所は、地藏、阿彌陀、(阿彌陀
原と云ふ所あり)、觀音、釋迦、彌勒、藥師、文
珠、大日如來で、各一の嶽より八の嶽までにそ
れ／＼祭られてあつたといふ。此等はイを參照
すれば大體孰れの峯を指すかを窺ひ得るが其順
序は入り亂れてゐる。

ニ、八湖(又八海とも云ふ但ホと區別する爲め湖
を採る)

根元記には山中湖、明見湖(下吉田の北明見
村にある小湖)、河口湖、西湖、精進湖、志比禮
湖(市川大門の東に當る山間の小湖)、本栖湖、

須戸湖(浮島沼)を數へ、山に近く富士の倒影を見るべきものとす、志比禮湖が果して富士の影を寫すや否や疑問である、此は後の考察に俟つ。

道知邊には富士の御手洗(御垂水を受くる)として八湖を數へ、上述のものより須戸の湖を除き、泉津湖と云ふのを加へてゐる。但し泉津湖とは吉田口中の茶屋の東八町の所にある湧水であるが、之を湖に數へるのは當を得ない。又志比禮湖は富士山北輪山の北傾斜の一隅にあつて、富士の御手洗を受けないから、御手洗を因縁とする八湖に數へることは穩當ではあるまい。これは寧ろ根元記の八湖の方が穩當であらう。但し無理に八の數に充てる嫌がある、

ホ、八海(外八海と云ふ)

道知邊に掲げてある。

一、伊勢國渡會郡二見海。二、近江國淺井郡竹生島(勿論琵琶湖のことなれど島を擧げたるは解しがたし)。三、相模國足柄郡箱根湖(芦湖)。四、信濃國諏訪郡諏訪湖。五、上野國群馬郡榛

名湖。六、下野國都賀郡日光湖(中禪寺湖なるべし)七、遠江國城東郡佐倉湖(濱名湖の事ならん)八、常陸國鹿嶋郡鹿嶋湖(霞浦外浦を指すか)。

(七)山役錢案内料馬駕籠賃高札等の事

道知邊の記する所に據れば、普通の登山ならば山役錢總計百二十二文を吉田御師に納めた、此は

不淨祓の料 三十二文

二合目役行者賽錢 十二文

金剛杖の料 八文

五合目 三十二文

九合目鳥居御橋 十四文

頂上藥師ヶ嶽 二十文

の合計である。種々の名目の下に賽錢を繰り取つたものらしいが、領主も冥加金を御師等に課したものか、頂上表大師堂別當は、年々錢二貫文太刀壹振袈裟壹掛を谷村の領主に納めたりと云ふ事である。猶ほ山内の役料案内料損料等の定を見ると

定

一、御山役料 百廿二文(前掲のもの)

一、御中道役料	金百疋
一、行衣御判料	百八文
一、綿入損料	百文
一、備餅	六十四文
一、辨當	四十八文
一、御山案内	四百文
御胎内廻四十八文増	
一、御中道案内	金一分ト二百文
一、御胎内案内	百文
一、御八海案内	金二朱二百文
一、鈴原迄馬一疋	二百四十八文
(吉田よりならん)	
但し胎内廻四十八文増	
一、同駕籠一挺	四百文 (同上)
但し胎内廻夜立百文増	
右者山内定例御知らせの爲如斯御座候	
六月	惣神官 年行司
又五合目以上止宿料としては	
一、四十八文	泊料
一、百十六文	飯

一、八十文	糝
一、六十四文	かゆ
一、二十四文	雜煮汁
一、十六文	辨當茶代
一、百四十八文	夜具損料
一、百文	布とん
一、二十四文	一膳めし
一、二十八文	赤飯
一、三十二文	大わらじ
一、二十四文	小わらじ
で相當に高價であつた。	
又谷村の馬、駕籠、賃錢の定は	
一、賃錢 四百文	馬一疋ニ付谷村より吉田村御師宅迄
一、同三百四十八文	馬十日市場村より同所まで
一、同二百七十二文	馬夏狩村より同所まで
一、同二百文	馬小沼村より同所まで
一、同二朱ト二百文	山駕籠壹挺ニ付き谷村より同所まで

一、同 五百 文 同小沼村より同所迄

右之通ニ御座候、以上。

右は六七兩月人馬稼方之者共、諸人々對し不
宜所業有レ之趣達ニ御聽、村々役人被ニ召出、御糺
の上賃錢取定、無レ謂過分之金錢不ニ請取、正路
に可レ致、且又茶屋旅籠屋之者共、馬子人足等に
馴合、無益之馬籠相勸め申間敷、萬一不法之者
有レ之候はば、嚴敷申聞、聊猥之儀無レ之様相愼
可レ申旨、被ニ仰渡ニ候間、可レ得ニ其意候、以上。
安政五戊午年六月 谷村 村役人

随分細かに規定され居るも、愼むべしと云ふ程度
で、何となく手緩き所がある。
又馬返の高札の寫は、

富士山參詣中、村々より馬駕籠并荷持案内に
罷出候間、荷物綿入等持運び候途中にて、粗略
取計有レ之、又は辨當等食用致候趣達ニ御聽、以
之外之義に付、以來右様の儀無レ之様嚴重に可ニ
申渡旨、從ニ御役所ニ被ニ仰渡、其後御請書差上候
間、急度相愼可レ申候、萬一不束之者有レ之候は
ば、其筋江申出、差圖可レ請候、以上。

六月 最寄村々 役 人

前書被ニ仰渡ニ候趣は勿論、山内取締筋之義、
精々心付、斯る不束之義有レ之候はば、無ニ用捨ニ
可ニ訴出旨、別段被ニ仰聞ニ候間、得ニ其意、山例
先格は不レ及ニ申、聊猥之義無レ之様、急度相愼
可レ申候、萬一心得違之者於レ有レ之者、差押置、
草々可ニ申出ニ者也。

惣御師 年 行 司

此は相當嚴重である。これに據れば當時は近傍
各村より勝手に案内人足が出たので、辨當食用を
八釜しく云ふた所など頗る面白い。

又六合五勺制札の寫として掲げたものは、

覺

一、不淨嶽通り御藥草有レ之候に付、猥に入申間
敷者也

六月 御預り 田邊 伊豫

即ち高山植物採集禁止の制札である。

次に中道巡の時差出す手形の寫として掲ぐるも
のは、

差入申一札の事

一、拙者儀心願に付、當御山太行御中道修行仕度、仍而成就の御祈禱奉願候、尤行法正敷參詣可致候、萬々一御山内に於て如何様之義有之候はば、宜御取行可被下候、爲念差入申手形如件。

年 月 日

國郡村
先達 誰

當山より
御師并年司

願書なると同時に引受書の如きもので、中道廻りが相當難行とせられてゐたことが判る。祈禱料は金壹分であつた由である。

(八)富士山側の傾斜に就て

富士山の傾斜の最も急峻なる所は七合目から上で、餘程急のやうに見えても實際の傾斜は意外に緩かである。陸地測量部の測量によれば、其頂角は平均百二十度三十分の由であるから、假に百二十度とすれば側面の傾斜は $90^\circ - \frac{120^\circ}{2} = 30^\circ$ 僅に三十度に過ぎない。然るに吾人の感ずる所では四十五度以上である、これは確に富士を觀る時一種の錯覺に陷る爲であらう。自分は此錯覺は非

常に長く且傾斜の緩い裾野と併せ見るより生ずるものと信ずる、富士の側線は對數曲線をなすと云はれてゐる、そして其内、緩傾斜の部分が急傾斜の部分に比し極めて長く、且つ一定の比例を以て高さを増してゐるのに、六七合目に至り俄然其比例を破りて短距離の間に高を増す爲に、眼は之に眩惑せられて實際以上に急勾配に感ずるものと思ふ。これから考へると、富士が實際よりも急に又高く、一層崇高に見ゆるは全く裾野の御蔭と思ふ。富士山を見る名所といはれてゐる田子浦にしても、三保松原にしても、或は乙女峠、御坂峠、又は精進バナラマにしても、孰れも裾野を展望し得る所でないものはない、そして自分は最も長き裾野を有する田子浦方面を最上の富士山展望場なりと信ずる。繪は畫家の感じたまゝを描くものなるが故に、北齋の富士は五十度、廣重文晁のは四十五度乃至五十度、東海道名所圖會では稀に四十度以下のものもある、大抵四十五度乃至五十度であるのは當然であらう。けれども元來富士は繪にしても寫眞にしても、平凡たるを免れない。矢張り

親しく目睹するのでなければ富士の眞髓には接し難いのである。夫れにしても古來富士を詠ずる詩歌は多いが未だ裾野の美と其雄大とを歌つたものは甚だ尠ないのは遺憾である。唯一茶の

八の字の踏張り長し富士の山

は確かに裾野の大に着眼したるものと云ふべく、繪に於ては東海道名所圖會に一二裾野の美を示さんと試みたるものあるは大に愉快とする所である。

(九)富士の噴煙

孝安孝靈兩帝の御代に於ける富士の事變は、大噴火又は大噴煙と見られぬこともないが、事實の正確は知り難い。其後長い間噴煙の有無に就ては何等の資料を持たぬ。支那後周の義楚六帖中に日本の事を記して、

有_レ山名_ニ富士_ニ亦名_ニ蓬萊_ニ……頂上有_ニ火煙_ニとある。後周は我朝の欽明帝より敏達帝に互り、

(西曆五五七年より五八一年。)延暦の富士大噴火前二百年前後、今よりは千三百五十年前であるが、當時は噴煙せしものと思はる、其後噴煙が繼

續したか否か不明なれど、奈良朝(西曆七〇八年より七八五年)には噴煙せしものと見え、萬葉集の歌に讀まれてゐる讀人不詳の富士山歌中に、
もゆる火を雪もて滅ち降る雪を火もて消ちつゝ
……
とあり、又人丸の歌にも

年經て富士の山ももゆらめ

とあり。其外ふじの高嶺のもえつゝわたれ又はもえつゝあらむ等の歌がある。當時長い間噴煙してゐたことが明である。尋で延暦十九年(西曆八〇〇)貞觀六年(西曆八六四年)同十二年(西曆八七〇年)には富士の大爆發あり噴煙盛なりしものの如く、都良香(元慶三年即ち西曆八七九年卒す)の富士山記には

其頂中央窪下、體如_ニ炊甑_ニ(中略)其甑中常有_レ氣蒸出、其色純青、窺_ニ其甑底_ニ如_ニ湯沸騰_ニ、其在_レ遠望者常見_ニ煙火_ニ。

と記載してゐる。然るに其後暫くして噴煙絶えしと見え、延喜四年(西九〇五年)に出來上つた古今集の序文中に紀貫之は

今は富士の煙も立たずなり

と云うて居るが、間もなく承平二年（九三二）の噴火と共に噴煙復始まつたるが如く、鎌倉開府前後の歌に富士の煙を詠じたものが多い。

焼人もあらじとおもふ富士の山雪の中より煙こそ立て
源重之（村上帝の時歌人）

道すがら富士の煙もわかざりき晴るゝ間もなき
空の景色に
源頼朝

風に靡く富士の煙の空に消えて行衛も知らぬわ
が思かな
西行

然るに弘安年中に再び噴煙絶えたりと見え（此間約三四五十年）阿佛尼の十六夜日記に

ふじの煙の末も朝夕たしかに見えしものをいつ
の年よりか絶えしと問へば定かに答ふる人だに
なし

とあるより察すれば其筆者の生涯の内に噴煙の絶えしものなることは明である。更に三四五十年を経て慶長元和の頃に至り、再び噴煙ありしが如く慶長十二年（西暦一六〇七年）葡萄牙の宣教師富士山下を過ぎて煙の上れるを見たる由、大日本

地名辭書に載せ、又當時の詩人石川丈山（寛文十二年即ち西暦一六三五年九十歳にて死す）の有名なる詩に

雪如^ニ純素^ニ煙如^レ柄 白扇倒懸東海天

とあり、碩儒林羅山の詩にも

炎裡雪氷雲上煙

とある、恐らくは噴煙してゐたものであらう。寶永四年（西暦一七〇七年）の大爆裂の際には頂上の噴煙の有無は不明であるが、「驛路の鈴」には山頂噴煙を圖しあり。又根元記には『山上焼上、焦土近國に降り南は駿河の岡部、東北は武藏國栗橋の宿に及ぶ』とあるも、山上とは中腹なるや、それとも頂上なるや不明である。且つ噴煙あつたにしても一時的のものであらう。要するに今より千三百五十年前頃には煙を吹き居り其後三百二三十年間噴煙あり、後七八十年間煙絶えしが、更に噴煙始まり、三四五十年間繼續したるも、又絶ゆる事三百三十年、次に噴煙せし期間は不明なれども、百年程にして寶永四年の爆裂となり、爾來成就岳の一部に熱氣を藏するのみにて、今日迄二百

二十年許りの間噴煙なき次第である。妙に三百年前後の期間を以て噴煙と休煙とが交代してゐる。噴煙確實なる慶長頃より數ふれば今日迄三百三十年の間休煙時代が続いた譯であるから、再び噴煙なしとも限らないやうに思はれる。

有史以後の富士山噴火記事

天應元年七月六日、富士山下雨、灰、灰之所_レ及木葉彫萎。(續日本紀)

延暦十九年、自_二去年三月十四日迄_二四月十八日_一、富士嶺自燒、晝則煙氣暗冥、夜則火光照_レ天、其聲如_レ雷、灰下如_レ雨、山下川水皆紅色也。中略。延暦二十一年五月甲戌廢_二相模國足柄路_一開_二宮衙途_一、以_二富士燒碎石塞_一道也。(日本後記)

天長三年富士山焚く。(寒川神社日記錄)

貞觀六年五月(二十五日)駿河國言、富士郡正三位淺間大神大山火、其勢甚熾、燒_レ山方二許里、光炎高二十許丈、有_レ雷、地震三度、歷_二十餘日_一火猶不_レ減、焦_レ巖崩_レ嶺、沙石如_レ雨、煙雲鬱蒸、人不_レ得_レ近、大山西北有_二本栖北海_一、所_レ燒巖石流埋_二海中_一、遠三十許里、廣三四許里、高二三許丈、火焰遂屬_二甲斐國界_一。

同年秋七月(十七日)甲斐國言、駿河國富士大山、忽有_二暴火_一、燒_二碎岡磐_一、草木焦敗、土鏤石流、埋_二八代郡本栖並割_一兩北海、水熱如_レ湯、魚鼈皆死、百姓居宅與_レ海共埋、或有_レ宅無人、其數難_レ記、兩海以東亦有_二北海_一、名曰_二河口湖_一、火焰赴向_二河口湖_一、本栖割等海、未_レ燒埋

之前、地大震動、雷電暴雨、雲霧晦冥、山野難_レ辨、然後有_二此災異_一焉。(三代實錄)

貞觀十二年、富士山中央大に焚く(寒川神社日記錄)

承平二年十月十三日、富士山八方に噴出し、熔岩礫劇しく噴出し、百雷の如く鳴動し、暴雨の如く降下せり、偶々火焰飛んで大宮淺間神社燒失す。(富士史)

承平七年十一月某日、甲斐國言、駿河國神火埋_二北海_一。(日本通記)

天曆六壬子年二月、富士山北東に噴火あり。(富士史)

正曆四癸巳年八月、富士山北東三晝夜鳴動し、遂に噴火せしも別被害なし。(富士史)

長保元年三月七日、駿河國言、此頃不字御山焚。(本朝世紀)

寬仁元年、富士山北方より三ヶ所噴火せり、斯く近年富士山の噴火頗々なりしかば、爲に遂に遼拜者杜絶し云々。(富士史)

長元五年十二月十六日、富士山火、起_レ自_二峯至_一山脚。(日本通記)

永保三年二月二十八日、有_二富士山燒燃怪焉_一。(扶桑略記)

永保三年十月、富士山七ヶ所より噴火し、熔岩竝に岩片石粉劇しく噴出すると同時に富士山竟に消火となれり云々。(富士史)

永正八年八月、富士山鑛岩もゆ。(大原日記。妙法寺記)

永祿三年、富士山噴火。(日本災異志)

元祿十三年、富士山噴火。(日本災異志)

寶永四年十一月二十三日、東南側爆發。

○延暦十九年の記事は日本後記に所見なし、恐らく書名誤る。

(富士山の自然界より抜抄)

雜報

○指導標新設

日本アルプスは其大部分が國有林なので、農林省營林局では、此夏の日本アルプスに次のやうないろ／＼の新設をなし登山者の便を計ることになった。

(一)林道をつくること。(二)天幕露營の敷地の選定。(三)山中各所に休憩用の腰掛をつくる。(四)指導標の統一整理。

右の中指導標の統一といふのは、從來青年團等によつて山中にたてられてゐた統一のない指導標を營林局で整理統一し、登山者に正確な方向と進路とを知らしめようといふので、この指導標さへ整理統一され、正確なものが出来れば、登山者の不幸事はづつと減るであらうと東京營林局では自慢してゐる、時節柄登山者にとつての一大福音である。(六月十七日都新聞)

○登山路新設

【富山電話】日本北アルプス烏帽子岳からツベタ池迄二萬六千米突の歩道は昨年度に開鑿されたが、今年度は更に富山營林署がツベタ池から白馬岳に至る二萬四千米突の新道工事を雪どけ後から起工してゐたが、去る十五日を以て竣工したので同署では技師を派遣し實地踏査を行はしめた、その間には「死の關所」と稱さ

れた「八の破れ目」「奥不歸の嶮」の惡揚があり、一般登山家に畏怖されてゐたが、今回の工事で易々と踏破され得るやうになつた。斯くて烏帽子岳白馬岳間五萬米突の新路が開かれたのである。(七月二十一日國民新聞)

○清水越隧道に千古の冷水

完成の曉には世界で第六位東洋第一となる南北上越線をつなぐ清水越隧道延長六哩の工事は目下上州口八千六百八十九尺越後口七八百尺で半分餘に達したが上州口に於て去年十一月二十九日以來湧出する名狀すべからざる冷水のために作業の苦痛を訴へ且つダイナマイトの爆發を誘致して危險加はり遂に本工事を中止し水抜トンネルの設備を急ぐに至つた珍事が起きた。水は夏でも華氏四十五度位でしかも一秒間に十二立方呎と云ふ丹那トンネルと同様の排水であるから水中に浸つて工事に従ふと身體冷却して惡寒を感じ人夫の倒れるもの續出し加ふるにこの冷氣にダイナマイトが凍つて一寸石が觸れた位のことゝ爆發し現に數日前この奇禍のため工夫二名瀕死の重傷を負ふに至つた事件があり人夫何れも恟々として安んじて工事に従ふものがない有様である。鐵道省建設局橋本工事課長は語る『問題の冷水は千古の雪が溶けて斷層を貫流してゐたのを偶トンネル工事がこの斷層に突き當つた爲め一時に奔出したものでその冷たさは想像以上である、そこで最近永久的の水抜トンネル工事を完成することになつたが丹那トンネルのやうに水のため崩れたり工事が遅延するやうな心配はなく豫定の昭和五年度中には貫通する、ダイナマイトは華氏五十度位の寒

雜報 ○松原湖畔から珍植物を發見○圖書紹介

さても凍り爪が割れても爆發するので清水越工事も豫め裝置してあつたダイナマイトが俄かの冷水で凍つたのに氣付かず事故を惹起して數日前の夫婦二名重傷の事故も世間には發表されてはないが事實である。こんな事故は鑛山などでは何でもないかも知れぬが國家の事業であるから萬全の策を樹て先づこの千年の神祕な語るかのような物凄い冷水を切り離し安全に工事をすゝめることにする。(五月二十七日東京夕刊新聞)

○松原湖畔から珍植物を發見

【長野通信】長野縣南佐久郡教育會では最近松本市の矢澤米三郎氏を指導者として避暑地である松原湖畔の植物研究をした結果七八百種の種類を發見した。その中には熱帶地方でなければ見られぬ『なつばき』があり珍種『からくさしだ』『うちわこけ』があつた。更に深山でなければ見られぬ『しなのあさぎり』『こけしのぶ』『きんぷろしのぶこけ』とかがたひようたんぼく』等があつた。尙夏秋を通じて研究したら一千二百種はあるべく矢澤氏は湖畔一帯を野外植物研究所として立派なものであると賞揚してゐた。(五月三十日東京夕刊新聞)

○圖書紹介

○飛驒史料

維新前後之一

飛驒史料は多年飛驒郷土史の研究に没頭されてゐる「飛驒山川」の著者岡村利平翁の蒐集編纂されたもので、其稿本は太古より明

治に及び、事苟も飛驒に關係あるものは搜索の及ぶ限り細大洩すことなく網羅してあるといふことである。由來飛驒には斯様な事業に熱心な有志の人達があつて、早くから貴重な古書類が複製され、世に便益を興ふことが多大であつた。今又飛驒史料のやうな、一度散逸すれば容易に得難い資料を纏めた、浩瀚な稿本が、僅に一部ではあるが印刷に附せられたことは、當事者の苦心と努力とを多しとしなければならぬ。願くは引續いて全部を刊行し、以て昆山の環を完璧たらしめたいものである。

本文は大日本史料のやうに編年體で、先づ綱文を掲げて事の大要を記し、次に原文を載せてあるから、研究者に取つて最も便利である。そして事件は日に係り、日の明かでないものは月に係り、月の詳ならざるものは年に係り、又便宜合叙したものも少くない。本書收むる所は元治元年正月に始まり明治元年六月二日に終り、綱文四百餘項史料原文と共に八百餘頁を費し、涉獵の諸書は恐らく百種に上つてゐるであらう。大は政治上の問題から小は角力、川柳に至る迄採録してある。山に關するものとしては明治元年の中に一項あるのみであるが、他を類推する例として之を示すならば、綱文には

四月、桐山竹所美女峠に登りて所謂富士山を望見す
とありて、桐山玄豹の詩

雨後同井口花村上美女峠、東方山門處遙見青一點、言是富士也
神遊年已久。絕境始相攀。杜宇濕雲外。黃鸝新樹間。清風換凡骨。
冷露滴吟顏。一髮東天碧。人言是富士。

及押上詞叢の

美女峠にて富士の山を見てその景色をふ

かきて

美女峠のなかれといふ所にて富士の山見ゆるよし人の言けるに
ひかことならんとうたかひおもひしかふと此あたりにものして
物見かしようにといへる所にて東南のあわひなのそみ見るにけに
人のいいしことくらか根とみたけの間にあたりてかすかに見へ
けるはそれなりけりといとうれしうて

朝日かけさすか皇國のみたからと空にしらるゝ

ゆきのふしのね

とを載せ、次に森野繁平の「飛騨名所案内」を抄録してある。この
事に就て大正十一年に飛騨史壇で富田位峰氏は美女峠より富士は
見えぬと説き、押上森蔵氏は陸地測量部の圖上研究の結果、富士
は見える筈であると論じてゐる、それ等まで附載してあるが、長
文なので茲に引用し兼ねる、斯う聞くと何だか出懸けて行つて確
めて見度くもなる。飛騨史談會刊行、定價七圓、照會は高山町大
字三町九七九の住廣造氏宛のこと。

○會員通信

△元旦を吾家に過し二日早曉出發五日市より戸岩を見物して南
秋川を廻り人里の宿に深夜怪談にても有りさうな怪事件に遇ひ一
夜まじりとも不致候ひしも豫定の通り三頭山に攀ぢ鞘口峠より
小河内に降り鶴ノ湯に一泊、今朝多摩川を廻り丹波山野村屋方に
投宿、大正六年以來の宿帳を調べ、先輩諸兄の御記名懐しく拜見
仕候。(昭和二年一月四日丹波山の野村屋にて神谷恭)

△小生五日夜行にて鹿澤温泉に参り候處、あちらにて藤島君等
と一緒に、共に三方、湯ノ丸、村上山等に参り候。天候は餘り
宜しからず爲に眺望を恣にする能はざりしも、雪質は相當によろ
しく、充分にスキーを享樂して三日間愉快に過し申候。鹿澤も三
日續きの休みに相當賑ひ四十名程のスキー黨有之、ウインクラ
氏一行九名程の外人達も見受けられ候。(二月十一日岩永信雄)

△小生去る五日會員田中智雄氏外一名と外に松本の穂刈氏と都
合四人にて乗鞍岳スキー登山を企て第一日は大野川にとまり、二
日目は金山平の作場小屋に行きましたが天候思はしくなく九日下
山致しました。白骨よりの道と合するあたりまでは行きまし
が、遂に引返さざるを得なかつたのは非常に残念でありました。
積雪量島々附近五六寸、前川渡一尺、大野川一尺、番所原二尺五寸、
金山平四尺。

尙乗鞍大権現鳥居一帯は絶好のスキー場であると思ひます、金
山平より二千三百米邊まで二時間ですから、頂上までの往復は正
味七時間と見れば大した間違ひはないと思はれます。(二月十一日
吉澤一郎)

△十九日夜武田先生の驢尾に附して真冬のハケ岳を眺む可く出
懸け申候。二十日より二十三日まで連日天候思はしからざりし爲
赤岳温泉に滞在、二十四日漸く晴天となり申候へば膝を没する新
雪を踏んで午後十二時半、峰の松目東方二千五百米の地點に達
し、白衣着て聳え立つ硫黄、横岳、赤岳、中岳、阿彌陀岳より遠く
東駒、鍋、北岳、農鳥、鹽見、鳳凰等諸岳ズラリと並び峙つを眺め
且つ撮し、非常に愉快に有之候。(二十五日茅野驛にて岡田喜一)

△小生御示教の通り、新張行の自動車を待ち、地藏峠より湯ノ丸山に登り、角間峠に出て、角間山は睡眠不足のため放棄、午後二時紅葉館に着きました。兩三日來の暖氣にメツキリ融けたさうでしたが角間山の南面など雪は相當にありました。三方ヶ峰附近は未だにれるとの事でした。

四阿登山の目的を告げました處、積雪の模様視察旁々同行致すことになりました。翌朝七時頃山ノ湯出發古永井より四時間餘を費して午後零時三十分登頂、頂上は兩端の神祠が漸く現はれたのみで、雪に覆はれてゐました。一時間近く展望に耽つた後、下山の途に就きました、歸路は森林中の積雪を厭つて北信牧場の下り、神川を横斷して岩山の中腹をすぎ、千俣道に出て古永井に戻り延湯で遊び山ノ湯歸着は七時でした。翌日は三方ヶ峰に登り、一時間餘、池畔に遊び小諸に出て歸京しました。(五月三日山田力)

△二十七日の夜上野發北海道の山々を目指して單身これまで参りました、目的地はシャリかアホイかまだ確定といふ迄に至つて居りません。主な目的は利尻禮文にあります。今青函連絡船中にあつて波を蹴たてた船は津輕の海を勇ましく走つて居ります(二十八日午後六時津輕丸にて)

只今稚内まで参りました、これから一寸樺太まで渡ります、それから利尻禮文を片づけてから夕張からアシユハツと足を伸ばす豫定で居ります(三十日午後十時半稚内にて)

今樺太大泊へ参りました、まだ着いた許りで別にこれといふ物も見ません。樺太大のむく／＼した大きなのが目につく位です。

これからぶら／＼海岸でも廻つて見ようと思つて居ります。(三十一日樺太にて)

待ちに待つた島(利尻)の天氣も四日になつてやうやく定まり、早朝出發終日非常に愉快に暮しました天候もよし毛布や油紙などありましたので生れて始めて一人きりの露營をやつて見ました。頂上の少し下のところチシマザサの一面に茂つた中へ樺切れなど探して來て火を起し、毛布にくるまつて夜を明しました。流石に夜半寒くなり二三回目を覺しました。依つて翌五日は未明より頂上へ再び登ることを得、終日愉快に歩き廻りました。六日禮文へ渡りました。(禮文香深にて岡田喜一)

△七月十日東京發、大河原より入り鹽見岳より赤石岳までの赤石山脈の山々を彷徨ひ歩きました。幸に一日も降雨に會はず無事山旅を終へ、歸りがけに茅野から赤岳温泉を経て阿彌陀、中岳、赤岳、横岳、硫黄岳を通過し本澤に出て小諸から歸京しました。南からの歸りがけだつたせいにか八ヶ岳の樂なものには物足りませんでした。(七月二十五日芋川稔一)

△今夏圖らずも機會を得臺灣山岳會の生駒、中曾根、古平、瀨古、永田諸氏と共に大霸尖山(一一七九二尺)に初登攀を致候。行程は七月卅一日臺北發井上温泉泊、八月一日檜山駐在所泊、二日アレンタメーボン(蕃人の狩獵小屋)泊、三日大霸尖山(バーバツク)西北麓野營、四日登攀、五日アレンタメーボンを經て結城駐在所泊。六日モギリを經て上ノ島温泉泊。七日歸北。

三日夕方及四日の午前は充分偵察をなし、それより南東の尾根を網で結びあつて攀ち登り候。蕃人すら登るを得ざる山の頂に豫

想外に簡単に初登攀なしえたる喜は一生忘れぬものと存じ候。
(八月七日臺北にて沼井鐵太郎)

△拜啓。森林植物分布の調査を兼ねて蔵王に登り候。山中どこもこゝもカサ／＼して居るのに驚き候。山が低い故にもよることならんも積雪少く、有つて然る可き管のチンクルマ等一向に見當らぬは其爲かと存じ候。ガンカウランとミネズハウの蔓延せるところ此山の如く盛なるも未だ見ず。又コマクサは意外に多く候も風強き爲か岩手の如く壯大なるものを發見致さず候。コケモモは存外少量。ツガザクラ、イハヒゲは皆無の様見受け、シラタマノキ目下満開に候。(七月二十九日青根温泉にて武田久吉)

△拜啓。小生去る八月七日より五日間上高地に滞在、本年は天候悪しく四日間の雨に登山出來ず、閉口致し居りましたが、幸ひ九日に曇天續きが晴れ此機を逸せず岳川入を決行しカラダシを奥のザンダルムと天狗岩鞍部に達し天狗岩に登攀更に宿望の西穂高三角點迄縦走し九日午後六時頃岳川に再び降りました。天候日本晴にて西穂高山稜獨特の豪壯なる展望に満足が出來ました。案内者は蒲田の今田でした。(長谷川孝一)

正 誤

山岳第二十一一年第一號五一頁下段 Stabla-
winen, Oberlawinen とあるは孰れも……
lawinen の誤り。

前號黒部號一二三頁一行目左岸は右岸、一
二八頁一行目岩小屋澤岳は赤澤岳と訂正す。
對一二八頁挿入の圖版双六谷の中、金木戸部
落の寫眞は上下を轉倒せり茲に訂正旁校正の
疎漏を謝す。

會報

○第三十六回小集會記事

昭和二年六月十九日午後一時半麴町區紀尾井町清水谷皆香園に於て小集會開催、司會者藤島幹事。當日の講演左の如し。

白砂山

藤島敏男氏

曾て會員日高、森兩氏が登られたる白砂山（第十四年一號參照）に、本年四月末残雪を利して、花敷温泉より十六時間を費し山頂を極められたることを述べられたり。日高、森兩氏は上記の山に通有せる根曲竹に悩まされ、ハンノキ澤に幕營二泊せられたるに、夥しき残雪は藪を全く屏息せしめ、行程著しく捗り、この邊の山岳を跋涉するは四月中が最も好適なるべきを思はしめたり。

冬の八ヶ岳

濱田和雄氏

本年二月上旬、赤岳鑛泉よりスキーをもつて、阿彌陀岳中ノ岳鞍部に登り、こゝにスキーをクランボンに代へ赤岳頂上を極められたる際の登攀談にして、美事なる寫真と、この附近の雪質等に關する談話は來會者を益すること大なるものありたり。

尙幹事冠松次郎氏は六月上旬會員岩永信雄氏と黒部溪谷に旅行されたる際に見聞されたる、この地方に於ける水力電氣工事計畫に就き詳細に述べられ、實現の曉は黒部峽谷が如何に破壊せらるべきか、殆んど想像を許さぬ程度のものなるべきを語られたり。

當日の來會者は、別宮貞俊、高頭仁兵衛、鳥山悌成、高畑棟材、山田力、藤島敏男、松井幹雄、柳澤悟、野口末延、大熊保夫、長谷川長次郎、芋川稔一、堀龜雄、本多友司、長谷川孝一、伊藤新三、吉田竹志、仁藤安次郎、飯塚篤之助、茨木猪之吉、冠松次郎、岩永信雄、渡邊漸、西岡俊雄、戸澤英一、曾原喜久藏、黒田正夫、神谷恭、松本善二、山崎金次郎、吉田次男、岡田喜一の三十二



故名譽會員 志賀重昂氏

氏にして他に會員外の出席十名ありたり。

○小島烏水氏歡迎晚餐會

小島烏水氏歸る、我等は此報を得て久しく別れた同志と又相見の機會を鶴首して待つた、然るに氏は歸朝後直ちに關西に赴かれたので、灘萬に於ける同氏の歡迎會が先に催されることになつた。東京に於ては新緑に風薫る四月二十四日、芝區田町八ノ一臺所司會にて開催された、出席者左の如し。

田村政七氏、大熊保夫氏、岩永信雄氏、酒井忠一氏、山本六三郎氏、山口成一氏、岡野徳之助氏、佐武正一氏、松井幹雄氏、渡邊漸氏、野口末延氏、茨木猪之吉氏、飯塚篤之助氏、山田應水氏、額田敏氏、大賀智氏、松本善二氏、岡田喜一氏、辻村太郎氏、鳥山悌成氏、藤島敏男氏、冠松次郎氏、高頭仁兵衛氏、武田久吉氏、近藤茂吉氏、高野鷹藏氏。

主賓小島氏を入れて廿七名、先づ白髪の長老高野鷹藏氏立つて歡迎の辭を述べ、次で烏水氏の挨拶あり、歡を盡して散會したるは午後八時過ぎ。

會場は柳澤伯爵邸内にありて割烹界の大家村井政善氏の經營になるもの、酒はよし、料理はよし、一同満足であつた。序乍ら同夜の献立を記せば左の如し。

前 菜	飯蛸と筍の木芽味噌
吸 物	五月鼠蒸、生椎茸、白髪葱、生姜の汁
刺 身	鰯とあなり烏賊の造合
煮 物	豚の西京煮、うど、さや豌豆
皿	小鯛のけんちん焼、朝日正賀
止 碗	ヨードそばと三ツ葉の味噌汁
御 飯	お菜入
香 の 物	香久和
果 實	バナナ
菓 子	柏餅

○名譽會員志賀重昂氏の計

名譽會員志賀重昂氏は、本年三月下旬頃から健康勝れずとの事であつたが、終に四月六日を以て逝去された、享年六十四。本會は之に對して深く哀悼の意を表し、鳥山幹事は本會を代表して其告

別式に參列した。嚮には本會發起者の一人であり名譽會員であつた城數馬氏を失ひ、次で又發起者の一人で評議員であつた梅澤氏の訃に接し、今又志賀氏を喪つたことは誠に以て遺憾であるといはなければならぬ。

志賀氏が本會の名譽會員に推薦されたのは明治四十四年で、本會創立の第七年目であつた。氏は元より山岳會の成立に關して、直接に骨を折られた譯ではなく、又登山家でもなかつたが、山の先覺者として我等に「山」といふものを力強く教へ且つ味はして呉れた人で、氏を知らない人でも山へ登る程の者で「日本風景論」の名を知らぬものもあるまいと思ふ。これが氏の本會名譽會員に推薦された理由で、同時に本會に對する功勞ともなるといへる。この事に就ては本誌第六年第二號の會報に詳説されてゐるから、茲に再說することを止める。

斯く氏は登山を力説されながらも、自身山らしい山へは登られたことはあるまい、若い頃から既に非常に肥滿されてゐたから、登山は苦痛とする

所であつたであらう。確か明治二十三年の頃かと想ふ、諸方の學校で地理を教授されてゐたことがあるが、常に大抵白馬に跨つて往復され、そして體量二十何貫を自慢されてゐた。其地理の講義がまた頗る異彩を放つたもので、例へば羅馬の地理を説けば、次には必ず古羅馬のチベリウス・グラックスといふやうな志士が舌端にのぼつて来る。此際若し人ありて教室の戸を開くならば、拳を握り卓を叩いて壇上におどる先生と、森として人なきが如く其態度談話に魅了せられてゐる生徒とを見出したであらう。斯様な逸話は數限りがない。

氏は文久三年十一月三州岡崎に生れ、明治十七年七月札幌農學校を卒業し、同十九年には南洋諸島を巡視して歸來「南洋時事」の好著述が生れた。爾後約十年間は學校の教師をしたり、政教社に在りて國粹保存論を唱道したりした時代である、同二十七年には「日本風景論」が世に出た。

同三十年松隈内閣の時農商務省山林局長に任ぜられ、翌三十一年外務參事官に轉任したが、間もなく官を辭した後は、三十二年十一月支那内陸を視

察したるを始めとして、同四十一年迄に南鳥嶋、露領沿海州、大東島、樺太、韓國等を視察し、同四十三年には馬來半島、喜望峰、亞爾然丁、伯刺西、カナリヤ諸島より歐洲諸國を巡遊し、大正元年には北米加州に渡り、同三年には布哇、英領加奈陀、玖馬、墨西哥等に赴き、同六年英國皇立地學協會の會員に推され、同十一年に交趾支那、阿弗利加及南米の諸國、同十二年にメソポタミヤ、アラビヤ、パレスチナ等を視察し、足跡實に廿六萬四千哩に及んでゐるといふことである。

著書としては日本風景論、南洋時事、河及湖澤を始め、大役小志、眼前萬里、邊界の奇觀、南洋案内誌、世界山水圖說、續世界山水圖說、世界寫真圖說、地理學、世界當代地理、知られざる國々、尙ほ其他がある。此中で日本風景論、南洋時事、大役小志其他二三のものは既に絶版であつて、容易に得難い。聞く所に據ると、此等絶版のものを始め著述の全部は、更に氏の零墨斷簡をも附して全十卷となし、近く刊行の豫定で、目下氏の知己朋友たりし人の手で編輯中であるといふことで

あるから、之を手にすることを得るも遠いことではあるまいと思ふ。

○新入會員紹介

昭和二年二月二十日及四月二十四日の幹事會にて入會を許可され、正規の手續を経て、會員となられた方々を左に紹介する。

會員章番號

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

○會員章再交付

會員章紛失の届出に依り、規定に従ひて、左記會員に新番號を登録した。

一〇二一 (舊九六三) 山梨縣 宮井 幾三氏
 一〇二三 (舊四九五) 東京市 田中 薰氏
 一〇一五 (舊九一四) 大阪府 井上 篤三郎氏
 従つて會員章四九五、九一四、九六二番は何れも無効となつた。

○會務報告

昭和二年四月二十四日午後三時より芝區田町臺所司會にて幹事會開催、入會申込者の銓衡を行つた。

出席幹事 藤島、島山、高頭、冠、木暮(委任)、別宮(委任)。
 昭和二年六月十九日午前十時より麴町區清水谷皆香園に於て、幹事會を開き、大會の件に就て協議し、入會申込者の銓衡を遂げた。
 出席幹事 別宮、藤島、高頭、島山、冠、木暮(委任)。

○交換及寄贈圖書目

旅 第四卷七、八號 日本旅行協會

地質調査所報告 第九十三號 地質調査所

京都府及兵庫縣震災地調査報文と岡山市地下水調査報文とを載す。定價壹圓八拾五錢、丸善株式會社發賣。

同 上 第九十四號

大正十三年度事業報告。定價五拾錢、發賣所同上。

同 上 第九十五號

十勝嶽爆發調査報文、兵庫岡山兩縣下砒鐵概查報文及び山口島根兩縣下砒鐵概查報文を載す。定價壹圓九拾二錢、發賣所同上。

銚田地質説明書 定價三十五錢、丸善發賣。同所

ツーリスト 第十五年第第三、四號 ジヤパン・ツーリスト・ビュロー

山とスキー 第六十九、七十二、七十三、七十四號 山とスキーの會

登山史上の人々(大島亮吉)丘(館脇操)夏スキーに就て(山口健兒)藏王日記(類田敏、柏木民次郎等)以上七十二號。登山史上の人々(承前)川名のアイヌ語解(山口生)藏王日記(承前)等(以上七十三號)。八溝山(大島亮吉)天候の知識と山岳に於ける災害(岡村實譯)藏王日記(承前)等(以上七十四號)あり。

步 跡	一年二、三、四號	テタリ會
山 岳 會 報	三ノ十一	日本齒科醫專山岳會
東京武藏野山岳會々報	七、八月號	武藏野山岳會
東京登山會々報	三ノ七	東京登山會
山 岳 資 料	第四輯	關東山岳會
三ツ峠山より笹子へ、御前山、天地山及大岳縱走、丹澤山塊越等。		
會 報	四ノ五、六、七、八號	同 上
旅 アルカウ趣味	七ノ七、八、九月號	東京アルカウ會
岳 友	第三十二號	日本アルカウ會
山 嶺	第六年六、七、八、九號	日本岳友會
キャンピング	第六十二、三、四號	東京野歩路會
旅 行	第十六號	ジヤパン、キヤンピング、クラブ
山 の 叫	第三十三號	東京旅行クラブ
會 報	四年六、七、八號	美登里山岳會
飛 驒 史 料	維新前後之一	サンシヤイン旅行會
霧 の 旅	第二十三、二十四號	住 廣 造氏霧の旅會

二十四號は山の湯の第一特輯號として、山の湯の思ひ出(武

田久吉)山の湯の印象(定方金藏、神奈川甚吉、河田楨、立元祐生、佐藤竹三、市川芳太郎其他二三氏)東北とろく(小池新二)仙岩峠を越えて(田澤昌介)等あり。實費九十錢にて希望者に頒ぐ。

- The Geographical Journal, Vol. LXIX No. 5, 6, Vol. LXX No. 1.
 The Alpine Journal, Vol. XXXIX No. 234.
 Bird-Lore, Vol. XXIX No. 3.
 The Prairie Club, Bulletin, No. 166, 167.
 Butleti Excursionista de Catalunya, Any XXX-VII Num. 383, 384, 385.
 Trail and Timberline No. 100, 104, 105.
 The Mountaineer, Bulletin, No. 3, 7, 8, 9,
 Rivista del club Alpino Italiano, Vol. XLVI Num. 5-6, 7.
 Revue Alpine, Vol. 28, N° 1.
 La Montagne, N° 197, 201, 202, 203.
 Natural History. Vol. XXVII No. 2.
 Die Alpen Les Alpes, Le Alpi, III-N° 1, 5, 6, 7.

○本會規則拔萃

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌『山岳』ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第五條 本會ハ會長ヲ裁カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セシム

第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ヒ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送付スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年金六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス

第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス（以下略）

現任幹事八名
別宮貞俊 藤島敏男 冠松次郎
水暮理太郎 榎有恒 高頭仁兵衛

島山梯成 沼井鐵太郎（在臺灣）

評議員十七名

小鳥久太 武田久吉 高野鷹藏

近藤茂吉 中村清太郎 三枝守博

辻本滿丸 田部重治 山川默

及現任幹事八名。

○投稿規定

一、會員は勿論會員外の何人も投稿隨意のこと。

一、用紙は半紙又は半紙半枚大、天地左右をあげ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと。

（但し原稿用紙は事務所へ申越し次第直に御送りします）

一、一、〇、一（等）は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして當字をなす時は、其旨を括弧内に明記す可きこと。

一、スケッチは複製の際誤記、脱漏等の虞あるを以て、豫め本誌面に適せる大きさに調製ありたきこと。

（但し其儘寫眞版に附し得るものは大に隨意）

一、原稿は左記宛御送付のこと。

東京市本郷區駒込蓬萊町三一 「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

山岳第十九年總目錄 (大正十三年度)

本欄

尾瀨再探記	武田 久吉	一	通シ頁
尾瀨をめぐりて	館脇 操	一	二五
尾瀨沼へ	岡山 俊雄	一	八一
秋の尾瀨	藤島 敏男	一	一〇二
朝鮮金剛山	大平 晟	二	一三三
五月の山旅	藤島 敏男	三	二八一
赤石岳の想出	前澤 政雄	三	二九
五月の赤石岳	鹽川 三千勝	三	四二
三月の藥師岳へ	田部 正太郎	三	五四

圖版

○長藏小屋より景鶴山の遠望。上岩兩國界より尾瀨沼東岸の湯原を距て、燧ヶ岳を仰ぐ○尾瀨沼東岸の湯原に於けるネズコとオホシラビソ。尾瀨東岸森林内の下生 ○大江川右岸の乾燥したる湯原の周邊と之に接する森林。雹害を受けたるコバイケイサウ○機山峠途上の笹原に侵入せるタウヒの若木。大江川右岸の乾燥したる湯原○淺湖湯原の一部とその西縁の森林。沼上より見たる 淺湖湯原○尾瀨沼北岸の湯原と森林。尾瀨沼北岸の湯原と森林の接觸點に於てシロシヤクナギとアシと混生する狀態○追出し附近より見

たる沼尻方面。尾瀨沼北岸の小湯原とそれに續く密林 ○ナデツクガ左岸の森林と湯原の一部。沼野の先驅をなすフトキの群落とそれを圍むクロバナロウゲ○燧ヶ岳中腹より下瞰せる尾瀨沼尻。噴火口を隔て、仰げる燧ヶ岳の一峰組當○燧ヶ岳西麓を圍るブナ林とその周邊のタウヒ。燧ヶ岳西麓を圍るブナ林とその周縁のサウシカンバ○會津駒ヶ岳最高點。會津駒ヶ岳山上のチンクルマ○會津駒ヶ岳より燧ヶ岳、笠科、至佛、景鶴山を望む。會津駒ヶ岳より三ツ岩を望む。會津駒ヶ岳より見たる中門岳○沼尻川中流と左岸の森林。沼尻川源頭○只見川の上流。只見川平滑ノ瀧○只見川三丈瀑○尾瀨原の東端より望める至佛山。至佛山中腹より尾瀨原を隔て、燧ヶ、大津岐、駒、中門岳を望む○尾瀨原の一部。尾瀨の一部○大堀川右岸のシラカンバとカラマツサウ。ヤチヤナギ○ネムロカハホネ。ホロムイサウ○至佛山頂上よりリススケ峯、平ヶ岳、鬼岳、中ノ岳等を望む。會津駒ヶ岳頂上の一部○ハヒマツとハナゴケ。至佛山頂の澁木林○ミヤマウスユキサウ。カニツリノガリヤス○黒岩山中オホシラビソの密林。黒岩山中のヲサバケサ○鬼怒沼湯原のハナゴケ。鬼怒沼の一部○鬼怒沼湯原に於て。鬼怒沼湯原内に小丘をなすオホスギゴケ○湯ノ湖畔より仰げる笈岩○湯澤下より見たる男體山○尾瀨原より見たる五月の景鶴山。(以上第一號)○内金剛長安寺。内金剛望軍臺附近○内金剛萬瀑洞噴雪潭。外金剛玉流溪の一部○内金剛萬瀑洞真珠潭。外金剛仰止臺附近○海金剛其一及其二○外金剛九龍瀑。外金剛萬物相三仙巖○外金剛玉流溪連珠潭。外金剛萬物相遠望。(以上第二號)○守門山東頂直下より前守門を望む。淺草岳東腹○守門山東頂○

守門山腹より淺草岳及鬼面山を望む。守門山頂の北面○上横田附近の只見川。手前御神樂より絶嶺を望む○大聖寺平より見たる西河内岳○赤石山頂より惡澤、農島、間ノ岳、魚無河内岳、鹽見岳及仙丈岳を望む○赤石山頂より聖岳及上河内岳を望む○上ノ岳頂下より藥師岳の一部と赤牛岳を望む。上ノ岳頂下より見たる黒岳○タウヤクリンダウ。センブリ(以上第三號)

雜 錄

○尾瀬に關する傳説○尾瀬の怪談其他○高山植物雜記○尾瀬雜談○尾瀬沼の四季

○神懸山○朝鮮金剛山の施設に就て

○地名の變遷○山旅のノートから○高山植物雜記○琵琶池と大沼池○山岳漫言

雜 報

○奥穂高に避難小屋○蝶ヶ岳から槍ヶ岳へ道路開鑿○淺間山の植物研究○化石湖發見○灰まじりの雪○灰色の雪の染色體○會員通信

第一號自一三一 131
至一三四 134
○アルプス登山道路○秩父宮三峰御登山○ローガン山征服○會員通信

第二號自一三五 272
至一三八 275
○燒岳の噴火○金峰の雪で遭難○日本アルプス新登山道○會員通信

會 報

第三號自一九四 374
至二〇二 382
○第二十七回小集會記事○會務報告○退會者○本會規則拔萃○投稿規定

第一號自一三五 135
至一三七 137
○第十八回大會記事○第二十八回小集會記事○横幹事のロツキー登山○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃

第二號自一三九 276
至一四三 280
○第二十九回小集會記事○第三十回小集會記事○幹事改選○會費滯納に就て○臨時大會記事○會務報告○梅澤親光君の訃○會員の訃○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

第三號自一一四 323
至一一四 324

山岳第二十年總目錄 (大正十四年度)

本欄

多摩秩父行	田島勝太郎	一	一	通シ頁
川乗山と其附近	神谷 恭	一	四九	49
仙元峠附近	武田 久吉	一	六一	61
多摩郡の山川	(郡村誌抄録)	一	七五	75
霧島山	大平 晟	二	一	212
九重山衆の黒岳	竹内 亮	二	三三	264
日川溪谷の濫伐と保護運動	武田 久吉	二	三八	269
飯豊山	沼井 鐵太郎	三	一	333
大井川を廻り出谷川を経て 以東岳朝日岳に至る記	中岡 伸直 坂田 保憲	三	三五	363
船形山	河田 薫	三	五六	367
飯豊山に登る	佐々 保雄	三	七二	403
冬の朝日岳	武田 久吉	三	九三	424
	沼井 鐵太郎	三	九三	424

圖版

○甲武信岳より八ヶ岳及小川山を望む。甲武信岳より見たる三寶山○三寶山の森林。甲武信岳の森林○金峰山より見たるミヅカキ山○千丈頭より金峯山及朝日岳を望む○千丈頭より見たる甲武信岳及三寶山○飛龍山より白岩山及雲取山を望む○タラヒゴヤ附近より川乗山及舟井戸山を望む。タラヒゴヤより舟井戸、大田和、

高指山及御前山を望む○スダレ東北面の樹林。天目峯より望める西谷山とスダレ○仙元峠より三ツドツケ及雲取山方面。仙元峠頂上と蕎麥粒山の西南面○蕎麥粒山絶頂より仙元峠頂上、瀧谷山方面。日向澤頭より蕎麥粒山、瀧谷山、辛木ノドツケ方面を望む。○冠岩附近より三ツドツケ、スダレ、大平山の北面を望む。冠岩附近より蕎麥粒山と仙元峠の北面を望む○蕎麥粒山北背の木立。横篤尾長尾ノ丸、棒ノ折山、高水山等を望む○惣岳山北背の木立。横篤尾根北端より仙元峠頂上と蕎麥粒山を望む○日向澤峯より南に川苔山を望む。横篤尾根北端より川苔山を望む○足毛谷の岩峯。桂谷の落ち口○廣河原谷の平。棚澤附近より仰げる高指山及焼多亡山○棒ノ折。澤井惣岳山頂より石葺石山、黒山及棒ノ折レ山を望む○吊シ橋より下流を見る。大丹波川吊シ橋の淵○側面より見たる獅子口巖。獅子口巖の正面○笠山の肩より見たる白石峠、川木澤ノ頭及丸山。劍ノ峰より川木澤ノ頭、大野峠及丸山を望む○劍ノ峯より堂平山及笠山を望む。大野峠ノ頭より高篠峠、川木澤ノ頭及堂平山を望む○シラビソ。オホシラビソ○シラビソの枝。オホシラビソの枝○オホシラビソの稜果。オホシラビソの獨立樹○西御荷鈴山頂の不動尊石像。道祖神峠より西に東西御荷鈴山を望む○南より見たる乾徳山。裏より見たる乾徳山○淺間峠頂上。乾徳山頂上○天狗山より望める小倉山。木賊峠より瑞牆山を望む。(以上第一號)

○レンゲイハヤナギ○ネモトシヤクナギ○シラタマノキとゴゼンタチバナ○シラネアフリ○臺灣横斷水準測量要圖。(以上第二號)

○越後口飯豊川の不動瀑。會津口御澤附近に於ける大白布川○御手洗池より北西を望む。御西岳北側の大雪山○大日岳より見たる

御西岳と池の平。大日岳より西南に三角點の峯を望む○飯豊山神社より西を望む○鋸目尾根の一八一一米の峯附近より御西岳を望む。同上より西に地紙山、石コロミ澤ノ頭及烏帽子岳を望む。○烏帽子岳東側より西北を望む。玉川溪谷の長者原部落○大井澤川南俣落合より障子ヶ岳を望む。イヅラより望める以東岳○大島池。寒江山の南面○相模山附近。大朝日岳山腹より北を望む○小朝日岳より大朝日岳を望む。小朝日岳より西朝日岳西望○チンケルマの大群落。果實を落けたチンケルマ○イハイテウ等に混生せるハクサンイチゲ等。ヨツバシホガマとミヤキンボウゲ○ウサギギクとミヤマリンダウ。ミヤマウスユキサウ○中ツルより見たる鳥谷原山。朝日俣と黒俣澤との合流點。(以上第三號)

雜 錄

○多摩川水源山脈に就きて○小倉山○秩父笠山より丸山へ○高山植物雜記○琴川を廻りて奥千丈岳へ○兩神、父不見、西御荷鉾○乾徳山から黒金山へ○瑞麟山○川上の天狗山。

第一號 自一五九 163
至二一〇 210

紅葉の金城山と清津峽○牛奥山の雁ノ腹摺について○籠川谷大澤小舎を中心として○山旅のノートから○登山の効果とその活用○セツ森○高山植物雜記○臺灣花蓮港埔里間の水準測量に就て。

第二號 自 四六 217
至 九八 318

○飯豊山の開基と變遷○船形山行のノートより○三面より化穴山大島池方面へ○シラブと霧氷○日影大平の事○三面の事ども。

第三號 自一三二 473
至一七五 606

雜 報

○マウナ・ロアの大噴火○大菩薩連山の伐木○會員通信

第一號 自一一一 211
至一二四 214

○十勝岳硫黃山の大爆發○十勝岳爆發○十勝岳の爆發慘害○會員通信

第二號 自 九九 320
至一〇七 328

○宮様の御登山○阿蘇山及樟前山噴煙○山にての遭難者○山岳圖書紹介○會員通信

第三號 自一七六 507
至一八一 512

會 報

○第三十一回小集會記事○本會大會の期日變更に就て○有志晩餐會○會務報告○會員の計報○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定。

第一號 自二一五 215
至二二一 221

第三十二回小集會記事○會務報告○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃。

第二號 自一〇八 329
至一一〇 331

○第三十三回小集會記事○退會者○會員の計報○吉野玉雄氏の遭難○會務報告○交換及寄贈圖書目。

第三號 自一八二 513
至一八五 516

附 錄

○多摩郡の山川項目索引(第一號)○山岳第十八年總目錄(第二號)○會員名簿(第三號)。

會 告

第二十回大會豫告

日 時 來る十月九日(第二日曜日)午後六時より

場 所 赤坂區溜池三會堂(市電葵橋下車)

講 演

米國の太平洋岸に於ける山岳に就て

幻燈使用 小 島 烏 水氏

活動寫眞

黒 部 峽 谷 (文部省撮影)

二 卷

尙ほ當日は會場に多少の參考文書寫眞等を陳列致置候間午後一時より入場御隨意に有之候

昭和二年九月二十二日印刷
昭和二年九月二十五日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

編輯兼發行者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

發行所

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會

振替口座東京四八二九番

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

發賣所

東京市神田區表神保町

東京堂

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXI

1927

No. 3